
世界のありかた

空人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界のありかた

【Nコード】

N0937J

【作者名】

空人

【あらすじ】

ほんたじよ印刷者 本城樹女・18歳は、迷子になった。江戸時代ごろの日本に来てしまったのだ。日本だけど日本じゃない、そんな世界で樹は男として待として生きていくことになった。「俺に何かようか?」「え? 男だったんですか?」「いや、女であってるけど、本当のこと言えないんじゃないあ〜!」「ツハ。女に見えるってか?坊、目が悪いんじゃないねえの?」「ふふふ。ヤンキーな武者の出来上がり」

序：異世界と幼き日と（前書き）

誤字&感想お待ちしております。

序：異世界と幼き日と

秋の風情のひとつでもある、紅葉が木枯しこからによって地へと舞い落ちる季節。

この季節になると、さすがに家の外に出るものは少なかつた。

出ている者といえば、若く幼い子供らや、何かの用事により片手に平包ひらひらみを持った女がわらじをずりながら、いそいそと目的地へと歩いている者だけだ。

しかし、人気ひとけがないのはそれ以外でもあるようだ。

「明日は、何か祭りでもありましたか？宇津木殿。」

宇津木と呼ばれた、五十を超えた男は、隣にいるまだ若く幼い顔立ちをした少年を見た。

「忘れたか？清水殿しみずどのが警護けいごを強めよとおしゃっただろう。その理由を忘れたのか？」

「はい。ですが理由は、宇津木殿などの上忍護師じょうにんごししか知りませぬ。」

「はて、そうだったか？」

「そうです。ぼ・我々のような護子ごしには、詳しいことは伝えられておりませぬ。」

「ふむ。では、それと分かっているなお理由を聞くのか？」

「いえ。私が知りたいのは、明日祭りのようなものがあり、そのために城下町の者らは準備をしているのかと思っただけです。」

そう言いながら、少年は周りを見渡した。

「……。まあ、そのようなものだろう。そんなことより、いいのか？聞いた話では、瀬原せはらが来ると皆が騒いでいたが。」

宇津木が、曖昧あいまいに答えながら話を変えた。
対する少年はそれに気づかず、しまった！！という顔しながら、失礼しますとその場を去っていった。

「誤魔化せたか？しかし、勘かんが良いのもなんとやらだな。」

宇津木はそう言って肩にかけてある称号を表す札を正した。
また、宇津木は走り去って行った少年の方向をもう一度見た。

（確か奴の名は、奏石そうせき 小葉このはだったか。）

一座生まれの童のあまりの腕の良さに『武士にならずに何者になる！！』と、剣けんの舞を見ていた將軍から言われたほどだ。しかし、そのコノハはさらりと『笛吹きです。』と答えたそうだ。

一座の者は、戦を嫌う。そのため、戦にはでることはまずない。けれど、剣の舞を見ただけで將軍ともあろう者が、ただの笛吹きを武士にしたがるだろうか。

（いったい、いつ、どのような形で、奴の腕の良さを認識したのだろうか？）

宇津木は、コノハの実力をまだ知らなかった。けれども、頭は良く勘も良いことだけはこの数日の間でわかっていた。コノハにとって宇津木は、上師に値するものだった。また、宇津木にとってコノハは同士である上忍護師の草十朗の弟子に値する。それは、護子を育てる上忍護師の役割であるがためにそのような関係になっているのだ。

宇津木はコノハとはまったく逆方向の道を歩き出した。
その方向に上忍護師の役所があり、さらにやり残した大量の仕事が

残っている場所に意気消沈しながら歩いて行つた。

一人の幼い少女は不思議な体験をした。

お祭りの間に起こつた不思議な出来事。

いつもは静かで誰も来ない神社の道は出店が立ち並んでおり、人通りも多く騒がしかった。

少女は、両親と一緒にお祭りに来ていた。

ピンクの金魚の柄の浴衣を来た少女は嬉しそうに両親より前を歩いていた。

ふと、笛の音を聞いた気がした。

周りを見回しても、笛を吹いている人なんていない。

少女は、両親に問うた。

『パパあ、ふえの音がしたよお？』

『笛のかい？』

『うん！！きれいな音がしたの、でも少しさみしそつたよ？』

『そうか……。じゃあきつと誰かに聞いてほしいんだね。』

『そつなの……。じゃあ、わたしが聴きに行つてあげる！！パパ、ママちよつとまつててね！』

『あ！　　ちゃん！！』

両親が自分を呼んでいるが、振り返りはしなかった。

だって、笛の音のほうに気になっていたから……。

パタパタと下駄で一生懸命に走つた。

笛の音に近づいたと思つたら、周りに誰もいなくなつていた。

両親がいなのは当たり前だ。なんせ、置いてきたのだから。

でも、他の人がいなくなるのはいささか怖くなるもので……。

それに……笛の音も聞こえなくなつてしまつたのだ。

『ふええ〜、どこ〜?』

大きな声で聞きたいが、怖さのほうに勝っていて小声になってしまっていた。

でも、少女は泣かない。強がっているわけではない。ただ、涙が出ないだけ・・・。

ツパキ。

少女は、自ら枝を踏んだ音に飛び上がった。

すごく怖いが、涙は出ない。感情が壊れているせいではない。ただ、涙がでないだけ・・・。

『だれかいるの?』

突然、自分より幼い声が前から聞こえてきた。

声のしたほうに少女は目を大きく見開いた。もともと大きな目は零れ落ちんばかりに開いている。

『ねえ?だれかいるの??だんちよお?』

『ち、ちがうよ!!! だもん!』

『だあれ?一座の人じゃないの?』

『いちざ???ち、ちがうもん! はxxxxxxxx小学校に通っ

てる人だもん。』

『しょうがつこう???』

『そうよ!!--!』

少女は相手が自分と同じぐらいの子供だと知ってその子のほうに駆け寄った。

しかし、相手を見てすごく驚いてしまった。

相手の少年は浴衣のような、着物のようなへんな服装をしていたのだ。

しかも、髪の毛を昔の人のように一本に結び上げていたのだ。けれど、顔立ちはきれいで子供ながらにこの子かわいいなあっと思っ
っていたりした。

『あなたはだあれ？』

『・・・ぼくは、　だよ。』

『へんなかつこしてるのね？』

『・・・変じゃないもん。衣装だもん。』

『いしょう？？なにかの芸をしたりする人？』

『そうだよ。ぼくは笛を吹くんだ!!』

『ふえ・・・あなたが笛を吹いていたの??』

『え・・・。聞いてたの?!』

『うん!!きれいで、かなしい音。』

『悲しい?』

『うん!!パパがね、その音はだれかに聞いてもらいたがっている音だよっていつてたよ?』

『だれかに・・・聞いてもらいたがっている音。』

『そうなの!!だから、わたしが聞いてあげようかと思ってきてあげたの!!』

『ぼくのえんそう聴いてくれるの?』

『うん!さつきからそういつているでしょう??』

『う、うん。ありがとう!』

そう、言って少年は嬉しそうに笑った。

そして、少年は演奏を始めた。

少女は自分より幼い少年の笛の音を聴いているつもりだった。でも、気づいたら神社に戻っていたのだ。

両親はいつの間にか戻ってきた自分達の娘を見て驚いたが安心もした。

父親は問うた。『聴きに行けたかい？』と。

少女は始め何故ここにいるのかと不思議そうな顔をしていたが、父親のこの質問には笑顔で頷いた。

少女はあれは、夢なんかじゃないと思った。

でも、年を重ねていく上で夢だったのではないかと疑問に思い始めた。

そして、少女は思った。

『もう一度、あの子に会えば夢じゃないってわかるんだ。』と。

序：異世界と幼き日と（後書き）

付け加えてみました。主人公の過去の出来事です。

夢なのか、夢じゃないのかそれはいつれ気づくことになるでしょう。

1話：春・・・それは、敵対するもの。(前書き)

樹視点でいきます。

出始めは、学校からのできごと。

1話：春・・・それは、敵対するもの。

春、それは新しい季節の始まり。

春、それは恋人たちの増殖期。

春、それは虫の増える嫌な時期。

春、それは私がもつとも可哀想になる合言葉。

ほんじょうつぎ
本城樹彼氏れきいない暦約18年。

意地はつてんの？理想が高すぎるんじゃない？自分を見直してみたらあ？だの、あくだこくだ言いやがって！！ンざけんな・・・！！

「・・・つき。・・・いつき・・・樹ってばあ。何独り言ってるの？」
「・・・ツハ。え？！いや、別に何も言ってるないよお？空耳じゃない？？」

「まったくもお、また心の中でストレス解消してたでしょう？駄目だよあ。言いたいことがあるんなら、私に相談してって言うてでしょ。」

ブーッと膨れた幼馴染を見て私はため息を付いた。

樹・・・それは私の名前。性別？ツハ。聞くまでもないでしょ？お・ん・な！よ。まさか、今の会話で男なんて思っちゃいけないでしょうね？？残念ながらちゃんと女でございます。

それにしても、幼馴染であるせいか菅原すかわら 由衣ゆいは鋭い。私のことがなんでも分かれると自身は言っている。間違ってもないけど、少し違う。私が彼女に相談しないのは、相談できないことだから、と言うことだ。

あなたにはいるだろうか？恋愛上手な友達に『彼氏ってどうやって作るの？』と単純かつアホな質問をしたやつに『そんなの、勝手に言ってくるんだよお』なんて言ってくるやつ。

いないだろう？いないよね？そんなやつは由衣だけにしてほしい。

「あー！また、いーちゃん妄想してるぅ。」

「いや、違う。断じて違う。妄想なんかしてない。ただ、自分の・

」

「不甲斐なさに嫌気が差した？」

(おおおおおい。誰だ?!今、ム力つくことを言ったのは!!)

「あれ?鈴乃ちゃんであ。おはよう。」

「おはよう。菅原さん。それから・・・男女さん。」

「・・・。男女って誰のことだよ。私は女ですよ?それすらも分からないのですか?」

「あらあら。私ったら、間違っていたみたいね。ごめんなさい。

男さん。」

「ん?うん?何か変な言葉を聞いたような気がしたんですけど、気のせいかしらあ。しかも、名前のようになってるんだけど。」

「あら、気のせいじゃないわよ?逆に男のあなたが変な言葉遣いをしているような気がするのだけど。こちらのほうが気のせいなのかしら。ねえ、菅原さん。」

横でニコニコ笑っていた由衣は突然話を振られてオタオタしていた。ざまーみる。

にしても、よく口の回る女だこと。

(あー言えばこー言う。私の天敵、柴原さいはら、鈴乃すずの。幼馴染よりも強敵、これ重要。)

一応説明しておこう。ここは学校で3年の教室の隣の廊下である。つまり、廊下でぎゃーすかぎゃーすか騒いでいるということだ。意味ないことを騒いでいるわけではない。

この女に今日の嫌味に勝たなければ、一日中言われ続けるのだ。
『男さん。』と。いや、さんが付かないかもしれない。
それにしても、ここまで騒げば来るはずだ。うっさいおじんが。

「コラ！ ！また、お前たちか。3年にもなつてよく騒げるなあ。

三馬鹿トリオ……。」

「まあ、相崎先生。おはようございます。先生、ひとつ訂正をしていただきたいのですが。」

「おお、おはよう。柴原、でなんの訂正だ？どこも間違っちゃいないだろう？」

「間違っていますわ！三馬鹿ではありません。馬鹿はただ一人、そう本城さんだけです。」

「そうよう。いーちゃんだけだもん、天然ばかさんなのはあゝ。」

(こいつら……。)

やっぱり出てきた、おじん。相崎 進^{しん}26歳、独身。女子生徒からも男子生徒からも大人気なお人。私が大嫌いな先生その一人。それにしても……。

「おお、そうだったな。2人は成績優秀者だったなあ。馬鹿はいけなかったかあゝ。ハハハ。」

私の周りには味方がいない。これってどうよ。可哀想じゃない？？

「ではあゝ、先生様さようならあゝ。」

ここで本当に頭のよろしい私は逃げるのです。これからあろう、儀式に出とうないのでございます。

「あ、コラ待て！！逃げるのか！！！樹！！！」

(ライコラそっちこそマテや！何故に呼び捨てなんだ？！さも、男を呼ぶかのように呼ぶなや！)

でもそんなこと思っても口にしないぞ だって、口にしたらその分の時間が無駄で捕まっちゃうじゃんか。ああ、やつぱり私って頭いいなあ。

昔、由衣も言ってたし『いーちゃんは悪知恵だけは働くよねえ』。『って！！うん？待てよ、褒めてないって？そんなことないよ 最大限の褒め言葉じゃん！
そもそも、やつは人を褒めたりしないからあゝとかなんとか考えてたら、悲しくなってきた。

「待つてって言ってるだろう！！！！」

(まだ、追いかけてたんだ。おじん。まだ、若いからか？頑張るなあ。)

おじんこと相崎先生はこちらが全力疾走なのに対して負けじと全力疾走で追いかけて来ていた。

私の足は速い。普通の高校生男子よりも、スポーツマン並に速いこの足だけは自慢できる。

(ツフ。勝てるかい？ただ若いだけの先生が、私に・・・)

「お、お前本当に始業式出たくないのか？な、何か理由があるんじゃないのか？？」

(おお、先生が珍しく鋭い。息切れしながらも頑張って走ってる

んだからお答えしてあげよう。」

ちらりと、走っている場所を確認した。新1年生の教室からはかなり離れた場所に自分たちはいる。

つまり、アイツはいない。それだけでも、心休まるが油断は大敵。なんせ、頭が良いにもかかわらず、わざわざこの高校に入ってきたのだ。未だに理由が不明だが……。

「頑張った先生に、理由をお答えいたしましょう。」

足を止めくりりと振り返った私を相沢先生は息を整えながら待っていた。

「答えは簡単。……弟が、その儀式に出るからですよ。」

「はあ？」

やはり、この先生も驚いたらしい。私に弟がいることにはなくて、くだらない理由に。

この理由を分かってくれるは、幼馴染である由衣だけだった。

しかも、あるうことが由衣は亜樹あきがここに入る理由を知っているのだ。姉である、私が知らないというのに……。

「くだらない理由と思いますでしょうか？ 私には違うんです。そんなわけで、バアイ先生。」

あ、待ってって！という言葉が後ろから聞こえたが無視だ無視。

私は、学校からこれまた全力疾走で出て行った。一心不乱に走っていたせいなのか、気づけば家に帰る途中の見慣れた町並みが広がっていた。

さすがにここまで来れば、安心でき歩くことにした。
私が、弟を避ける理由。

(いつからだったのだろうか？私が弟を避け始めたのは。きっと、あのくだらない喧嘩のせいだ。)

私と亜樹が喧嘩をし負けそうになるといつも私は卑怯な手を使う。それは亜樹の姉であることを主張することだった。

普段なら、私が『姉を敬いなさい。』といえば、むくれつつも大人しくなる。なのにこのときだけは、違った。

(初めてあんな言葉を聞いたせいだきっと。・・・『イツキは姉じゃない！』かあ)

「まったくなえるよ。いくら血が繋がってないからって、あんな言い方はないだろう？他にほら、あれだ。

他人が口を挟むなとかっだったらさすがの私も黙るがな。あの言いは誤解を受けるだろうに。主に親たちに・・・。実際母は恐ろしい勘違いをしていたしなあ。」

勘違い。そう、母が『あらあ、亜樹ちゃんたらこんな男みたいな子好きになっても意味ないわよ。亜樹ちゃんはイケメンなんだから、可愛い子をゲットしないとね？』

なんて言いやがって。亜樹も亜樹であそこで赤くなりやあ、勘違いが確定するだろうに。

そんなことがあったせいで、妙な空気がお互いの間に流れてしまつて、謝るうにも謝れなくなったのだ。

「元はといえば私が悪いんだけどさあ。」

まあ、家に帰って来たのに謝るかあゝなんて、のんきに考えていた私がいた。

まさか、家に帰れず迷子になるとは知らずに……。

1話：春・・・それは、敵対するもの。（後書き）

あれえ。まだ、現代にいるよ。何故だ??こんなはずでは・・・。
次は確実に、現代にいません。きっと・・・いないはず。にし
ても、複雑ですね。

2話・高校生迷子になるの巻

見渡す限りの森林。

なんて、自然豊かで温暖化が心配されない場所なんでしょう。人すら見当たらない。

私は、認めたくなかった。

決して意地を張りたかつたわけではない。信じたくなかったのだ。この状況を……。

「迷子の迷子のなんとくか。あなたの、お宅はどこそこでえ〜」

あ）（……。歌詞なんか、違わないか？気のせいかな？気のせいさあ）

私の思考回路は本気でショウト寸前だった。迷子だからではない。断じて違う。

今の状況に頭がついていけないのだ。

普通の人なら私の状況が分かってくれるはずだ。だって……。

たかが、帰宅していただけだ。夜のせいで暗かつたわけではない。昼間だったし。

変なやつらに追われていたわけではない。むしろその方が良かったかもしれない。

よって、森の中に入ることはまずありえないからあ。

（もし、ここに由衣がいたら、『いーちゃん、言葉の使い方間違ってるう〜。』なんて言ってるなあ〜ああ見えて、由衣頭良いからなあ〜。あと、性格さえ良ければ……。って待てよ、もしかしたら私は今夢を見ているのかもしれない。）

「きつと、そうだ。あまりの暑さに貧血で倒れたのかもしれない。」

「(って、ありえないからあゝ。暑さって春だぜ？それに、貧血ってなったことすらねえよ。)」

ザクザクと草を踏みつけとにかく民家のあるほうへと足を傾けた。つといてもどこになにがあるのかすら分からないため、適当である。

適当に歩く私。そういえば、高校の進路も適当だった。自分の頭で入れるところを探し、適当にパンフレットに紹介されていたところを見学もせずに決めたのだ。それに対して亜樹は怒っていたなあゝなんて思い出す。

(私が何かを適当に決めるとすぐに怒る亜樹。優しい子、心配性な子、でも変な子。)

「亜樹と初めて会ったのは・・・たしか9年前じゃなかったか？長いようで短かったなあ。」

ちよっくら、回想に浸ろうとしていると見えてきました。一軒の家が・・・？

(よっしやあゝ！とか思ったけどちよいと待て。あれ・・・)

「家じゃなくね？小屋？いやいやいや、もし家だったら失礼ですよ私。」

「確かに、失礼だな。お前さん。」

「！！！！！！」

「どうしたかね？変な格好したお前さん。」

(気絶してもよろしいでしょうか？すごくビックリしたのは私だけですか？私しかないかあ。)

一人で一生懸命に考えていたところに、しかも行き成り誰だか分からないやつに独り言に参加されたら、会話になっちゃうじゃないか！

なんて、そんなことはどうでもいいのだ。

問題は目の前にいる、おっさん。しかもなんか、変な格好って言われたのですが。

「わ、私から見たらアンタの方がよっぽど変な格好をしているように見えるよ。なんか江戸時代風だもん。」

「お前さんから見りゃあわっちの格好が変とな？わっちからお前さく見たら格好が変と。ついでに江戸時代のおようだと。」

「そうそう。お互いに変ってことなんだけど、江戸時代ってわかるよな？」

「ふ〜む。江戸時代？江戸ならあるがあ〜江戸時代はあ知らねえよ。」

「？江戸と江戸時代は違うの？ああもう！わかんなくなってきたあ！」

「そかそか、わかんねえ〜か。じゃあ、とりばあ〜に聞くべ。ついてきんしゃい。」

「はあ〜。付いて行きます。」

(うん？なんか丸め込まれた？)

気づいたら、変なおっさんに付いて行くことになっていた。おかしい、いつこうなったんだろう？

しかも、江戸と江戸時代って違うの？一緒かとも思っていたんだ

けど。

そもそも、ここ日本だよな？言葉通じるし……。通じてたよね？ね？

なんか微妙に訛ってるというか、方言というかなんとというか取り合えず付いていって『とりばあー』に会えばいいのか？

(にしても、通る道は平道じゃなくて森の中かよ。)

「ここんさ通れば、上忍護師らに見つからんべ。」

「へえ〜。ってなんだよそれ??」

「詳しくは、とりばあーに聞くべ。」

また出たよ『とりばあー』ってか、このおっさん私の心の中読んだ？

しかも、『じょうにんごし』ってなんだよ。どんな字だよ。わかんねえ〜

「べつに、心さ読んでなかよ。お前さん顔に出てるべ心の声。」

「??悪い。全然わかんねえー。」

「よかよ。時期わかるさあ〜。」

「そっか、ならいいんだけど。」

(ついでに帰れるんならいいんだけど。)

どんどん森の獣道けものみちを通っていく。通りにくいっいたらありやしないけれど、おっさんのおかけで進みやすくなっていた。

このおっさんわざわざ鉈なたで邪魔な草を切り倒していたのだ。

(そういやあ〜名前聞いていなかったな。

変なおっさんだけど、悪い人じゃなさそうだし聞くのは別に悪い

ことじゃないし……。)

「なあ、アンタの名前なんていうんだ? ……っあ、先に名乗れ
って言うのなら名乗るけど。」

「わたちの名は天羽^{あめつ}。主なるお方が付けてくださった名じゃ。」

「あもう? つそつか、あるじつてえと誰かに仕えているってこと
だな。んじゃあ私が名乗る番か。私の名は、樹。本城 樹っていう
んだ。誰にも仕えてなんかないからな。」

「いつきかあ。大樹の樹のほうかのう?」

「あ、ああ。それでいつきだ。あもうは、どんな漢字なんだ?」

「天羽は、天からの贈り物。それは羽であったという意味じゃ。」

「え、ええつと、天と羽であもうっていつのか?」

「そうじゃ。」

「良い名だな。」

「そじやろうて。樹は誰にも仕えておらぬと申したが、神すらに
も仕えぬのか?」

「神は仕えるのもじゃなくて、拜むものだろう?」

それに、神様は人を助けるためにいるんじゃないと思うんだ。」

「ほう。」

天羽は、私が続きを話すのを促した。

変なやつと思われているかもしれない。昔も変なことばかり言っ
て馬鹿にされていたような……。
でも……。

(天羽なら聞いてくれるかもしれない。)

「神様は、私の父親を助けてはくれなかったよ。もしかしたら、
父は悪いことをしていたのかもしれないとも思った。でも、助けて
ほしかったんだ。お祈りだって毎日した。祈りだけじゃ足らないの

かもしれないって思った。だけど、私にできることは限られていた。なんせ、今以上に幼く子供だったからね。」

「だから、神は人を助けるためにいるのではないと？」

「うん。祈り倒して助かったやつがいたかもしれない。でも、それはそいつの努力の方が大きい。だから、神様は人を助けたりはしない。ただ傍観しているだけ。まるで……。」

「……昔、人がそう望んだようにと？」

「うん。私はそう考えている。」

それ以降私たちは黙ってしまった。私に変なことを言ったせいかもしれない。

でも、最後まで聞いてくれた人は天羽の他に誰もいなかった。

(違う。いなかったんじゃない。私が話さなかったんだ。)

互いに無言になっても足は動いている。進むべき道を知っているかのように。

私はちらりと、天羽を見た。天羽は何やら考え事をしているらしい。

(……変なやつって思われちゃったかな?)

そう考えるのが妥当かもしれない。

でも、天羽は違うことを考えていたのだと後で分かった。しかも、大変くだらないことを……。

「もうすぐ森を出る。気をつけなされ、決して驚くことなかれ。」

いきなり天羽が口を開いた。驚いたけど、それ以上に驚いたのは森から出た後の風景だった。

(はい?)

「いや、まてまて。ここはどこ?」

「ここは、唐津^{かづ}じゃ。江戸よりは遙かに遠く、

また名も知られていない地方のひとつじゃ。どつじゃあ? 田舎だろつ。」

何故か田舎であることを自慢している天羽を見て、私の思考は完璧に止まった。

(見慣れぬ風景。見慣れぬ服装。聞き慣れない言葉遣いは関係ないか。)

「信じたくはなかったけど、やっぱり・・・。」

「ほう! 田舎と聞いてそこまで落ち込みなさんなや。とりばあーに聞きゃすべて分かるに。」

(いやいやいや。田舎に落ち込んでたわけではないぞ。)

私の考えは他所^{ちよ}に天羽はどんどんと目的地に進んでいた。私もその後^{のち}に付いていった。

でないと、道がわからないからだ。

(またもや、迷子になるなっことは避けよう。方向音痴だと自分を疑ってしまう。)

道行く人は皆が皆、私をモノ珍しそうに見ていた。

(当たり前なんだろうけど、なんだか違った意味で見られてそう。

なんでだ？)

天羽は高台にある一軒の家の前で止まった。
最初は家なのだろうかと思っただけ、家だと認識することにした。
現代の日本にはまずありえそうにない家。

(そもそも木造建築って……。)

「ほれほれ、入らんか。とりばあーは樹のことを待っているべ。」
「あ、うん。って……。」

(『とりばあー』は何者？私がここに来ること感知していた？?)

私はその家に入る前に天羽にお礼を言おうと思った。だから振り返った。

振り返ったらまずかったのかもしれない。

天羽がいたところには、一羽は小さな白い鳥がいたからだ。

(はて？はてはてさてはて。!!!!まさか天羽??!!!)

「そんな馬鹿な!!!」

「はよ、入らんしゃい。」

一人驚いているところに声がかかった。それは、家の中から……。

(取り合えず入ろう。とにかく入ろう。そして聞こう。天羽のこととか……。)

私の頭の中には天羽のことしかなかった。だってそうだろう？人

が鳥でした。なんて誰が信じる？

目の前で起きた現象にすら、さっきからついていけない私がいるというのに。

そして私は、思い切って戸を開いた――。

2話・高校生迷子になるの巻(後書き)

長かった。森の中がすっごく長かった。

やっと、とりばあーのところまで行った。これからです。

説明やら何やら知ることができるのは……。

3話・ヒトor鳥の悩みどころ

失礼します。なんて言って入ったのはいいけど、待っていたのは巫女さんだった。

(誰だ!!ばぁーさんなんて言ったやつは?!)

『とりばぁー』のほうは入ってきた私を凝視していた。いや、観察と言っていたほうがいいのかもしれない。私も『とりばぁー』を観察するついでに部屋の中も観察してやった。

(なんとというか、質素と言いますか?でも、結構高そうな置物とか置いてますよ?)

「これこれ。挨拶もなしに先にあちらこちらと観察するではない。

「あ、すみません。」

怒られてしまった。巫女さんを怒らせると怖いと授業で習ったことがある。まあ、相崎先生サマのお授業でしたが……。

「して、樹とやら何故なにゆえここに来た?」

「なんで名前!??てか、名前分かるなら理由もわかるんじゃない?じゃなくてないですか?」

一瞬目が光った気がしたので、慌てて言葉遣いを正しました。

『とりばぁー』はニタリと笑った。

なぜ笑ったのかは分からない。当たり前だろ?分かるはずがない。分かったほうがスゴイ。

「確かに確かに。名は天羽から聞いた。しかし理由は聞いておらんよ。」

「あ、天羽！！アイツは人なんですか？鳥なんですか？もしくは鳥人？」

「まあまあ、そこはおいおい説明いたしましょうぞ。」

「はあ。．．．あ、そっかここに来た理由だろ？ええっと、なんて説明すればいいんだろう？」

「まあ手短にお願いしますぞえ。」

「．．．．．いや、それ無理だから。」

「そうか、それは仕方がございますまい。では、いくら時間を使ってもよかなので、説明を。」

「あ、はい。」

私はとにかく説明をした。どこから話せばいいのか分からないので、取り合えず家に帰っている途中に気づいたら森の中にいて、気づいたら天羽が隣にいて、混乱していたら天羽が『とりばあーに会えばいい』と行ってここまで連れてきてもらったということ。をなるべく手短に話した。

「そーかい、そーかい。樹とやら、ここに来たのは初めてかえ？」

「いや、当たり前じゃ、当たり前です。」

「そーやない。この世界に来たのは初めてかと問うておる。」

「．．．へ？世界？？」

「だいたいは、気づいておるのであろう？ここは日本で日本じゃなかと。」

「！！！！」

「その昔になあ、旅人が来たのじゃ。わしを訪ねになあ。この話を聞かえ？」

「聞かせてください。もしかしたら．．．。」

「もしかせずとも、そなたの世界の旅人じゃったよ。あれはなあ．．．」

とりばあーは話し始めた。

なんでも、とりばあーはなんでも知っている者として有名だそう。そのとりばあーの知恵を求めて何人も人が尋ねてきたのだと。中には將軍すらいたと。けれど、一番の印象に残った者がその旅人だったそうだ。旅人は言った。

『自分は異世界から来ました。国は同じ日本です。始めは時代だけが違うのかと思っていたのですがどうも違うようで．．．。お世話になった方に貴女はなんでも知っていると聞きました。だから教えてください。自分の世界に帰る方法を．．．。』

とりばあーは驚いた。そして申し訳なくなつてそう。とりばあーにはその旅人が帰る方法なんて知らなかったのだから。だから、とりばあーは．．．。

『すみませぬ。貴方の知りたいと申すことにお答えできません。ですが、きつと意味がありここに来たのでしょう。その意味を探し知ることできつと帰れると思われませぬ。』

とりばあーは旅人がひどく落ち込むと思つていた。しかし、旅人は思つていたのとは違う表情をしていた。笑つていたのだ。とても、嬉しそうな笑顔で．．．。そして旅人は言った。

『ありがとうございます。探してみます、ここに来た意味を．．．。そして見つけ出して帰ります。向こうには、妻と娘が一人いますから。』

『そう……ですか。あの、貴方の名前を聞いてもよろしいでしょうか？』

『はい。私の名は、本城 時宗ほんじょう ときむねです。』

『そうですね、貴方の旅に神が見守っていますことを心より祈りしましょう。』

『ありがとうございます。それでは……。』

そういつて旅人はこの村から立ち去ったのだと。

それから数年後、旅人は戦にでたのだと風の噂で聞いたそうだ。

しかもその戦はとて有名なものだと。戦は【大蛇の滅亡】と呼ばれているそうだ。

その後の旅人の噂は聞かなくなったという。

私は途中からぼーっとしていた。有りえない話の中に有りえない名前が出てきたからだ。

私と同じような人が、ここに来た。この世界に来た。そしてその人の名が……。

「本城 時宗……。」

「その名がどうかしたんかえ？」

「私の名は本城 樹。」

「もしかしたら、父親じゃったんかあ？」

「違う。そんなことない。だって父は事故で亡くなったのだから・

……。」

「そうかいな。しかし、どーする？樹、お前も異世界の者だったら帰り道を探さんといけん。」

「そう……ですね。」

「……。今日は休みなさいな。天羽に床あるところに連れてっててもらいなさね。」

「ありがとうございます。」

私を気遣ってくれたのだろう。話は中断された。

家の外に出ると、空はオレンジ色に染まっでいて。夕焼けきれいだなあゝなんて思ってみた。

天羽が話しかけてきたときも曖昧に返事を返していたのだけど、ふと天羽のほうを見ると鳥だった。

そこで頭がクリアになった。ごちゃごちゃしていたのがいっきに消えた。

(天羽のこと聞き忘れた。)

「天羽・・・アンタ何者??人なの?鳥なの?それ以外なの??」

天羽はいきなり聞かれた質問にキョトンとしていた。

「わっちは、鳥でつさあ。」

「でも、私に最初会ったときは人の姿だったじゃん!!」

「当たり前ですわあ。もし鳥のまんま出ってたあら、捕まえられて売り飛ばされちまう。」

「そ・・・そうなのか?」

「そうですねわあ。だから、ここの村のほとんどが人の姿になつてりましよう?」

「・・・はあ?つえ!つということは、ここの人たち皆、天羽みたいなやつらだつてこと?」

「みんなではないですけん。人間もちゃんといますわあゝ。」

私はどうやらとんでもないとこころに来てしまったらしい。自分たちの周りを見る。人の姿ない。

変わりに各家に明かりが灯っていた。そして、私は気づかなかつた、話が逸れていることに。

(天羽のようなやつらが、人形ひとがたになり生活している。

日本じゃない日本に私はいる。あの、ここに来てしまった旅人さんのように……。)

「よし!!明日また、とりばあーのところに行って他の話しをもう一度聞いてみよう。」

「それがよかですね。」

「あ。そういえば、なんでとりばあーっていつの?名前なのか?」

「ほっほう。違いますけん。名前じゃなか。」

「あ、そうなのか。じゃあ明日はちゃんと名前聞かないとなあ。」

そんな会話をしつつ、天羽に連れられて床のある家へと案内された。

3話・ピノキオの悩みどころ（後書き）

天羽の正体分からずじまい。きっと樹は気づいていない。
はぐらかされたことには。。。。。

4話：説明を聞く前に決めること。（前書き）

最初は夢です。回想シーンみたいなやつです。

4話：説明を聞く前に決めること。

夢を見た。

いや、今夢を見ている。そんな感覚がした。

場面は父親が事故に遭ったというところ。その連絡を小学校にいる私は先生から聞いた。

大好きな父が事故に遭った。その言葉だけで、『お父さん死んじやうの?』と母に泣きながら尋ねている私がいる。ひどい事故だとは聞かなかった。ただ『きつとすぐに目を覚ましますよ。』とニッコリと微笑む医者言葉があつたから、母親と父が目覚めるのを待っていた。

場面が変わる。

玄関で母が帰ってくるのを待っている私が出た。

母が言ったのだ『今日は、新しいお父さんと弟になる男の子を連れてきますよ。』と。

私は何がなんだか分からなかった。お父さんが新しくなる。

(お父さんはお父さんじゃなくなるのかなあ。それは、悲しいよあ。)

だから、母が帰ってきたらガツンと言ってやろうと思っていた。

『新しいお父さんなんか、いらぬ。』ってでも、帰ってきた母と男の人とその男の人の後ろに隠れていた男の子を見てガラガラと何かが壊れてしまった。その2人を見ただけじゃない。母の嬉しそうな顔を見たせいかもしれない。

(男の人が新しいお父さん。男の子が弟になる。)。)

男の人は言った。『僕は、いつきちゃんの新しいお父さんになります。長谷川 宏世はせがわ ひろせです。いつきちゃんのお父さんみたいにカッコよくはないけれど、これからはよろしくお願いします。』

男の人にとつての精一杯の挨拶だと幼い私は思った。だって、母が言っていたのだ。『あの人は、口下手で伝えたいことが全然伝えられないのよあ〜。まったく可愛いんだから』ということを。

(ほんとに、口下手なあ。ふふふ。お父さん！私に新しいお父さんができましたー！)

『新しいお父さん、よろしくね？私のお父さんみたいにカッコよくなつてね？』

『む、難しい目標ができてしまったよ。うん、でも頑張らせていただきます。』

『宏世さん頑張つてね〜。』
『ああ。つと、この子の紹介がまだだったね。ほら、自己紹介しなさい。』

後ろに隠れていた男の子の自己紹介の番になつてもなお後ろに隠れていた。

(もう！男の子でしょ??ちゃんと挨拶しなくちゃだめなのにい〜。よし、ここはお姉さんがひとつお手本を見せてあげようじゃないの。)

ふふん。つとお姉さんぶっている私は本当は嬉しかったのだ。弟ができることに……。

いや、兄弟ができることに。

『こんばんわ。私の名前は本城 樹っていうの。あ、でももうすぐしたら長谷川になるのかなあ?』

『あら、そんなことないわ。だって、本城は私の苗字だもの。だから宏世さんが婿入りするから本城のままよ。安心してネ』

『……らしいから、よろしくね?あなたのお名前はなんていうの?』

『……………』

『あらあら、2人とも黙っちゃってまあ。宏世さん、あとはイツキちゃんに任せて私たちはお茶でも飲みましょうよ?いつまでも玄関にいるわけにはいかないからね?』

ちらりと樹と男の子を見る新しいお父さんは、ため息をついた。

『いつきちゃん。コイツを頼むよ、頑固なんだ。』

『宏世さんに似てしまつてねえ』

『僕は、ここまで頑固なんかじゃない!』

『はいはい。』

そして、2人はリビングのほうへと行つてしまった。

『ねえ。お名前教えてよお、じゃないとお茶飲めないよ?』

根拠もなく言ってみる。

けれど、微動だにしない男の子を見て私は腹を立て始めた。

(なんなのよ。この子。一言でもいいから話せばいいのに!!
あ、もしかして私のことブスだと思つていゝるんじゃないでしょうね
!!ブスなお姉ちゃんはいやあゝとか我がママを言うのだったら……)

『私がブスだと思っているんでしょ??!! それでこんなやつお姉ちゃんにしたいくないか思っ言っんでしょ!!』

『!!!!??』

いきなり意味不明のことを言われて戸惑っている男の子を見て、ほらねっと思った。

学校で男の子にブスブスと言われているのだ、間違っっているはずがない!

(やっぱり。凶星だっだから戸惑っっているのね?!)

『だったら・・・』

『ち、違っよ!! その逆だもん!!』

『ほらやっぱり・・・って何? 逆なの? ええっどどっいうことかしら?? 私の勘違い?』

『そうだよ。勘違いだもん!!』

『そうなの・・・。ごめんなさいね? で、でも早く自己紹介しないからいけないのよ?』

そう、私が言っ顔を真っ赤にして黙っしまった。勘の良い由衣ならその意味に気づいたかもしれないが、私は鈍いとよく言われるので理由がわからなかつた。

『僕の名前は・・・長谷川 亜樹。もうすぐしたら、本城 亜樹になります。』

『ふふ。それでいいのよ さあ、行きましょっよりビングに! 早くしないとお母さんにお菓子をすべて食べられてしまっわ!!』

ようやく自己紹介をした亜樹にそういって、手を差し出した。亜樹は、その手をじいーっと見ながら嬉しそうに手を握り返した。そして、長谷川 亜樹が本城 亜樹になったと樹は思った。

そして――目が覚めた。

すごく長く眠っていたような気がするのは気のせいなのだろうか？？

気のせいじゃないのだろう。なんせ外はすでに明るかった。

「おお。やっとこさ目が覚めたんけ？ぐっすり寝とったけん、起こすの悪かと思うて起こさんかつたんよ？」

「そうか、心遣い感謝するよ。」

「飯食いなされ、腹が減っては戦はできんよあ。」

「ああ、そうするよ。」

そういつつ、改めて泊まっていた家を見渡した。

きつと最近まで誰かが住んでいたと思われる形跡があったのだが、天羽はそれを無視して使いなされ。つと行って家から出て行ったのが昨日の夜だった。

困惑しながらも取り合えず、床だけ借りることにしたのだ。

「あのさあ〜ここって誰かが住んでいたんだよな？いいのか、勝手に使つて。」

「ほう、そこらへんはお気遣いなく。なんせ、ここのものはい先ほど江戸に出てしまつて帰ってくるのは、そうですねあ〜13年後ぐらいだろうに。」

「13年も!！」

「行きと帰りだけでも結構な年月がかかりますがな。」

「え。それほど遠いのかここから江戸まで。」

「はいさあ〜。それより、食べて下さんせ。皆が作ったものですねん。」

「あ、うん。って皆？そして多！！」

「村の皆ですけん。皆、樹と話すのを楽しみにしてますけん。」

「いや、何も楽しいことは話せないんだが。」

「それでも、いいですけん。ただ、この村に人が来たことだけが驚きなんや。」

「そ、そうなんだあ〜。」

しかし、と思う。いくらなんだって多すぎると思う。貴族並の料理の品の量だった。

(まあ、でも食べないと悪いよな?)

「いただきます。」

数時間後、食べきった。っていつても、途中で村の人がちよくちよく来たのでみんなで食べたという形になったのだが……。村人と話せて結構楽しかったということはまた後の話。

「そろそろ、とりばあーのところに行かないとなあ〜。聞きたいことまだまだあるし。」

「それがよかです。」

「ついでに、天羽とかのことも聞かなくちゃだしなあ〜」

「それは、聞かんでよかとです。」

「んでは、行ってくるよ。」

「はいさあ〜、わっちは準備しときますさかいなあ〜」

「ああ。」

とって、出てきたものの準備って何だ。何の準備をするんだ？
何をやらせる気なんだ……。

あーだこーだと考えているうちに目的地着いてしまった。

(天羽の方は後で考えるんだ。取り合えず、今はとりばあーのほうを優先しよう。)

そして、これで2回目の訪問となってしまうたとりばあー宅にノックをした。

「入らんしゃい。きつと、樹だろつに？」

いや、ノックをする前にまたしても、声をかけられてしまった。いったい、どういう感覚？いや神経をしているのだろう。

「はい。樹です、失礼します。」

今度はちゃんと丁寧にできたと思う。

戸を開ける。中を見る。鳳凰ほうおうがいた。戸を閉める。あれ……。

(あれー？！教科書にいたはずの鳳凰がいるよ？)

「鳳凰がいた。実物見たの初めてー！！じゃなくて、変だな？とりばあーは??？」

「樹、入らんか。」

「すみません、目がおかしくなったようで……。っっておかしくなっただけです。」

「樹はおもしろいのお。」

「いや、おもしろくないですから。なんですかソレ。まさか天羽

と同じとかですか?」

「樹にしては察しが良い。」

(とりばあーからも、馬鹿にされてる。私は鈍くないんじゃないやあー！ってまでよ、ということとは)

「とりばあーと呼ばれていたのは鳥だったからですか?人じゃない?」

「まあ、そうなるの。この姿を見て人であるというのは苦しがる。」

「ってことは、とりばあーは判定していた?」

「そうじゃ。安々やすやすとこの姿を見せるわけには行くまい。」

「まあ、確かに。じゃあ私はその判定に合格したということですか?」

「そうじゃな。合格じゃな。」

はあーつとため息を付いた私は聞かなくてはいけないことを思い出した。

「あの、名前を聞いていなかったのですが、さすがにとりばあーはまずいかな?なんて思いました。」

「名とな?申してなかったかのう?わしの名は緋石ひせきじゃ。他の鳳凰より、翼の紅い色が多くてな。緋石と呼ばれる石に色がよく似ていたために付けられた名じゃ。」

「じゃあ。緋石と呼べばいいのか?」

「とりばあーでよか。その方が親しみやすいだろうって。」

「じゃあ、とりばあーと呼ばせていただくな。」

いつの間にか敬語から、標準語に戻っていたけれどとりばあーは何も言わなかった。

ただ、暖かいまなざしで私を見ているだけだった。私はそんなことには、もちろん気づいていない。

「あ、そうだ、聞きたいことがあったんだ!!」

「なんでも聞くが良い。しかし、樹はその前に決めなければならぬ今後のことについて。」

「今後？」

「そうじゃ。順をおって説明したかったのじゃが、その時間がなくなってしまったのじゃ。」

「時間がない？」

「うむ。上忍護師の弟子にあたる護子が唐津の近くまで来とるらしい。」

「そのじょうにんごしつても説明する時間がないんだな？」

「そうじゃ。説明の大半がソレを占めておるからな。」

「うわあゝ。ついでに、そのじょうにんごしとやらが来ると結構やばいんだな？」

「そうじゃ。とくにそなたぐらいの年頃の女子おんなはな。」

「……。そこら辺の説明聞かなくても大体分かったわ。んで、私は何を決めないといけないんだ？」

次の言葉を聞いた瞬間私は、じょうにんごしまジ殺すなどと思っ
てしまった。

「男になるか女として生きるか。男になればいろいろと有意義に動けたりもする。女の場合はわかってるだろうに。」

「……………。決めるまでもないじゃん。」

そして、私は心中でじょうにんごしを罵倒しながら答えを出した。

たとえソレが間違っただけだとしても、自分を信じて生きていくことにしたのだ。

4話：説明を聞く前に決めること。（後書き）

答えはもう決まっている。

にしても、また天羽の素性を聞けなかった樹がいた。

5話・口が滑りました(前書き)

おお、少しずつですが、話が進んできました。
さあ、樹が選んだのはどっち？

5話・口が滑りました

私が出した答えに、とりばあーは嬉しそうな表情をしているような気がした。

未だに鳳凰の姿をしているため表情が読み取れにくいのだ。私が出した答えは……。

「私は、男として生きていきます。」

そうだったのだ。間違いなく私の口から出た答えだった。でも、本当は違う。こう、言いたかったんじゃないかった。

（おおい、私どうしたんだ？「女として生きていきます。」って言いたかったんじゃないかったのか？）

そう、まったく逆のことを言いたかったのに、口から出たのはこの言葉。

（もう一度言い直せば、まだ間に合う！！）

そう思って、再度言おうとすると。邪魔が入った。すっげえ邪魔が入ったのだ。

「失礼します！！護子が村の入り口にいます！！
樹さん、お早くお戻りになったほうがよろしいかと思われます。」

入ってきたのは、若い青年。一緒に食事をしたやつらの一人である。

(またしても、邪魔をしたな!ごしとやら!)

「それは大変じゃなあ。樹、自分の心に嘘をつくことなかれ。さあ行くのじゃ。」

そう言つて、とりばあは私を家の外へと追いやつた。

村の入り口から、このとりばあ宅では結構距離があるのだ。

ついでに、私が借りている家はとりばあ宅よりもっと遠かつた。つまり、入り口にいるごしとやらに見つからずに帰れるというわけだ。

「なんか、変な風に追い出されたなあ。しかも、間違えを正せずに帰っているわけだし。それに、すでに自分の心に嘘をついている気がするのだけれど……。取り合えず……。覚えていろよ!五氏!」

漢字が違うといわれそうだが、今はそんなことはどうでもいい。

取り合えず一旦家に帰ればなんとかなると、若い青年は言っていた気がする。追い出されるときに……。たぶん。

家にの近くに来たとき天羽が寄ってきた。

「お待ちしておつたぜよ。」

「敬語使うなら最後まで使えよ。」

「それは、人に言えたことではないじゃろつて。」

「そうだけど……。」

「んなことよりじゃ。さっさと入らんか。護子が来ておるんじやろつ?」

「そうだった。」

「準備はできておるよあ。」

「そういやあ、朝言っていた準備ってコレのことだったのか?」

「それ以外に何かあるのじゃ？」

「や、でも、どっち選ぶかわかんねえ〜じゃん。」

「選ぶとは?? 選ぶも何も無かるって、はよ入って着替えしゅんせ。その格好は妙に目立つ。」

「わかったって。ってか、妙に目立つって何だよ。」

家の中に入るとなんと見事に男物の衣服やら刀やら何から何までそろっていた。

そう、そろっていたのだ。

(・・・。こっちを選ぶと思っていたのか? いや、まさか・・・そんなことはあ〜)

ないとは言い切れなかった。だから、少し気になったことがあったので聞いてみることにした。

そう、少しだけだ。まさか変な勘違いをしていたわけではないだろう。

「私の性別はどっちだと思っ？」

いきなりこんなことを言った私に驚いたのだろう、天羽の目がパチパチしていた。

今の天羽は鳥の姿をしている。そんなのが可愛らしい仕草めづをしていると普通ならかわいいと思うだろう。

でも、今の私にはそんなことはどーでもよかった。

(そう、由衣らへんの女の子ならかわいい〜などとのたまうのだろう。でも、問題はそこじゃない。)

「面白いことを問いますなあ〜。」

「面白いことなんかじゃない。これはまじめな話だ。（私にとつて）」

「ふむ、一郎が間違った覚えをしようをしておったので、ちゃんと正したぞえ。」

一郎とはこの村の数少ない人間の一人である。そもそもその一郎が何を間違えたのだろうか。

いや、今は正した言葉が気になる。嫌な予感がした。すごく。

「なんと言って正したんだ？」

「樹は、間違ってもお・ん・ななどではないと。」

「ほう、もう一度言ってみる。（きつと今のは聞き間違えさあ）」

このときの私は怒り度マックスだったと思われる。

「ですから、女などではないと。」

躊躇ためりもなく、2回言いやがった天羽を潰つぶしたろうかと思っ
てしまった私がいた。

「私は・・・私は・・・女だあ~~~~~!!!!!」

「な、なんと!」

私の告白に心底驚いたという声を出した、羽をばたばたさせていた。

いくらなんでも、それはひどいと思う。

「いったいどこが男に見えるって?!」

「ほう!言葉遣いから物腰、オーラまで男ですじゃ!」

「あんだとー。言葉遣いはわからんこともないが、物腰ってな

んだよ！？オーラって見えねえだろ！！」

(無茶苦茶言っんじゃねえー！！！)

しかし、そんな怒涛どたうたの怒りも天羽には意味をなさないらしい。てきぱきと、着替えるのと指示を出し始めていた。

つまり、なかったことにしたらしい。ふざけんなと思う。でも、着替えに熱中してしまい終いには会話が終わっていた。そして、着替え終わったあと、ふと気づく。

(・・・。制服で女ってわからないのか？しかも、髪はロングだぞ！由衣や柴原すら見た目だけは女の子だっと言っていたのに。)

っとこれはこれで悲しいと思う。

このことを言おうにも返ってくる言葉は全て否定系でありそうなのでやめた。

「その髪はこの紐ひもと布でしばってください。」

「ああ。」

ここで私は別の思考が働く。

(もしかしたら、頭を丸めなくちゃいけないのか？それだけは嫌だぞ。)

「心配なさるな。そのような儀式はとうに廃れておりますのじゃ。」

「またしても、心を読まれた。いったいどうやって読んでいるのだ？そして、どうやって防げるのか・・・。後でとりばあーに聞いてみ

よつと心に誓った。

「儀式がなくなったってどういうことだよ？」

「どうもこうもありませぬ。数百年前よりなくなつとつものじゃ。」

何度も思うけれどここは日本じゃないらしい。再確認をしてみました。

取り合えず布と紐で髪をポニーテールの如く結び上げるとなんとまあ、侍の出来上がり。

(自分で言うのもなんだけど、美形の侍だね。)

この家の唯一の鏡である手鏡を見て思った。

この時代鏡は貴重品じゃなかったのか？こんなところにまで出回っているなんて・・・。

「ふむ。やはり良く似合っておるのお〜。」

鏡を見ていた私に、天羽が声をかけてきた。

やつの中には『わっちの目には狂いがなかった。』とでも言いたそうな感じがする。

だいたいなんの狂いだよ。そう、返したくなるくらい天羽の目はキラキラしていた。

「これならば、外に出ても怪しまれずにすむじゃろつて。」

(違和感がないってことか？！ないってことなのか？？)

そう思うと悲しくなる。最近、悲しい事ばかりが続くと私は思う。だから、気分転換に外に出ることにした。その方が精神的にいい

気がしたからだ。

決して、天羽の『外に出てみてはどうじゃ?』という言葉に従ったわけではない。

「そうじゃそうじゃ、言葉遣いに気をつけよ。樹は男なのじゃからな。」

外に出て行く前に天羽にそういわれた。何故か『男』を強調されながら……。

しかし、それは間違いであることに後々になってから気づいた。そう、やつに会ってしまったのだ。『しし』に……。

5話・口が滑りました(後書き)

やっと、話が進み始めるはずですが。

でも、次回は護子SIDEになるのでまた停滞するかもです。

さあ、護子とは一体誰なのでしょう？(もうわかっちゃいますよねえ：)

6話：始めの一步

コノハは困っていた。

今、この状態に……。

コノハが今いるのは、江戸からもっとも南下した場所にあるところだ。

地名は『草梅雨』^{くさつゆ}となんとも奇妙な名で、当たり前のように知られていない。

また、そこにある唯一の村の名は『唐津』^{からつ}というらしい。

コノハがこのようなへんぴな場所へ来たのには、何も知り合いがいるからではない。

師である、草十郎のせいである。でないと、こんなところに例え知り合いがいたとしても来ないと断言できる。

それほど、離れた場所に唐津はあった。

（なぜ、このような場所に草十郎殿は行けと申しただ！！）

そして今、コノハは激しく文句を本人にぶつきたい気持ちに合った。なんせ、唐津に来たのはいいものの、村の門の前で一步も動けなくなっただからだ。

何やらこの村は審査^{しんさ}というものがあるらしい。

関門^{せきもん}のようなもののだが、一般の村が第一するとは聞いたことがコノハはなかった。

（帰ったら絶対に文句を言ってやる！！）

徒歩と馬で約5ヶ月をもちかけて来たコノハの体はズタズタでボロボロだった。

行く途中で、陰に何体も遭遇そうぐうしてしまいこのような状態かげになっているわけなのだが、いつも以上にその遭遇数が多かったのだ。

(早くここでの用事を済ませたいんだけどなあ)

長く掛かるであろう審査にボーとコノハは空を仰いだ。

『よお、楽しんでるか?』

ことの始めは草十郎の、この言葉だったような気がする。

宇津木と分かれた後、瀬原せはらに会いに行った。

瀬原とは、人名ではなく一座の名であった。その一座に昔コノハはいた。

一座で生まれ、一座で育ち、歌や踊りや音楽、時には舞すらも見せるお祭り大好きな者の集まりであったところにコノハはいた。

例え祭りがなくとも、その場を盛り上げる一座として有名でもあった。

そんな一座でコノハは物心ついたときから笛を持たされ吹かされていた。

たまたま笛を吹いたときに筋がいいと褒められて『よし、笛吹きにしよう。』といわれたためである。

コノハ自身もまんざらではなく、将来自分は有名な笛吹きになるんだと思っていた。

けれど、世の中そうは上手くいかないものだ。

(僕が今いるのは上忍護師を育てるための役所だ。)

一座からコノハが出て行くときとても反対された。コノハだって、本当は出て行きたくなかった。でも、いかざる終えなかった。

（すべてはあの將軍のせいだ。）

自分を一座から追い出すように仕向けた將軍の顔を今でも忘れることはない。

（昔は楽しかったなあ。）

コノハは、一座の泊まる宿に向かいつつ昔のことを考えていた。毎日がお祭り騒ぎだった。練習はきつかったけど新しい曲を吹くたびに喜びで心が震えた。

上下関係はそれほどひどくなく、というよりみんなが家族のようなものだった。

実際に血の繋がった兄弟はいなかったけど、コノハにとっては一座の人々が親であり、兄弟だった。

怒るときには怒り、優しいさや愛情をもコノハはみんなからもらった。

その優しさや愛情はコノハが一座を出てからもくれていた。なんと、一年に1回はわざわざ訪ねてきてくれたのだ。

（みんなきつと元気なんだろうなあ。）

あ的一座から光が消えることはまずない。

どんなことがあっても笑顔で人々を包み込んでくれる。

そう、コノハは思っていた。

けれど、一座の泊まっている宿に近づくたびに不安が大きくなって

きた。

(このままみんなが優しいままだったら僕はいつまでたっても子供のままだ。

それに、ここに来るためにきつと遠くまで行ってないってことだし……。)

「どーすればいいんだろう。」

不安を抱えたままコノハは、宿の戸を開けた。すると、恐ろしいほどに静まり返っていた。

(あれ。みんなは……?)

周りを見渡すが、一座の者はいなかった。不思議に思いつつも宿の女将おかみさんに聞いてみたが、首を振るばかりだった。

「そーいやあ、2階に団長さんがいたような気がするねえ。ああ、階段はあそこだよ。」

そいつって部屋の隅にある階段を指差した。

(とりあえず、行ってみるしかないよね?)

コノハが階段を上ると、団長の椿はづしがちょうど窓から外を眺めている姿があった。

それをみたコノハは、ほっとした。

(団長がいるなら、みんなもどこかにいるはずだよね???)

「だん・・・」

「コノハだろ？ここに来るのは窓からみて知っていたからね。ずいぶん遅かったじゃないか。」

声を掛ける前に、そう問われコノハはたじろいだ。

「ええつと、町の見回りをしていたので遅くなりました。すみませんでした。」

「っはん。相変わらず、あの悪が師なのかい？」

椿は草十郎のことを『悪』や『ぼんくら』『へたれ』などと呼んでいた。

決して、草十郎が本当に悪やぼんくらやへたれであったりはしない。ただ、椿が親しみを込めて呼んでいるだけだとコノハは思っていた。

「はい。草十郎殿が僕の師です。」

「あらまあ、私の可愛い小葉があいつの弟子なんて悪いことばかり教わるだけだよ。そうだろう？」

「い、いえ。決してそのようなことは・・・。」

「しかも、話し方まで変わってしまったて・・・。アイツいつかぶっ殺す。」

「だ、団長！！」

確かに、コノハの話し方は役所に入ってから変わってしまった。上下関係が厳しいせいである。けれど、そうやら椿が怒っているのは役所ではなく草十郎に対してのほうが大きいようだった。

どうして、椿がここまで草十郎を嫌っているのかはコノハにはまだ分からなかった。

いや、いつになってもわからないかもしれない。

なんせ、椿が草十郎に嫉妬しているだけなのだから……。取り合えず、コノハは話題を変えてみることにした。

「そ、そういえば、みんなはどこですか？母さんにも会いたいですけど……。」

「ああ、そうだった。みんなは下にいるはずだよ。」

「え？でも、いませんでしたよ？？」

「だから、『今は』下にいるんだよ。」

「はあ。」

「コノハがここにきて十分なくらい時間がたったから準備はできているだろう。」

「え？」

椿はにこにここと微笑みながら、コノハの背中を押した。

コノハは背中を押されるままに、階段を降りようとした。

（準備ってなんだろう？……。あ。団長に言わなくちゃいけないことがあったんだ。）

「だ、団長！！言わなくちゃいけないことがあるんですけど……。」

「それは、後で聞くよ。今は降りなさい。」

「……はい。」

そして、コノハは階段を降りていった。

そこで見たものは……。

6話：始めの一步（後書き）

一体何を見たのでしょうか？

まだまだ、コノハSIDE続きます。

7話・続きまして二歩目(前書き)

遅くなった更新ですが・・・。
書いていることは普通です。

7話：続きまして二歩目

一階に降りてコノハが見たものは、一座の人々その中にはもちろん、母もいてテーブルに置かれたご馳走を囲んでいた。

いつたい、なんのために、いつ用意したのかその疑問がコノハの頭を過ぎった。

しかし、その疑問もすぐに解けることとなる。

「コーノハ！14歳の誕生日おめでとう！」

一番歳の近い沙紀おんこが抜け駆けのように言う。

続いて、一番年上の壕ごうが「おめでとうー！」と声を張り上げて言う。それに続けとばかり、他の皆が祝いの言葉を投げかけてくれた。

「コノ兄あに！おめでとう！！！」

一番幼い柚音ゆねが駆け寄って抱きついた時にはすでにコノハは放心していた。

ただただ、ポカンと口を開けていた。

自分の誕生日を忘れていたわけではなかった。ただ、いつものようにその日が過ぎるだけだと思っていた。

だから、驚いたのだ。まるで、元服げんぷくをするかのような祝いの壮大さに。

（でも、その儀式は今はなくなっているはずだから違うとして・・・）

「ふふふ。小葉こはったら、放心しちゃってまあ。」

母親が近づいてきてもボーと突っ立っていたコノ八だが、椿のしつかりおし！つと思いきり背中を叩かれて我に返った。

「団長、母さん……。これ、どーしたの？」

「あん？これかい？」

「ま、まさか……。コノ八忘れたのか？！自分のへぶし。」

「あほんだら！コノ八が聞きたいのはそこじゃなか！馬鹿壕。」

「ば〜か号。」

「号。」

「つてまで！お前らぜつてえー名前変えたよな？？なんか、船の名前みたくなってやがったし。」

「っは、何言っているの？？ゴローちゃん。」

「ちゃんづけ？！しかも、名前ちがつ！！」

「ポチうるせー。」

「ポチ！！犬みたく呼ぶな！！しかも逆切れしてやがるし！？」

「ポチ兄ちゃん」

「うおおおおおお！！ゆずまで、そう呼びやがって！！こ、コノ

八お前は俺の味方だろ？？」

「え、えつと……。」

「こ、コノ八あ〜……。」「

壕は一番年上なのによくみんなに遊ばれている。

今だって、コノ八に助けを求めながら、沙紀に飛び蹴りをくらっているし。

普通なら怒るだろうが、壕はめったに怒ったりしない。

危ないことやしてはいけないこととなると、さすがの壕でも怒るけどそこまで怖くない。

それに、妙にコノ八に優しいのだ。

一座の一番年上は椿や椿の旦那白海はっかい、それにコノ八の母親や音楽担当の薄野すみのや菅野すがのなどの大人を除けば、26歳になっている壕、次

に鳥、そして梅姫・葉月そしてコノハ、沙紀そして椿の息子の袖音という順番になる。

(それにしても……。)

「僕が聞きたいのは、壕にいの新しい呼び名じゃなくて!」

「こ、コノハ! お前まで俺を見捨てるのか?!」

「いや、見捨てるとかじゃなくて!」

「お、覚えてるよ! このハブシツ!」

「いい加減にしな、馬鹿者。小葉を困らせるんじゃない。」

「……うう。」

「う、壕にい〜?」

団長にまでコケにされた壕をみてさすがのコノハは心配になった。久々に会ったからかもしれない。または、騒がしい一座に目が回りそうにもなっていたからかもしれない。だからだろう、壕を心配してしまったのは……。

「……。コノハは可愛いなあ〜!」

「……。」

だから、毎年こういう結果になる。

嘘泣きをコロつと笑顔に変え、可愛い可愛いとコノハの頭を撫でている壕にコノハはがつくりとうな垂れた。

(また、やられた。いい加減学習しろよ僕。)

ツバス。

コノハの頭の上で何か大きな音が聞こえた。

(?)

上を見上げるコノハは、自分の母親がどこから取り出したハリセ
ンを壕に構かまえていた。

壕は、壕で頭を抑えながら呻うめいている。

「母さん？どうしたの??」

「小葉大丈夫よ！悪い虫から母さんが守って差し上げます。」

「・・・は？」

わけが分からないことを言う母の顔は何故か本気だ。

コノハは理由を求めるため周りを見渡したが誰もコノハと目を会わ
せようとしない。

それより、母が次にどうやって壕に攻撃するのかが気になっている
ようだ。

「だ、団長・・・。」

情けない声になりながらもコノハは団長に助けを求めることにした。
他に理由を聞いてもまともに答えてくれそうになさそうだからでも
あるが・・・。

「また、情けない声を出して・・・。アンタの母、沙沙羅しんらは今わが息
子を守ろうとしているんだよ。」

「いや、だからどうしてそうなったのですか？」

「そりゃあ、壕の目が怪しくなったからさ。」

「は??」

「それより、聞きたいのはこんなことじゃないんだろ??」

「え、あ、はい!!--」

団長に聞いても理由がわからなかった。逆にそんなこと扱いにされてしまった。
また、そんなこと扱いされた2人のバトルはヒートアップしている。

(もしかして僕が知らなくてもいいことなのかなあ?)

取り合えずコノハもその話は置いとくことにし、今まで疑問に思っていたことを聞くことにした。

「団長。どうして今回はこんなにも豪華なのですか？」

「今日は何の日かしているだろうに。」

「はい。今日は僕の誕生日だということは知っています。でも、それだけじゃないですよね？」

「まあなあ。小葉は2階でうちに言いたいことがあったんやろ？」

「あ、はい。」

「それを今聞かしてくんろ。」

「え……。」

「大丈夫やて。他はあの2人に夢中やから。」

確かに、他の人たちは2人のバトルに熱中している。

時々聞こえてくる怪しい言葉にコノハは何が関係しているのかわからなかった。

『わっちの子供に何、いやらしい目で見てるねん!』

『いやらしい???どこがや!!--清潔な目で見てるやろ!!--』

『どの口がそげんなこと言ってるの?』

『この口やで!!--』

『っは!!--だいたい毎回毎回会ったびに抱きしめようとするんはや

めんねい！」

『可愛いものを抱きしめようとするのは何が悪いか！』

『あんたの場合……』

などという、怪しい言葉にコノハはさっぱり付いていけない。

だから、無視することにした。

例え、美人と評判の母が腕を捲くり、鳥から刀を貰いその刀を壕に向けていようと……。

「僕が、2階で言いたかったことはもう会いに来なくてもいいつと
いうことを言いたかったんです。」

「……それは何故かい？」

「僕が一座を離れても今まで何度も会いに来てくれました。僕
もみんなに会えるのを楽しみにしていました。でも……。」

「でも？」

「それじゃいけないって、遅くなったけどやっと気づけたんです。」

「……。」

「この一座は僕のせいで5年間この江戸の近くしか周れていない。
そう気づいたんです。」

「だから、僕は……。」

「もついいよ。」

そういつて、椿はコノハの涙を拭った。

いつの間にか涙がでていたらしい。

「なあ、みんな。今の聞いたろ??？」

いつの間にか静かになっている周りを椿は見渡した。

一座の者はみんな頷いていた。

「小葉。私達もきつとアンタがそう言うんじゃないかって思ってたんだ。」

「え。。。」

「ふふふ。何年一緒にいたと思うんだい？生まれてからずっと一緒だったお前の考えていることがわからないはずがないんだ。」

「だ、だんちよー。」

「小葉、何度も話しただろう？アンタのおっさんのこと。」

「母さん。。。うん、武士だったってことでしょ？」

「そう、アンタはおっさんとさん似だからねえ。考えることも似ているんよ。」

「。。。うん。」

「だから、しばらく会えないかもしれないというちょっとしたお別れ会さ。」

「とりい。。。」

「コノハは泣き虫！でも、一途で頑固。みくんなってるよ？」

「沙紀。。。それ、褒めてるの？けなしてるの？」

「ふふふふふ。どっちでしょう？」

「コノ兄。また会えるでしょう？」

「そうだね、ゆず。会えるよ！今度は僕が会いに行くー！！」

「。。。待ってるよ」「」

みんな頷いて笑った。コノハにとって最高の誕生日となったのはいうまでもないだろう。

しかし、壕は下を向いたまま黙っていた。

心配して声を掛けようとしたが、行き成り抱きしめられてしまった。

「コノハ何かあったら、すぐ俺の胸に飛び込んで来い！！お前のためならいつだって空けといてやる。」

「ははは。相変わらず、壕には面白いね？」

「。。。離れんかー！！ワレエー！！」「」

その後、女らから蹴りやら殴られたりやらされたのも言つまでも無
いだろう。

「小葉は、純情な娘を嫁にするんたい！今からタマに汚されたらた
まったもんじゃなか！」

「そつたいそつたい！ケダモノがコノ八に近づくことも許さんねい
！」

「そーよ！コノ八にはうちがいるんさかいな！！」

「え。いや、沙紀……。別にそんな嘘つかなくても。」

「嘘や無い！！コノ八がずうっと一人ならうちが嫁になるさかいな
！」

「……………」

「なんねい！なんで無言になるんねい。」

「多分、コノ八は未来を想像して落胆してしまつたんだ。」

この際、壕のことはスルーすることにしたらしい。壕自身もボロボ
ロになって倒れている。

どうやら、言い返す気力も残っていないらしい。

それにしてもつとコノ八はちらりと椿の旦那を見た。

白海は言ってしまったのだ。コノ八が無言になった理由を……。

それを聞いた沙紀は、ドンドン顔を赤くしている……マジ切れまで
あとちよつとだ。

「確かになあ、さき嬢を嫁にしたら小葉は尻に敷かれるなあ。」

「そうさなそうさな。」

（ああ、薄野や菅野までいわなくてもいいじゃないかー！）

「こ、コノ八……。うちそこまでひどかないよなあ？」

「え、あ、うん。」

「そうよな？」

「うん……。でも、沙紀。僕はね、沙紀は他の人と一緒になってほしいと思っているんだ。」

「……。なんでね。」

「だって、いつ会えるかも分からないやつよりも、ずっと傍にいてくれる人のほうがいいじゃないか。」

「……。コノハは、一座にもう戻ってこんのか？」

「戻りたくとも戻れないよ。それにね、僕なんかには沙希がもったいないよ。」

「馬鹿ちい。それはうちの言葉や。」

「はい？」

「本当はうちにはコノハがもつたいないんやて知ってはるよ？じゃけんど、待っているのは自由やる？コノハが嫁連れてくるまで待ってはるからな！」

「……。うん。ありがとう。」

「ふふふ。礼はいらへんよ。」

沙紀はニコニコ笑いながら、薄野や菅野の腹を殴った。

さっきの言葉がムカついていたらしい。

そんなこんなで、わいわいとまた騒ぎ出していたときに椿にとってもつとも会いたくないやつが登場した。

しかもカッコつけて……。

なぜだろう？彼の登場は誰も望んでいなかったらしい。

コノハは不思議と空気が変わるのを肌で感じ取った。

ツバン！！と大きな音を立てて戸から入ってきた人物はコノハに向かっていった。

「よお、楽しんでるか?」
「っと・・・。」

7話・続きまして二歩目（後書き）

あれ？長くない？？しかも、変体いたくない？気のせいかなあ。

8話・最後の三歩目（前書き）

「嫌われているのだろうか？好かれているのだろうか？」（草十郎談）

8話・最後の三歩目

明るく暖かかった空気が凍った、そんな気がした。

宿に入ってきた男は、見た目だけならもてるであろう顔をしているが、頬に傷があるせいかどこか悪に見えなくも無い。

服装のほうはたいそう豪華なマントと肩から掛けてある札以外は普通である。

(場違いな奴が来た。)

誰もがそう思うであろう。いや、護子の者以外のやつらはそう思った。

奴は皆が自分を見ているのを確認すると口を開いた。

否、開こうとした。

約2名の人物により口を一旦閉じることになったのだ。。

ツカン！ツキン！

宿にあつてはならない音が響いた。

椿と壕がそれぞれお互いの武器を取り奴に斬りかかったのだ。

武器といっても、一座で使う道具(剣や扇など)だが。

しかし、奴は軽々とその攻撃を受け流した。しかも、表情はどこか楽しそうだ。

「きつさまあー！！よくもノコノコと現れやがったな!？」

「その命貰い受ける!！」

「ふん。やれるものならやってみるがいい。それにノコノコではない、スキップしながら来たんだ。」

「え、ちよっと。。。」

「ていやあー！！くらえ殺人切り スキップとは気色悪いんじゃあ
！！！」
「ふはっはは。最後に をつけるとは可愛らしい技だ。気色悪い言
うでない！」

「ならばこれでどうだい？魅了する乙女の舞！！」

「オバはんに魅了されても嬉しくないわ！乙女ですらなかるうが！
！」

「いや、あのおゝ・・・。」

「つく、なかなかやるな！」

「ほんと！腕だけは良いんだからねい！それに、わっちはまだ、若
いわ！！！」

「つぶ。弱いな。」

「・・・草十郎殿。何か用があつていらしたんでしょう？」

椿と壕の攻撃が一時止んだので、ここぞとばかりにコノハは尋ねた。
奴こと草十郎は刀を鞘に収めながら、コノハの方を向いた。

「ああ、そうだ。お前にお使いを頼もうと思つて来たのだ。」

「お使いですか？」

「ふん。どうせろくでもない内容さ。頼まれること無い。」

「そーさそーさ。お祝い事している最中に・・・」

「『よお、楽しんでるか？』なんて言つて入ってくるんだもんね
い！！！」

「ちよっ・・・梅姫姉まで・・・。」

「っはははは！相変わらず嫌われているようだな、俺は。いや、む
しろ好かれているのか？」

「嫌っているに決まっているさー！！いつもコノハを無理やり連
れて行くんだもんろ！」

葉月の言葉にみんなが頷いた。

これに対してコノハは何も言えなくなってしまうた。
みんなが自分を思ってくれているのはわかるが、相手が上忍護師の中でも5本の指に入るほどの大物相手に斬りかかったり罵倒したりしているのだ。

普通なら、罰せられてもおかしくないはずである。

それなのに、草十郎は罰したりはしない。いつも面白そうに笑っている。

「小葉の家族は、恐ろしい奴らよのお。どんなやつでも、お前のこととなると斬りかかってくる。」

「も、申し訳ありません。」

「っふん。謝ることなかよ！」

「そうさあー！家族を守るのがわたちらの役目！コノハについてはあたぼーよ！」

「いや、でも団長、壕にい。僕のほうが草十郎殿に迷惑を掛けているから、斬りかかるのではなく・・・。」

「お礼を言えつてか？それは無理ねい！どーしてもそいつだけは気に食わないさかい！」

「ふむ、お前達にお礼を言われても嬉しくもなんともないがな。」

「なにおう！！！」

売り言葉に買い言葉。椿たちのほうが売っているように見えて、実は買っている。

つまり、草十郎に遊ばれているのだ。

コノハはそれをわかっていているからこそ、草十郎に言いたくなる。

『遊ばないであげてください。』と。

「やめんかい。このままじゃあ草十郎殿が用事を言えぬまま帰られてしまうだろうに。」

白海の言葉により、椿も壕も他のみんなもぶすくれながら口を閉じた。

白海と草十郎は歳が近いうえに飲み友達でもあるため、白海が草十郎を嫌うことはない。

そもそも、誰もが心底草十郎を嫌っているわけではないのだ。

「おお！さすが我が友よ。獣どもを抑えるとは！！」

「草十郎殿も、遊んでやるのはほどほどにしてください。」

「はっはっは。すまぬ、つつい面白くてな。して、小葉。」

「は、はい！」

「お使いの用件とはな、コレを『とりばあー』に届けてほしいのだ。

」

「は？』とりばあー』という方にですか？」

「ああ。」

「つつよつと待ちねい！』とりばあー』のところまで行くのにどれほど時間がかかるとお思いねい！」

「え、遠いんですか？」

「近場ではない。だから、これを無事に届け帰ってこれたならば弐から参に上げようぞ。」

「・・・。そんなにも危ないんですか？草十郎殿。」

「ふむ、行く道がなあ。ちいつと危険なだけじゃ。」

「どこが、ちいつとかいな！！」

「だいたい、それは本来ならアンタの仕事やろうに！！」

「まあなあ。実はな、期限を過ぎてしまってるから俺が行けば針の筵むしにされるんだ。」

「されちまえばいいのによっ。」

「でだな、コノ八が行けばそれもなくなる。なんせ、『とりばあー』は音楽が好きと聞いた。」

「え、ええつと、つまり私が笛の演奏をすればいいんですね？」

「そのとおりだ！！」

わっはっはっはと笑う草十郎は何か別なことを隠しているとコノハは思った。

きつと、コノハが向こうに行つて帰ってくる間に何かが起こるのだと……。

ちなみに、式から参というのは称号のことである。上に上がっていくにつれて、上忍護師に近づくといいものである。

（コレは勘だけど、草十郎殿は何かを隠したがつている。だから、僕を遠くに行かせようとしているんだ。）

きつと行つたほうがいいのだろう。コノハはそう思った。

5年間も一緒に行動していると、草十郎の性格もだんだんとわかつてくるというもので……。

草十郎はなるべくコノハを危険な任に就かせようとはしなかった。一座のこともあるのだろうが、また別のことでもあるようだ。

お使いに関しては断る理由もないわけで、コノハは返事した。

「わかりました。必ずや、届けてまいります。」

「おお！ありがたい。ゆっくり行つてくるといい。」

「草十郎殿も、お気をつけてください。」

コノハがそういうと草十郎は目を細めて笑った。

草十郎は思った。（やはり、何か感じているな。）と。

草十郎とコノハの会話を聞いていた、一座はどうしようかと話し合いをしていた。

コノハと途中まで一緒に行くべきなのか行くべきではないのかという話し合いを。

「小葉、私たち一座と途中まで一緒に行つたほうがいいと思うんだ

「？」

「え？」

「あそこは有名だけど有名な場所じゃないんだ。」

「どういうことですか、団長。」

「『とりばあー』は、とても有名なお人さ。全ての出来事やモノを知っている。だが、その『とりばあー』がいる場所を見つけるのは難しいんだ。」

「そうそう、誰か人伝いに聞ければいいけど今は知らない奴らのほうが多い。」

「……。ありがとう！団長たち、でも僕は一人で行きます！」

「でもねえ〜。」

「大丈夫です！草十郎殿にだいたいの位置を教えてくださいただければあとは何とかかなります。」

「おお！教えてやるぞ。」

「……はあー。小葉がそういうのなら、頑張って行きんしゃい。」

「うん！行ってきます母さん！」

「コノハちよつと2階へ行くぞ。場所を教えるのは良いが、他のやつが聞いていたらいけねえ。」

「は、はい！」

草十郎の言葉でコノハは2階へ行った。

誰にも聞かれてはいけない場所。それなのに、団長たちが知っていることにコノハは驚いていた。

「江戸からもつとも南下したところにある『草梅雨』という場所に

『唐津』という名の村がある。そこだ。」

「他の村は近辺にあるのでしょうか？」

「いや、ない。まあ、行けば自然と足が向かうはずだ。または、気づいたらそこにいる。そんな場所だ。」

「はあ。」

「まあ、頑張つて行けよ！」
「はい！」

コノハは『草梅雨』や『唐津』という名の地名、村名を聞いたことが無かった。

（ちょっと、不安だけど大丈夫だよな？だってもう、14だし。）

そう、コノハは思い1階へと降りていった。草十郎はすでに降りていて、しかも役所に戻っていったというのを、壕が何故か嬉しそうに話していた。

そうして、コノハと一座そして、他の来客たちは夜中まで騒いだのは言うまでも無いだろう。

日が昇るころにはもう、コノハは起きていた。

旅の準備をしていたのだ。

荷物は最小限にしてあるのだろう、小さな布でできた鞆に刀を持つただけだった。

「よし、行こうかな？みんなが起きる前に……。」

コノハはみんなが起きてから行くのでは、何が足りない、コレを持って行けだのと言われるのを恐れていた。

余りにも荷物が多くなると、コノハの力では持っていけなくなるのだ。

本当は、別れ辛くなるというのもあるのだが……。

コノハが宿の戸を開けるとそこには待つてましたとばかりに、椿と

白海そして母親の姿があった。

「え……。。」

「ふふん。アンタの考えていることはお見通しだったんだろう？」

「我が子の旅立ちを見らずして母が務まるものか。」

「気をつけて行きなさい。」

「……。はい！！行ってきます。」

始めはビックリした。でも、本当はどこか期待していた、母や椿達がいることを……。

そして、コノハは江戸を出た。

江戸を出てからは大変だった。

単に南下して行くだけならいい。だが、実際にはそうはいかない。あちこちの村や街に寄らなければ食料を調達だつてできないからである。

途中で馬を手に入れたけれど、ここから先は馬は連れて行けない。

なんせ、陰が多いのだ。

だから売るために寄る必要もあった。

「思っていたより、遠いよう。」

コノハはポツリと愚痴を言った。

ある街の酒場で『唐津』について何人かに尋ねたときに、その距離を知ったためである。

その際に、1人の若者が『俺は唐津から出だよ。』といいコノハに唐津が現在地からどれほど離れているかを教えてくれたのだ。

「ど、どうしてそんなところから貴方は来たのですか？」

「ははは。普通なら不思議に思うだろうね。ただ単に。仕事だよ。」

「仕事・・・？」

「ああ、俺の仕事はちいっと特殊でね、陰の情報を伝えるということをやっているんだよ。」

「陰の情報ですか？」

「ああ、陰はただ黒く、人をむやみに襲うだけではないんだよ。」

「え、そうなのですか？」

「そうさ。その情報を都に伝えたりしているため、あちこち周っているってわけで。ちなみに唐津の連中はそういう仕事している奴が多いぞ。」

「なるほど、ありがとございました！！」

「いんやあゝ、気をつけるよ！坊。」

「・・・はい！」

悲劇はここから始まった。いや、とこの昔に始まっていたのかもしれない。

若者と別れて、唐津を目指しているときにそれはもう大量の陰にはったりと遭ってしまった。

陰は本来なら、単独行動が多い。けれど今、目の前でうごめいている陰らは違った。

(え・・・ちょっと待って！！なんでこんなにいるのさ！)

コノハは戦わないという安全な方を選択したいのだが、陰のほうは違うらしい。

(うわあゝなんで、襲う気満々なの??)

1匹がコノハに気づけばもちろん、他も気づく。

そろそろとコノハのほうに近づきつつ、牙をむいていた。

「やるしかないじゃないか!！」

宇津木がこのコノハの動きを見ていたら、なぜ將軍がコノハを一座から引き抜いたのかわかっただろう。それほど、コノハは舞を舞うかのように刀を扱っていた。

コノハは始めに5匹くらい固まっていた陰を薙ぎ払いそして次々と倒していった。

「っ、疲れたあ〜」

最後の陰を倒したときにはもう、コノハの体力は底をつくかのように思われた。

ああ〜もうだめ。とコノハが地面に倒れこみ唐津があると思われる方向を向くと、なんと……。あつたのだ。そこに村が……。

(えつとお〜。今さっきまであつたかな?そもそもさっきいた場所とぜんぜん違うところにいるんだけど。)

「とにかく、行かなくちゃ……。」

そうして、コノハはボロボロの体を動かして、唐津へと向かったのだ。が、そうそう上手くいくはずも無く関所もどきの門での審査が始まった。

(審査とはいったいなんだ!！)

村人によると審査とは入村者が悪いものかどうかをここの村長である『とりばあー』が判定するらしい。

コノハは『とりばあー』と聞いて、「これを渡してほしいのですが・
・。」と楽する方法を取ったが、「自分でお渡してください。」と返
され今に至るわけだ。

(いったい、いつになったら判定はだされるのだろうか。。。)

そう思いながら、コノハは体を草原へ投げ出しのんびりと待った。

8話・最後の三歩目（後書き）

やっと、やっと、2人が会うのです！次回で会えるのです！！

長かった！！まだまだ続くので今後ともよろしくお願いします！

9 話・そして2人は出会った（前書き）

やっと、出会います。今までが【序】だったような気がしてなりません。

やっと、やっと題1章的な感じですが楽しんでいただければ光栄です。

9話・そして2人は出会った

樹は周りを見回した。どこに行くべきか悩んでいたのだ。

着替え終わった後、家から出てきたはいいもののどこに行けばいいのだろうか。

外に、出た後村人Aが「ババ様のところには今客人が見られております。」と言っていたので、とりばあーのところは駄目。

聞きたいことがあったのに・・・と樹は思ったが、客人^{いこる}「『ごし』だと思ったので行きたいとは思わなかった。」

(いや、別に着替えたから行ってもいいんだけど・・・ボロがでそうだしなあー)

などと、ちょっと心の中で誰かに対しての言い訳を試してみる。

だが、実際にそうなるのは間違いないだろう。今までの自分を振り返ってみると悲しいながらも実例があるわけで。

「今、思い出したくない昔のことを思い出してしまったよ。これも『ごし』のせいか・・・。」

最近ことあるごとに『ごし』のせいになっている樹がいた。仕方が無いのだ。

なんせ、暇だからである。絡みたいからである。まだ見ぬ『ごし』に・・・。

(いや、会うことはないかもしれないけどね、ここに来ている『ごし』さんにさ。ちょっと八つ当たりしたいんだよな。)

「まあ、とりばあーのところには行けないとして。『ごし』(いや、

客人のせいだ。」

そこら辺を散歩してみるかな？なんせ、この村、村のわりには広いしな。」

樹がここの来たのはつい昨日である。たった一日しか経っていないのだ。

一日の間にいろいろあった。本当にいろいろありすぎた。普段の樹なら、もう頭がパンクしているだろう。

でも、なぜだか妙にスッキリとしていた。頭だけではない、心でもある。だから、村を散歩しようと思ったのかもしれない。

「ここに来たのがつい昨日。昨日は確か、とりばあーに天羽のことや、『ごし』のことを聞こうとしたんだっけかな？まあ、その日は聞けなかったから今日聞きに行こうとして・・・っとアレなんだろう？？」

ふと目に入ったものが気になって樹は足を止めた。それは立て札のような看板で道の隅に立ってあったからだ。

すごく気になった。気にならないわけが無い。それがなんとも奇妙な形をしていたからである。

（・・・。看板だよな？でもなんで、なんできのこの形してんだよ！！）

そう、きのこの形をした看板だった。取り合えず近づいてみる樹だが、書いてある内容を読むと脱力した。

そりゃもう、文字が読める！とかの感動をそっちのけで脱力してしまった。

「なんつじゃこりゃ~~~~~！！！！馬鹿にしてんのかよ！なあ

く)にが、『この先なにもありません。残念ハズレ。』だ！
チクショー！！期待させんじゃねえー！！だいたい、何の意味があ
って立ててんだよ！ああん？しかも、残念ハズレって当たりがある
のか？

あるんだろつな？！探してやるよ！！『ごし』が帰るまでにな！！
ハツハツハツハツハ！！

樹は探索を始めた。それはもうくだらない探索を。

そして樹は探し始めて数十分後に7個目の看板を見つけた。

(い、今まで見つけた看板はどれも最後には『残念ハズレ。』って
書いてあったけどな、お前は違うだろ？)

「なあ？七個目の看板さんよお？」

探索を始めた樹はすぐに2個目の看板を見つけた。それには『ここ
から先はきのこの山。残念ハズレ。』と書いてあり、「え？菓子名
？」などと突っ込んでみたり。

3個目の看板はそこから少し先にある森のなかで発見。『ここは森
です。迷子になるよ？残念ハズレ。』と書いてあり、「迷子はもう
いいよ。」と頭を抑え。

4個目の看板は森から出て右斜め前にある、ところで発見。『近い
ね。残念ハズレ。』とあり、「いや、何が近いんだ？看板同士の距
離のことか？おもしろくねー。」と看板を蹴り。

5個目の看板は蹴って壊れた看板の破片が飛んで行ったほうにあり
『僕を見つけるとはやるな。残念ハズレ。』に対して「何に対して
ハズレなんだよ？おい。」と脱力気味に言ってみたり。

6個目の看板はとぼとぼと歩いていたら発見し。「もう、これでや
めにしよー。」とか言いつつ書いてある文字を見ると。

『あと、少し！！頑張つて、諦めるな！ここで諦めたら男が廃る。』

残念ハズレ。』と書いてあったため頑張ることにした。

「いやあな。男じゃないけどな、あと少しなら探してやるよ。当たりをさあ〜。ここまでできてくだらなかつたら全部ぶっ壊そう。」

と少し切れ気味でいう樹がのそのそと道を歩いていった。

そして、見つけた7個目の看板。書いていたのは『おめでとう。さあ見よこの景色を……。やったね当たり。』だった。

「ここまで来たのに景色かよ!!! ツチ。まあいいや、見てやるーじやんかその景色をさあ〜。」

そして樹は見た。そこからの景色を。

そして樹は驚いた。そこからの景色を見て。

樹は笑ってしまった。確かにここまで来たかいたと。

「はは。結構きれーじゃん。なんだよ……。やるじゃねーか、きのこ看板サン。」

樹が立っていたのは下を見ればぞっとするほどの高さのある崖の上だった。

しかし、そこからの景色を見ると唾然とするほどの桜の花が山を桃色に染めていたからである。

「しっかしまあ〜、なんで気づかなかったんだ? 桜が咲いてるって今まで森はなんとも見たり通ったりしたのになあ。

桜の木がなかつたからか? 別にいいけどさ、こつやってみれること自体がほとんどないからな。」

樹は飽きずに山の景色を見ていた。都会の方に住んでいるのもかか

わらず自然を見るのを感じるのが好きだった。
いや、都会に住んでいるからかもしれない、自然を感じる見ることで心休まる気がするの……。

ふと、背中に視線を感じた。

（誰だ？刀すら持ってない私を観察する奴は。無防備なんだぞ！もし、刀を抜いていたりしたら言葉の暴力をふるってやる！！）

もし、相手が村人ではなかったらと思うと樹は冷や汗をかかずにいられなかった。

心では強がっても、ここでは意味をなさない。

言葉の暴力とは言っても、たいした武器にもならない。それは樹にだってわかってる。

なんせ、ここは日本であって日本じゃない。しかも、江戸時代頃である。武器を普通に持っていても怪しまれない時代なのだ。

（……どうしたものか。でも、やるとしたら何気なく声を掛けてみるしかないかな？）

ふう〜とため息を付きながら樹は視線を感じる後ろへと身構えながら振り向いた。

すると、そこにいたのは小柄な少年だった。

少年は木の後ろから樹を観察、いや見ていたらしく樹と目が合つと気まずそうに下を向いた。

（まさかの少年。木のせいで容姿が良く見えないけど、きっと村の子じゃないよな。よし、声掛けてみるか。気になるし。）

樹は天羽が言っていたことを思い出しながら、男っぽく声を掛けて

みることにした。

「俺に何かようか？」

「え？男だったんですか？」

(いや、女であってるけど、本当のこと言えないんじゃないやあ〜！！)

「ツハ。女に見えるってか？坊、目が悪いんじゃないやねえの？」

(ふふ。ヤンキーな武者の出来上がり)

「ええっと、ごめんなさい。」

「いや、別にいいから出て来いよ。取って食ったりしねーし、そもそも刀すら持ってないんだぜ？怖かねーだろ。」

「え、別に怖がっていたわけじゃないんですけど・・・。」

「ああもう！だったら出て来いって！」

「は、はいー！」

樹はこの少年との会話で決めたことがあった。それはとても大事なことだ。それは、第一印象のことである。

『真面目』でいくか『ヤンキーなノリ』でいくか『無口』でいくかの選択だ。しかし、今の会話のいで決めるも何も決まってしまうのだが。

(『真面目』でいきたかったのになあ〜。っと出てきたか。ってえーうそ〜)

樹は驚いた。心底驚いた。世の中はなんて不公平なのだろうと思っただけだ。

出てきた少年は、13・4歳ぐらいでどうみても女の子にしか見え

「そ、そうなんですか。ええっと、それは難儀なんぎですね。」
「いや、そうでもない。名前を覚えているからな。」
「・・・名前。そういえば自己紹介がまだでした。僕の名は奏石 小葉です。仕事は護子をしています。」

（ふ、フレンドリーだな、おい。ってか、こいつが『ごし』だったのかよ！どんなやつでもなれるわけ??）

「俺の名前は、佐乃助さのすけだ。仕事はやっていない。」

（おおっと、私よまた勝手に嘘をつくではない。だいたい誰だよ！佐乃助って。）

「さのすけさんってこの人ですか。」

「ああ、そうだ。さん付けはよしてくれよ。似合わんからな。」

「え。ですが年上の方には敬意を払わなくてはならないので・・・。」

「敬意っていつても、どう考えても逆だろ？俺の方が仕事してねえし、しかもお前のほうがすごそうな仕事してるみたいだしな。『ごし』って偉いんだろ？普通より。」

「っう。そうですね、僕はまだまだです。」

「とにかくだ、俺に敬意を払う必要はない。」

「っう。」

（少年諦める。そんな可愛らしい顔で涙目になっても譲ゆるれん。私は友達がほしいんじゃないっ！）

心の中で樹は本音をだしてみた。ここに来て特別親しいやつはまだいない。

（天羽は・・・あれは違うだろう。友達じゃない、知り合いだ。）

とりばあーは、あの方はこの村の母だ。つまり私にとっても母にあたるような気がする。

あ、天羽はだったらペットだ。ペットで上等。まだ、正体がわたらないからな。」

「だったら、敬語をまずやめてみる。敬意を払わなくていいんだから必要ないだろ？」

「え……。無理、無理ですー！」

「いや。無理じゃない、さっき使ってなかったらうが！」

（そう、さつき会話で使わなかった場所がある！！私は覚えているぞー！！少年よ。）

「うう。」

「わかったわかった。じゃあ、こうしよう。俺は友達がほしいんだ。だからお前が俺の友達になってくれ。

なんせ、記憶なくしてから友達がいたかどうかすらわからないかなあ。それに、友達なら敬意や敬語の必要はないはずだ。」

「……友達ですか？」

「嫌か？」

（ここで嫌って言われたら私、泣くわ。恥じる思いで友達になってくださいっていてんじゃあー！YESと言えー！！）

「い、いやじゃないです。」

ここでちょっとつほとする樹がいたが、コノハは気づかなかっただらしい。

「そうか、なら敬語はなしだ。敬意も払うな。わかったな？」

「はい！じゃなくて、うん。さのすけの漢字でどう書くの？」
「ああ、こうだ。」

樹は地面に落ちてある木の棒で【佐 乃 助】と書いた。
コノハもそれに習って、【小 葉】と書いた。

「へえ。それがお前の名前か？」

「うん、佐乃助はそう書くんだね。」

「ああ。よし、コーと呼ばせてもらおう。」

「え。」

(なんだ、なんだよ！その顔は！！ネーミングセンスなさすぎて
いいたそんな顔をするな！！)

「なんだ、嫌か？」

「うん。」

(おい、コラ！即答すんな！！凹むぞコリアー！！)

「む。だったら何がいい。」

「普通に呼んでよ。コノハって。」

「むむむ。面白みが無い。」

「面白くなくていいよ。」

「世の中が面白いほうが楽しいだろ？」

「関係ないと思う。」

(ど、どこまでも否定するなあ。コノちゃんよお。あ、コノちゃん
にしよ〜。)

「仕方が無い。コノちゃんにしてやるよ。」

「もつと嫌だよ。なんだよコノちゃんって!!女じゃあるまいし、僕は男だ!!」

「だったらあゝ」

「コノくんも嫌だからね!!」

「ツチ。」

(まったく、我がままに育ったものだ。いったい誰が育てたんだ!!出て来い育て親!!)

「舌打ちしても、ダメ!」

「わかった、コノ八と呼ばせてもらおうよ。」

「うん!!あ、変わりに僕が佐乃助のことサノって呼ぶから!!」

(なんだ、その言い方は。これで文句無いだろう?ってな顔をするな!!かわいくねえ)

あーだこーだと言い合っているなかで樹は、いやサノは目の端で天羽の姿を捉えた。

天羽は、なにやらジェスチャーで必死にサノに伝えていた。

(いや、わかんねーから。)

「?サノ?どうかしたの??」

「うん?別にどうもしてないけど・・・いや、ちょっと天羽が呼んでいるみたいだから行ってくるよ。」

「え、うん。わかった。」

コノ八は少し面白くなさそうな顔をしながらサノがどこかへ行くのを見送った。

「んで、なんだよ？」

「わからなかったんですかえ？わっちの見事な動き。」

「・・・いや、わかんねえから。あ、私ねえ、佐乃助って名前になっちゃったからあ。あと、記憶喪失ってことに。」

「はあー。なんでまたあ、よくお似合いである名前を・・・それに、元から記憶喪失だろうに。」

「待て。お似合いって、これは男の名だよ？あと、私は元から記憶喪失じゃない。」

「んだあ？樹はいや、佐乃助は男だろうに。記憶喪失は・・・そういうことにしてやろうかの。」

「さっそく呼んでるし。しかも、なんかムカつく。」

「あたぼうよ！んなことより、とりばあーのところに行かんでよかとかいなあ。」

「行かないといけないんだけどさ、コノ八置いていけないんだって。」

「コノ八・・・。ああ、護子の方ですかい。そういえば仲がとてもよろしかったに。」

「ああまあ〜なんてーの。友達になったから。あ、そうだ。あの動き何を伝えたかったんだよ？」

「ふえふえふえ。」

妙な笑い声とともに天羽はにやりと笑った。

「『まだ、手をお出しになるのはいけません。その者はまだ少年なり。もしや、少年好きですか？』という意味ですけん。」

「ははあ〜なるほど。ってんなわけあるかあー！！！！ざけんなよ！天羽・・・羽をむしりたいか？」

「ふのー！ー！！いやですけん。やめてくれやめてくれ。」

「妙な叫び声のほうを止める！」

「佐乃助殿、コノ八殿が何やら心配そうにこちらを見ていらっしや

いますぞ！かまってほしそうに・・・」
「・・・」（コイツ話そらしやがった。）天羽、お前変な噂流すなよ！いいな！！！！」

サノがそういつて天羽から離れてコノハの方へ行ってしまうと、天羽は飛び跳ねながらルンルンと村の方へと帰っていった。

天羽は知らせるつもりだった。村の皆に・・・。

『樹は佐乃助となり、恋人となる者とこの村に帰ってくるため無礼のないように』と――

「あもうつて誰？」

コノハはサノが行ってしまった方をずっと見ていた。

『あもつ』という名前がでてなぜかコノハは心の中がツムツムとしていた。

どうしてなのかがコノハには分からず考えれば考えるだけツムツムとする気がしたので考えないようにしていたのだが。

ギヤー ギヤー

ふお ふお ふお

と楽しそうな声がサノと『あもつ』が行ってしまったほうから聞こえたので、ちよつと声のするほうへ近づいてみた。
すると、本当に楽しそうな2人をコノハは見つけてしまった。

「なんだよ・・・友達いるじゃん。」

ぶーっと膨れるコノ八に『あもう』のほうが気づいた。
そして、何かをサノに言った。サノは慌ててコノ八のいるほうに顔を向けると微笑んだ。

そのサノの顔を見ると何故か顔が熱くなる自分がいることに驚いた。

(ぼ、僕ってまさか……。ううん、そんなはずないよね？違う違う。絶対に違うもん。)

コノ八は自分がサノに恋をしてしまったんじゃないかと慌てた。
もし、そうだったら大変なことになる。まず、サノは男だ。最初は女の人かと思っただけど男だと言っただけで怒られてしまったのだ。
それに、一座のみんなから呆れられるかもしれない。まさか、男を好きになっていると知られたら……。

(っ、まだ好きになったわけじゃないんだから、落ち着こうよ僕。。)

ふうーっとため息をついて、こっちへ向かってくるサノを見ていた。

この村の審査を無事終え、ようやく入れて『とりばあー』に会いに行こうとしたコノ八は髪を一つに束ねた男か女か分からないような人が村の奥へ行くのを気づいたら目で追っていた。

ツハッと我に返って、取り合えず『とりばあー』に草十郎からの頼まれごとを片付けることにした。

『とりばあー』のいる社に着くと、思っていた以上に大きくて驚いてしまった。

戸を叩き、「日下部くわがへ 草十郎殿より預かったモノを届けに参りました。」と言うと中から「お入り。」としゃがれた声が聞こえた。

コノハが戸を開け中に入ると、そこにいたのは巫女の姿をした老婆だった。

「突然押しかけてしまい申し訳ありません。」

「気になさるな。どうせあの大馬鹿もんがあゝ日付の過ぎた書を弟子である、そなたに頼んだのであろう?」

「え、あ、はい。申し訳ありません。」

「よいよい。ちゃんとして届けてくれたのだからな。」

「……。」

「して、そなた。」

「はい。」

「何ができよう?」

「……舞と笛が吹けます。」

「ふむ。では、来週ある収穫祭しゆりかぐさいに演奏してくれんかね?」

「はい!!喜んで!!」

「ふむ。では、頼んだぞえ。床はこちらで用意させるからもう、気楽に村を回ると良い。」

たった、数分しか『とりばあ』と話さなかったような気がしてコノハにはならなかった。しかし、時はそれ以上に過ぎていたようだった。

もっと、言わなければならぬと気がした。でも、何も言葉がでなかった。

いや、言えなかったのだ。『とりばあ』のもつ魔力に対して気を保つのがやっとだったのだ。

(僕もまだまだなあゝ。もっと修行しなくちゃ……。)

そう思いながらコノハは、あの男か女かわからない人が歩いていったほうへと足を向けた。

気になっていたのだ、何故か。

「こっちに行つたんだよね？・・・あ、いた。」

サノが数十分かけてたどり着いた場所にコノ八着いた。これを、サノが知つたら逆切れしていただろう。

コノ八はじつと見ていた。いや、見とれていた。

(・・・。すごい。すごく綺麗な髪きたいをしてる。母さんに負けないくらいすごく綺麗。)

そうして見とれていると、クルリとその人が振り返つた。

向こうからはこちらの容姿が見えないのだろう、どこか少し怪しまれているような気がした。

ふと、目が合った。

その瞳がすごく澄んでいたため逸そらさずにはいられなかった。

(あの、瞳はきつとモノを斬つたことがないんだ。僕と違ってすごく・・・白いんだ。)

陰と関わり、陰を斬れば人はすぐに黒く染まる。

今、この時代に白いままの人がいることにコノ八はすごく驚いていた。

「俺に何かようか？」

そう、問われたときは驚いた。

(俺・・・。男なの？)

「え？男だったんですか？」

心に思っていたことがついつい口に出して言っていたらしい。しまったと思っていると、男は目を細めた。怒っているらしい。

「ツハ。女に見えるってか？坊、目が悪いんじゃないの？」

そう言われたとき少しカチンとしてしまった。

（僕は、坊じゃない！むーでも、こっちが悪いんだしなあ）

そう思いコノハは、取り合えず謝った。

それから、まさかこんなにも、この記憶喪失であるサノと名乗った男と話をするのが楽しいとは思わなかった。

もっと、話がしたい。知りたいと言っていた、上忍護師や自分の護子のことを教えてあげたい。

とのかく、一緒にいたいと思ってしまうようになっていた。そのことに関してコノハは驚いていた。

今まで、そう思ったことがあるのは一度だけだったからだ。そのときはコノハはもっと幼いときだったが……。

「どーかしたか？コノハ。」

「え、なんでもないよ？」

「そうか、ならいいんだが。っと、今から村に帰るんだがもちもん、コノハも行くよな？」

「う、うん。」

「じゃあ、帰るか！」

「うん。」

ぼーっとこの村に来てサノに会うまでのことを思い出していたらいつの前にかサノが目の前にいた。

そして、コノハに帰ろうと手を差し出していたのだ。

コノハは驚いた。

(もしかして、サノって天然なのかも!!普通手なんて繋が^{つな}がないよ!!まあ・・・いいけどね。)

コノハは自分の口元^{くちもと}が緩む^{ゆる}のを感じながら、サノの手を取った。

そして、2人は仲良く村のほうへと向かった。

まさか、天羽のせいでもんでもないことが言い振られているとは知らずに。

9話・そして2人は出会った(後書き)

何やら、変わりすぎている気がします……気のせいでしょう。
ええきつと。きつと気のせいのはず……。

途中で、樹がサノに変わって書かれています。

サノ〓(イコール)樹ですのでそのところよろしくお願いします。

ああ、そうだくれぐれもお間違いのないように……。

サノ(樹)は女です!!女なんです!!!

ちよつと言葉遣いが荒いだけなんです!!

乙女チックなところもあります。

むしろ、出します。(コノ八にはれない程度に。)

10話・役所での出来事（前書き）

江戸に戻ります。

10話：役所での出来事

場は、江戸の役所。

長テールブルに集まった、人、人、人、人、ひと？

それぞれ、肩から提げられた番号のついた札をつけていた。

そして、それぞれの番号順に並んでおり、ただひたすら立ち続けていた。

否、ただ立っているわけではなかった。待っているのだ、始まるのを。

一人の男が役所の戸を開けた。

その男を、皆が見、そして頭を下げた。

「清水殿。今日も何事にもお変わりないようで。」

「うむ。そちも、先刻で陰の一群を抹殺したと報告を受けたぞよ。」

役所に入ってきた男は、清水といいこの江戸に役所を構えた者だった。

清水は貴族の中でも、優秀な者である『大蛇の滅亡』にも参戦し成績を残したと者として有名でもあった。

清水は、周りを見渡した。そして、ふとあるところで目を止めた。

「奴は、どうした？まだ来ておらんのか？」

清水のその言葉に、他の者は目を伏せた。答えたくないのだ。

「??どうした？呉羽くわはよ、おぬし奴と仲が良かったらう？何か知っておるか？」

呉羽と呼ばれた、四番の札をつけている者が、にがにが 苦苦しく答えた。

「あやつは、ただの遅刻ですのでお気になさらないでください。」

「なんと、また遅刻とな？」

「申し訳ありません。」

呉羽に伴い、他の者までもが頭を深々と下げた。

しかし、それとは別に清水はどこか面白そうな表情をしていた。

「よいよい。そなた等が、そんなにも奴のことを気にかけておるようだしな。」

「は？いえ、違います。」

「違うとな？」

「はい。全く違います。ただ、もう清水殿に申し訳なく……。」

「我に、申し訳がないとな？」

「はい。奴を、隊に入れてほしいと願望したのは我々です。」

「おお。そうだったな。気にしてないぞ。そんなことは……。」

「？では、どのようなことを……。」

清水に尋ねようと呉羽が、言葉を紡ぐ前に戸が開いた。

そこには、なんとも爽やかな顔をした、草十郎がいた。

「おお、来よったか。」

「申し訳ありません。陰どもを蹴散らしておりましたら、時があつという間に過ぎておりました。」

「そうであつたか。して、今日は……。」

「はい。なんと、あの名産物で有名な『勺すく』で作られた、饅頭まんとうを持ってきました！！！」

さあ、お褒めください。と言わんばかりの態度に、呉羽ら護師は、

手元にあつた勾玉を投げた。

清水のほうは、なんとも嬉しそうに、草十郎からの手土産を受け取っていた。

「いけませぬ。清水殿!! それを受け取りれば、遅刻したのを見逃すということになりますぞ!!」

参番の札を付けたまだ、若い男が言う。それに続けとばかりに、そつだそつだと他の者までもが言う。

「な、お前らぁー!! 命の次に大事な勾玉を投げていう台詞か!?!」

「お前に、勾玉を投げたのは、陰のような悪を取ってやろうとした我らの優しさが分からんか!!」

「分かる分けなからう!! だいたい、勾玉は身に着けることで陰が簡単に近づいてこないようにするためのものだろう!! それを投げるとは・・・」

「つふ。やはり、わからんようだな。お前に投げることで、清水殿が穢れるのを防いだということをし!!」

「そつちが、本音だったのか!! くっそ。あの優しかった呉羽までもが・・・穢れてしまつて。」

「いや、待て。いつたいいつ、私が穢れたというのだ!!」

ぎゃーぎゃーと騒ぎ出した、護師を他所よそに清水はただ美味しそうに土産の饅頭を食べていた。

.....

そして、一刻が過ぎたころ、護師のほとんどが息切れを起こしていた。

清水はそれを見て、なんとも平和なのだろうかと微笑んだ。

「して、草十郎。そなたどこの陰を滅した？赤か？蒼か？」

「いえ、土でございます。」

「何！！土だと？あそこにも陰が生息し始めたのか。」

赤・蒼・黄の三箇所がいままで、陰が生息していたところであった。

それに加え、生息するであろうといわれていた『土』までもが加わったため、護師達は呻いた。

「そうか。土までもが、喰われたか。」

「はい。土の性質が、土壌が良く、田畑を育てるのに役立つておりました。」

「確か赤は、鉄がよく取れ、赤岩と呼ばれる高品質の鉄が取れておりました。」

「そして蒼は、清き水が流れ、人々の生活のための水が蓄えられていた場所です。」

「最後に黄は、滅多に取れない特殊な蚕が生息しております地です。」

「では、次に喰われる場所は・・・どこと見る？」

「はい。緑に暗などが、危険かと。」

「そうか。」

陰が、繁殖や生息し始める地はみながみな、人々が暮らしていた地であった。

陰が、その地の性質を喰らうために人々は暮らせなくなり、移住をするはめとなる。

しかし、その移住の地もだんだんと少なくなってきた。

「ここも、いつか喰われるのであろうな。」

「そんなことはさせません!! 『大蛇の滅亡』のようにそう大元である陰を消せばよろしいのです。」

「しかし、その陰らしき陰は聞いたことがない。」

「すこしでも、情報があれば調べられるのだがな。」

「何か、情報はないものか・。。」

護師たちは、意見を言い合いました。少しでも、自分達が人々を守る対策をするために。

そんな、言い合いをしている最中、草十郎は一人だけ討論には参加していなかった。

「どうしたのだ?」

清水がそれに気づき尋ねる。

草十郎は、答えずらそうに頬をかいた。

「実は、私の護子にお使いを頼んでおります。」

「ああ、あの紅の子。」

「して、そのお使いとは?」

「はい、『とりばあ』様に・。。」

「なんと、あのお方の元に行かせたと!!!」

「はい。」

「ならば、その帰りを待つしかないであろうな。」

「では、我らはその帰りを待つと同時に、準備をいたしましょう。」

「『祭り』の準備をな。」

そうして、護師たちは解散した。清水殿が馬で帰るのを見送ると同時に。

しかし、呉羽と草十郎は残っていた。

「まさか、あの子をあの方の元へ行かせるとは……。」
「仕方がなかったのだ。」

「ま、どうせ、自らが行っていたら散々怒られていただろうがな。」

「……そんなことはないぞ。」

「いや、ありうる。なんせ、天下のどあほうだからな。」

「それは、褒めていないだろう!!」

「馬鹿が!! お前を褒める奴がどこにいる?」

「俺の護子は、褒めていたぞ!!」

「あほう!! それは、ずいぶん昔のことだろう!!」

「なにおう!! 4年前までのことだ!!」

「だから、昔のことだろう!!」

「いや、昔とは100年前のことをいうのだ。」

「何、自信満々にいつてやがる!! 100年もお前は生きてなかるが!! しかも、ほとんどのものは生きられぬ!!」

「ふはははははははははは!! 俺にかかれば、100年も200年も1年と何も変わらないのさ!!」

「……誰がお前にそんなに生きていてほしいと望むのだろうな。」

「何を悲しいことを。それは、俺の目の前にいるじゃないか。」

「ほお。ってこのやろう!! 私は、お前には真つ先に死んでほしいわ!!」

「またまたあゝ。」

「つつつくな! ええい!! 私は帰る!! お前に付き合ってもらえんわ!!」

「!! 俺ら付き合っていたのか!!」

「アホー!! 意味が違う。」

「そうか、そうだったのか。」

『とりばあ』 聖・巻き 第1章1番

10話・役所での出来事（後書き）

草十郎は、大物なのです。

外伝・草十郎とコノハの日常（前書き）

番外編？みたいな。

コノハを誘ったりしていた。

そんな場合は、コノハの師となった、日下部 草十郎が薙ぎ払った。文字通り木刀で薙ぎ払ったのだ。

そのおかげか、気安く役所に来る者は徐々に減っていった。そんなあるとき、コノハは自分の師に尋ねた。

「ししよ。なぜ、人は僕を見に来ていたのですか？僕は、いたって普通だと思われのですが。」

そんな質問に草十郎は、頬をかいた。

「お前が、普通だったら、世の人は皆が皆、超人になるぞ。」

草十郎の返答に、コノハは真ん丸い目を、それ以上に丸くし見開いた。

「皆がちょうじんになるのですか。それは、すごいです。」

「そうだろ。すごいだろう。でだ、なんでお前を人が見に来ていたのかを知りたいんだな？」

「はい。知りとうございます。もしかして、めのせいなのですか？」

「うん？まあ、それもあるだろうけどなあ。お前さあ、あの時、あの弱そうな奴が手合わせを願いたいと言ってきたときあったらどう？覚えているか？」

「はい。覚えています。ですが、よわそうではありませんでしたよ？」

「いや、だからな。お前あいつを吹っ飛ばしただろう？」

「きつと、手加減をしてくださっていたのです。受身体制をとっておりませんでしたし。」

「……普通は、子供相手に受身体制なんてとらねえーんだよ。」

「！！そんなんですか？ごう兄いは、いつもとっていましたよ？吹っ飛んじゃうからって・・・。」

「そうか。あの、巨人を吹っ飛ばしたのか。」

「きよじんでは、ありません。背が大きいです。」

「だが、自分より身長の高い相手を、ふっ飛ばしたんだらう？」

「あのときも、あの方と同じように受身体制をとっておりませんでした。」

「・・・そうか。」

「そうなのです。」

「でもな、9歳の子供がつつうか、子供が大人を木刀で薙ぎ払っただけで、吹っ飛ばしたりはしねえーんだよ。」

「！！！！そんなのですか？では、僕は人より力が強いのでしょうか？」

「ちいっと違うな。力が強いのではなくてな、刀の使い方が上手いんだよ。」

「かたな？力ではないのですか・・・。残念です。」

「いやな。そこで残念がられてもどうしようもないのだがな。」

「だって、僕は一座の者だったのですよ？一座の者は戦いや争いを拒むのです。なのに、刀の使い方が上手いのは褒められたことではないのです。」

「そうだらうけどなあ・・・。」

草十郎は、また頬をかいた。

そんな、草十郎を紅の瞳でコノハは、じいっと見つめていた。

「瞳の色にとって、力が宿ることを知っているか？」

急に、草十郎が話を変えたのに、コノハは始めキョトンとしていた。

が、コクリと頷いた。そのことに関して昔、母親が言っていたの

だ。『瞳に色があるものは力を持つ』と。

「そうか。ではな、ここには・・・この役所にはお前の他にあと4人ほど瞳に色があり、それぞれ力を持つものがあるのだ。」

「そうなのですか？気がつきませんでした。」

「そりゃあ、そうさ。色を変えているのだからな。」

「色を変える??そんなことができるのですか??」

「まあ、できる見てーだぞ。」

「どのようにして?」

「そりゃあ、瞳の力を借りてだろう。」

「瞳の力を借りる??」

「ああ。まあ、力の使いとかわかんねえーとか思っているんだろう?たいていがそうだと、ダチに聞いたことがある。」

「その、ししゅうのお友達の方も、色を持つ者なのですか?」

「まあな。だがな、コノハ・・・お前はもう、力を借りているんだぜ?」

「!!そうなのですか?気がつきませんでした。」

「だるう??本人は気づかずに使っていることが多いって話もあるからな。」

「いつたいどのように使っているのでしょうか?」

「・・・お前が悩んでいることだよ。」

「悩んでいること?・・・ご飯が美味しくなりますよ!とかの願事ですか?」

「・・・お前そんなこと毎日思っていたのか。違うからな。」

「では、ししゅうのいびきがなくなりますように?」

「お前なあゝ、いびきは誰だっかくんだよ!!!」

「それは、初耳です。ではあゝ・・・」

「まだあんのかよ?不満が・・・。」

「ししゅうは、不満がないのですか??僕には沢山あります。」

「じゃあ、言えるだけ言ってみるか?」

「わあー」

そして、今日もコノハと草十郎の追いかけてつこが始まる。

草十郎が、本気で走ったらコノハは、すぐに追いつかれてしまう。そのためか、草十郎はたいしてスキップをして追いかけていた。

コノハは、キヤーキヤー言いながら、楽しそうに逃げるが、他の者例えば、同士のものが草十郎にスキップで追いかけられたのであれば、顔を真っ青にしながらワーワー言って逃げたであろう。

なんせ、草十郎は、背丈が180とある、この時代では巨人にあたるほどの大男であった。

また、ごつい体をしているが、イケメンであるらしく女どもの噂がなくなることはない。

しかし、イケメン+ごつい体+背丈180+スキップ=怖いであるらしかった。

「お、おい。またやっているぞ。」

「怖くないのかねえ？紅の子はあ・・・。」

「遊んでくれる奴に怖い奴は、いないのではないのか？」

「そうなのか・・・。だが、俺はあれは無理だ。」

「私だつて無理ですよ。」

「呉羽でも、駄目かあ。」

「こりゃあ、遊びが終わるまで待つしかないな。」

「もし、声を掛けて、スキップしながらこっちにきたしたら・・・。」

「言うな。そして、考えるな。」

「怖すぎる。」

そんな会話が、廊下でされているとは、庭の近くに部屋を持つ清水以外知りもしなかった。

また、草十郎がことあるごとに、スキップをするようになったの

外伝・草十郎とコノハの日常（後書き）

コノハが護子になりたてのときの話です。

あと、草十郎がスキップするのは癖になってしまったようです。。。

11話：村に着きましたが、何か？

ペタペタペタ　　ザッザッザ

2つの足音が村に低く響く。

コソコソコソ　ゴニヨゴニヨゴニヨ

足音の持ち主たちを囲むように、人？の声が囁いていた。

「・・・？なんだ？」

村の住人どもの様子がおかしい。サノは、村に入ってから約5分経過して気づいた。

隣を見る。コノハは、何事もないかのようにニコニコしていた。

楽しいことでもあったのだろうか？

しばらく歩く2人。とりばあー宅に向かう2人。その後続けとばかりに村人たちが連なる。

（おかしい。今の時間は、夕食の準備をしているはずなのに・・・なぜだ？）

パタリ

足を止めてみる。隣のコノハもそれに習って足を止めた。ついでに、後ろの奴らも足を止めた。

(待て。まてまてまて。意味わかんねえーから。)

サノは、混乱した。頭が、パンクまではいかないが、混乱している。

「おお。これはこれは、佐乃助殿。遅かったですのお。」

首を傾げ考えているサノに、前方から声が掛けられた。天羽である。

「……。ツハ！お前のせいか！！天羽！！」

「いやはや、何のことやら？」

つかつかつかつと、天羽に駆け寄り、一発見舞った。見舞ったはずだったが、避けられた。いや、避けたんじゃない。

天羽は、サノが右ストレートを当てようとした直後、鳥に変化したのだ。

「お前という奴はあ~~~~~！！」

「危ないでっせえ」

「自分が、何をしたのかわかっているのか!？」

こんな会話をする、たいていが重大なミスをしたかのように思えるだろう。

だが、違う。確かに、サノとコノハにとっては、重大なこともしれないが、他の人にとってはどうでもいいことである。

「ええ、ええ。分かっておるよい。佐乃助殿とそちらのお方があ
く……。」

「羽、むしるからな。」

ボソつとサノが呟いた言葉に、天羽は身を竦ませた。

コノハは、いったい何が起こっているのかわかっておらず、ただ、サノと天羽を眺めていた。その視線を送る瞳は、どこか嫉妬を含ませながら。

そんなコノハの様子に気がつかないサノ。気がついている天羽と愉快な仲間たち（村人）は、微笑ましそうに見ていた。

「ああん？天羽は、何を笑っていやがるんだあ？」

「気のせいですじゃ。」

「気のせいなわけあるかい！！」

「とりばぁーのもとへ行くのでは？」

「行くよ！！行くけどな！！」

「おやおや、お連れの方がお暇をしておるようですよ」

「話を逸らすな！！」

「ふえっふえっふえ。」

クソつと毒づくサノは、チラリとコノハを見た。

コノハは、サノからの視線に気づきニコリと笑った。

（~~~~~っかわいいつ！！って、危ない。思わず顔が歪みそうになった。）

そんなサノに気づいてか天羽は、ふえっふえっふえつとまた楽しそうに笑った。

サノは、気づいているのだろうか。天羽に遊ばれていることに・・。

「ったく。天羽！！村の奴らに言っとけよ！！」

「へい。」

「いや待て。何を言うか分かっているよな？」

「へい。」

「返事はいいから、言えって。」

「へい。」

「あゝも~~~~~~~~!!！」

「ほい。」

天羽は、間抜けた返事をして飛び立っていった。いや、逃げたのだ。

天羽が、飛び立つのを見て村人たちも、散らばっていった。

(いったいあいつらは、何がしたかったんだ!?)

サノは、気づかない。村人が実は、コノハとの間柄を冷やかそうとしにきていたのを。

気づいていたら、きつと一人ひとり丁寧に捕まえて、げんこつを喰らわせていただろう。

「わ、悪いなコノハ。」

天羽が、逃げてから何故だかコノハとの間の空気が気ましくなり、どうしようかと悩んでいたサノだが、とりあえず謝ることにした。もちろん、コノハは首を傾げる。何故謝られたのかが分からないからだ。

「いや、あの、そのお~~~~~」

「~~~~サノが、何に謝っているかわかんないけど、別にいいよ?」

「だ、だよな?何に謝っているかわかんねえよな?って、なんで最後疑問系なんだよ!??」

「さあ〜?」

「コノちゃん。何かに怒ってない?」

「・・・サノ。怒るよ。」

「すみませんでした。」

サノは自分が年上であることを忘れていているわけではない。何故か、自然に言葉がでてしまっただけである。

(・・・イマ、コノハノメガ、ヤバカッタ。)

サノがしゃがみ、地面にの『の』の字を書き始めたのを、コノハは、ため息をついて見ていた。

「サノ。どこかに行くんじゃないの?何を落ち込んでいるのさ?」

「別にい〜。年下の奴に、目で負けたことに対して落ち込んでいるわけじゃないからなあ〜。」

「あーうん。」

「なんだよその曖昧な返事はあ!!!本当だからな!!!」

「うんうん。」

「はあ〜。これだから子供は・・・。」

「っで?どこに行くの?」

「・・・(スルーされた。嫌味言ったのに、スルーされた!!!) とりばあー宅だよ。」

「とりばあー宅って、社のこと?」

「やしるおー?うん、まあそこだ。」

「サノ、もしかして社知らない?いや、わかんなかったんだね。」

「気の毒そうな顔をするな!!!」

「じゃあ、行くつうよ?」

「おう!!!」

「隣におるのが、先ほどの護子かのお？こりゃぁ……。言わないほうが仏かのお？」

とりばぁーは気づいた。コノハが今は誰にも気づいてほしくないことを。

「しかしまぁ。気の毒によのお。・・・じゃが、樹がこのまま『サノ』として、行動をするのであれば、コノハにとっては嬉しい限りであるうな。」

仕方ない。そう言っるとりばぁーは、こちらに向かってくるサノとコノハを出迎える準備を始めた。

——そして、戸が叩かれた。

11話：村に着きましたが、何か？（後書き）

天羽はちゃんと、広めておりました。

サノはどんどん、天羽に遊ばれていつております。

そーいえば、コノハと天羽は会話をしておりませんね。

何故でしょう？

ただコノハが口を開かないだけなのかは・・・うんぬんかんぬん。
イズレ分かるということぞ！

12話：世界のできた

戸を叩くサノをコノハはじつと見ていた。いや、叩く前から……つまり、出会った時からずっとである。

何故自分がこんなにも、サノを見てしまうのかは、心当たりがあるが、認めたくないので無視をしている。

だが。とコノハは思う。

(……。サノが時々女の人に見えるのはきつと気のせいなんだろうなあ)。僕、どんどん危ない人になっている気がする。(

そんなコノハの視線にさえ気づいていない当人のサノは、深呼吸を一つ。

「とりばあー。い、佐乃助です。」

サノは、危うく【樹】と名乗りそうになりながらも、なんとか名乗る。

「お入り。」

「はい。」

戸を開くサノ。

戸を閉めるサノ。

コノハを見るサノ。サノの行動に驚くコノハ。

「?どうしたの?」

「言い忘れていたことがある。」

「何?」

「何を見ても驚くなよ。」

「一体何が待っているのさ？」

「さてな。」

サノがもう一度戸を開け入った。

コノハは不審に思いながらもサノの後に続いた。

「座りなされ。」

とりばあーの言葉にサノとコノハは、庵を囲んで座る。

サノは驚いていた。コノハが何も言わずに平然としていることに。

(護子って、やっぱり他の人とは感覚が違うのかなあ。)

なんて感心しながらコノハを見ると。

ああ、やっぱり。とため息をついた。

「コノハ？大丈夫か??」

「う。え?ううん。大丈夫だよ?」

コノハは驚いていた。

とりばあーが、鳥の姿をしていることに。しかも鳳凰である。

コノハはサノからわずかに離れていた。しかもとりばあーよりも驚いたことである。

サノが心配そうな顔でコノハの顔を覗き込んでいたからである。

(~~~~~近!!!サノ、顔が近い!!!)

サノのことが、なコノハにとってそれは、あまりにも嬉しいことなのだが、恥ずかしいのほうに勝ってしまう。

またサノのほうは、安心した。コノ八がとりばぁーを見て固まっていたのが、解れたことに。

そんな、2人をとりばぁーは微笑ましそうに見ていた。

「佐乃助。」

「は、はい。」

サノは、慌てる。自分が呼ばれたことに一瞬気がつかなかったからである。

（あ、危ない。名前変えたんだよ。・・・でも、なんかとりばぁーに呼ばれると違う人みたいなのがする。）

「記憶のほうで、何か思い出すことはできましたか？」

「・・・いえ。すみません。」

「良いですよ。そんなに、落ち込まないでください。何も記憶が戻ったからといって、村から出て行けなんていいませんからね。」

「・・・ありがとうございます。」

サノはそういいながらも本当に感謝していた。自分勝手に決めた、【記憶喪失】というもの。それに、とりばぁーはちゃんと合わせてくれていたからだ。

コノ八の方はとりばぁーとサノを見てサノに対して驚いていた。

（サノは凄い。とりばぁー様の魔力を気にも留めずに整然としているなんて。・・・僕にはまだ無理だ〜〜）

横で、コノ八が落ち込んでいるのに気づかないサノ。気づいていないとりばぁー。

そんなとりばぁーがコノ八を見てサノに言った。

「佐乃助。そのたは、護師と護子について聞きたがってたのう。」
「はい。」

サノがそう答え。その問いにコノハがサツと顔を上げた。

「記憶を無くし全てのコトを忘れてしまっているのにも関わらず、今知りたいと思うのは【護師】と【護子】についてじゃと。今更じやが変わっておるよのお。」

「う。そうでしょうか？（てか、コノハも【ごじ】とやらだしい。気にならないわけがない。）」

「そうじゃ。まあ、そなたの隣には【護子】である、コノハいる。」

行き成り話に名を出されたコノハは慌てた。しかし、サノと目が合うと微笑み落ち着きを取り戻した。

サノはそんなコノハの笑顔に癒され、内心では自分自身の不満を言っていたりする。

「あ、やっぱり、コノハに聞いた方が早いとか？」

「うむ。その方が良からうて。」

「そうだけどさあ。うん、じゃあさ、この世界というか現状と昔のことについて教えてよ。記憶無いからさ全然わかんなくて・・・」

「そうじゃなあー。では、コノハよ。この世界について説明してみなされ。」

「うえ？あ、はい。」

コノハは不思議だった。サノの記憶喪失というものは、どこからどこまでの記憶を失くしているのかという疑問が生まれたのだ。

しかし、そんな疑問もすぐに消えた。とりばあーから話を振られたからである。

『 暗闇があり 光が生まれ 星ができ 生き物が生まれた

そこに 文化が生まれ 争いが起こり それは大きくなった

仏が 神が 地獄の大魔王が 嘆き悲しんだ

その涙が 影を作り それを消さんと人は武器をとった

影は 陰 と呼ばれ それと対なる 陽 が現れ

人々は 陽 との共存を選んだ

それが果たして正しい選択だったのかは誰にもわかるまい

これはとりばあー様が謡った詩うたのなかにあるものです。

つまり、この世界は【生き物】がいて【変聖物】がいて【陰】がいて【陽】がいます。

【生き物】は僕やサノのようなヒト、植物や他の動物を指し、【変聖物】はとりばあー様のような方々を指します。

また【陰】と【陽】は詩にも出てきたようなモノでもあり、ヒトの裏と表とも言われています。

始め僕たちヒトは【陰】に怯えて暮らすだけでしかありませんでした。

【陰】がヒトに何か危害を加えたわけではありません。

ヒトが【陰】によって、危害を加えられたわけではありません。

ただヒトは怯えていました。
その姿が闇に包まれているだけで……。」

サノはコノハの話を聞いていると不思議に思うことがいくつもあった。

まずこの時代の人々は既に、宇宙や惑星があったことを知っているかのように……。

（この時代の人はどうやって知ったんだろう？そもそも、実際に神や仏がいたのかよ。）

サノは混乱していた。そのせいか頭が痛くなってきたのだ。

（慣れない頭を使うからか？そもそもそんなに難しくはないはずなのになあ）。私は本当に、馬鹿なんだろうか？

サノは悲しみながらため息を付くと、ふと疑問に思った。

（待てよ。とりばあーが語った詩って言ったよな？とりばあーは何を知っているんだ。それにこの世界はどういう構造をしているんだよ！！）

余りの不明さに額を押さえながらサノはコノハの話を遮ることにした。

「ちよ、ちよっといいか？コノハ。」

「？何？」

「なんか、いろいろと変なことないか？」

「……。例えば？」

「【陰】と【陽】がどうやってできたのかはわかった。また【変

聖物【】っていうのがとりばあー達のことを指すってこともわかった。
でも……」

サノはどう言葉を繋げればいいのかわからなかった。

(どういえばいい？何故、この惑星ほしの外が宇宙であることを知っているのか。とかそのまんま言ったら絶対怪しまれるなあ……どうしたら……)

「サノ？」

コノハは首を傾げた。サノが何を言いたいのかさっぱり分からなかったからだ。

(サノは【陰】と【陽】が何故いるのかを理解できたのに、何が知りたいんだろう?)

たいてい理解するのが難しいといわれている【陰】と【陽】であるため、コノハには不思議に思えるのだった。

それに2人はとりばあーがいつの間にか姿を消していることに気づいていなかった。

「あ、あのさあー……」

試行錯誤しながらサノが口を開こうとすると。

ツバン

「ふん。まだ、こんなところにはやがったの。」

戸が勢いよく開くと同時にとげのある口調で長身だがまだ顔立ちが幼い男が入ってきた。

12話・世界のできた（後書き）

最後のほう、変えました。

次が全く違ったヒトになってしまったためです。ハイ。

13話：赤い髪の男（前書き）

12話最後の方変えました。でないと、話が続かない。

13話：赤い髪の男

コノハは啞然としていた。

見知った顔があつたからだ。いや、入ってきたからだ。

赤い髪で、一房ばかり白い髪がある長身の男だが、草十郎よりは低く顔は整っている方だが口調が悪いと評判である男だ。

そして何より性格が一番問題であつたりもする。そのせいかコノハも苦手とする相手だつた。

「……何故。何故、赤朔せきとくがここにいるのですか？」

赤朔と呼ばれた男はコノハに目をやると鼻で笑つた。

「全然おもしろくねえーなあ？コノハちゃん？？少しくれえ驚いた顔を見せても良いんだぜ？可愛いお顔のコノハちゃんが驚いた顔したら、そりゃもう俺サマだつて惚れちまつかもな。」

ハハハハつと笑う赤朔にコノハは睨んだ。

「話を逸らさないでほしいのですが。」

「おいおい。別に俺はそらしてなんかねえーよ？」

「だつたら……。」

「フン。お前と違つてなあ。忙しすぎる俺サマがこんな寂れた村に来るつてことはよお、一つしかねえじゃねえか。」

「……。」

「おやおや？わかんねえーの？？天下のコノハサマにやあわかんねかつたか？教えてなんかやらねえーよ。」

「赤朔……。」

「あん？聞きたいんならババアだせや。」

さすがにコノハもこの言葉を聞いて何かがぷつんと切れた。

「・・・いい加減にしたらどうだ？私に対しての暴言は許そう。しかし、あの方にそのような言葉遣いをするとは礼儀がなっていないんじゃないのか。」

「フン。なにエラソーに言っただ？たかが、俺より先に護子になっただけだろ？歳は俺の方が上っただよ！！」

赤朔はコノハに拳を挙げようとしていた。

バコッ

赤朔は唾然とした。自分に何が起こったのかが分からなかったからである。

コノハを見るがコノハ自身も目を見開き呆けた顔をしていた。

「っつ。」

赤朔は殴られた腹を抱え蹲った。

そして、自分を見下ろしている相手を見やった。

「さつきからずっと見ていたが、ノックもせず、勝手に部屋へと上がり。自分よりも先輩にあたる者へ対しての敬意もなく。終いには、目上の者に対しての礼儀もなっていない。最低だな。」

サノは覚めた目で赤朔と呼ばれた男を見ていた。

そしてドスの効いた声をその男へと投げた。

「しかも、何んだ？怒られれば、手を挙げるのか？どんな相手に

も？」

サノは怒っていた。コノハだけではなく、とりばあーに対しても
の暴言。いくら護子が偉かるうがサノの堪忍袋が悲鳴をあげていた
ため、つい手がでてしまったのだ。

そんなサノに対してコノハはただ目を見張るしかなかった。

赤朔の暴言に怒りを感じていたのは自分だけではなかったという
こと。

また何よりも、自分より早く動き赤朔の腹に一発入れたことにも
コノハは驚いていた。

(・・・サノは強いんだ。)

そして驚くと同時に關心していたりする。

「き、貴様。いったい誰に対して手を挙げたと思っているんだ！
？分かってているのか！！」

「ぎゃーぎゃー嫌い。分かっているさ。人間だろ？別に悪いこと
じゃない。それに口より先に手が出てしまうのが性分なんだ。許
せ。」

赤朔はまたしても、啞然とした。

(何を言っているんだコイツ。わかってねえんだな。護子に対し
て手を挙げるのだれほど重罪であるかを・・・。)

「貴様は牢に入るほどの重罪を犯したんだぞ。」

「ほおー。そうなのか？では、自分より目上の者を罵倒するのは
重罪ではないのか？」

「……………」

「この社にいるお方は、お前達人間よりも遙かに偉いと思ったのだが、気のせいだったのか？」

「つく。」

「それに・・・お前のせいで大切な話が途ざられてしまった。どうしてくれる？この苛立ちどこに向ければいい？」

自分勝手なことを言っているとサノは自覚していたがどうしても口に出しておきたかった。それほどまでに、サノは赤朔のことを嫌っていたのだ。

(驚いたなあ。初めて会った奴にこれほどまで嫌いになるなんて・・・心が狭くなったのか私。)

それにとサノは思う。

(ここは日本だろ？なんで赤い髪がいるんだよ！！しかも白も入っているって・・・。最近の奴でもそんな髪の色にしないぞ・・・きつと。)

「・・・。」

「だんまりか？あの威勢はどこにいった？まあいい。出直して来い。どうせ、強引にここに来たのだから？」

「・・・。」

「何故分かるってか？外がな・・・騒がしいんだよ。侵入者ってな？」

「つく。」

赤朔は自分を見下ろしている女のような男に対してなにも言えなかった。

言えなかったばかりか、その男が発する殺気に手が震えだしてい

ただ。

赤朔は何も言わずに立ち上がり、戸を開け外に出て行った。
そんな赤朔を見てコノハはサノに何ともいえない感情を抱いた。

「・・・ふうー。まったく、なんだ？あのガキは・・・」

「ガキって。赤朔はもう16だよ。」

「16って俺より2歳も下じゃん。それに16はまだまだガキだ
ぜ？」

「じゃあ、僕はどうなるのさ？」

「・・・さあ？」

「誤魔化してる。」

「んなことより、コノハは護子のなかでも偉いほうなわけ？」

「うん。一応かなあ？」

「一応って・・・。入ってからの年数の違いとか？」

「うん。そんなのじゃないよ。優能な人はすぐに護師になれる
から・・・。」

「なんかその護子とか護師とかにもランクがあるわけ？」

「らんく？」

「えつとー。称号みたいな。」

「ああ。うん。あるよ？」

「ちなみにコノハは？」

「弐。」

コノハの顔を暗くなった。サノは焦る。

(え？2って低いわけ？称号って簡単にあがったりするのかな？)

「2？ってどんくらいなわけ？」

「下から二つ目。」

(ああ。地雷を踏んでませんように。気を取り直して。)

「んじゃあいつは1つてこと？」

「うん。昔から伍まであって、伍になると護師になるための試験が受けられるんだ。でも、称号があがることは滅多になくて・・・。」

「ああ、じゃあ何年もその称号のままだったりするわけだ。」

「そうだよ。だから皆、護師になるために名声を上げようとするんだ。」

「コノハも・・・？」

「僕はまだいいよ。称号が上がる度に危険な仕事が回ってくる。」

その仕事を受け持つには僕はまだ早い気がするんだ。」

「慎重派なわけ？」

「・・・多分違うよ。きつと怖がりなだけだから・・・。」

「ふん。まあゆっくりでもいいんじゃない？コノハまだ若いんだからさ。」

「うん」

俯いてしまったコノハにサノはどう声を掛けるべきか悩んだ。

悩んだ結果がこれだ。

「んでさ、さっきの話の続きがしたんだけど・・・。」

(なんて気が利かないんだろう。・・・ごめんね？コノハ。私は自分に正直らしんだ。)

「え？ああ、うん。・・・それで何が不思議に思ったって言ったっけ？」

「ええつと。コノハたちは・・・この世界が惑星^{ほし}であることをいつ知ったんだ？いや、違うなあー。うん自分達が惑星のなかに住んでいるということを・・・。」

「？生まれたときからその知識は備わっていたよ？サノはその知識まで忘れてしまったの？」

「うえ？？生まれたときから知っていたって・・・。」

「ふう。なんだそれまで忘れちゃったんだね。あ、でも生まれたときはただ知識があるだけで、なんのことかわかってないんだよ？だって当たり前じゃん。生まれてすぐの赤ん坊が言葉を理解し話していたら変でしょう？」

「まあそうだけど・・・。」

「自我を持ち始めたときに、その知識をやつと理解できるんだよ。いや、理解できるって言うか思い込むってほうが正しいかも。」

にっこり笑いながら言うコノハにサノは少なからず恐怖を抱いていたりする。

自分達の世界とは違って生まれたときから備わっている知識に対してじゃない。

（なんで・・・不思議に思ったりしないんだろう？思い込みって、それでも無理がある気がするんだけど。）

「思い込むねえー。コノハは不思議に感じたことはない？」

「何が？」

「だから、その・・・。その知識が何故備わっているのかとか。」

「どうして？だって、神様がその知識を僕らヒトに与えたものなんだよ？不思議に思うことなんてないよ？」

「・・・っつー!!」

サノは啞然とした。神が実在すると信じきっているコノハに、否、この世界の人々に対して驚いていたのだ。

（ほ、本当に存在するわけ？神さまが??だったら・・・なんで

「サノ??」

行き成り黙り込んでしまったサノにコノハは心配そうに声をかけた。

コノハの方は逆にサノに対しての恐怖を感じていた。

(サノは全ての記憶を忘れてしまっているんだ。・・・どうしよう? 洗礼のことも忘れてるんじゃないのかな?)

「あ、ごめん。コノハ?」

我に返ったサノは今度はコノハが黙り込んでしまったのを心配した。

「ん? なんでもないよ。」

「そうか。」

「ねえ。サノ・・・洗礼のことはさすがに覚えているよね?」

「せんれい? 何かを清めるのか?」

「!!!」

「そんなに驚かなくてもいいんじゃない? 言っただろう? 記憶喪失だつて。」

「でも、そこまで酷くなくても・・・。」

「その洗礼は、すっごく大切なわけ?」

「あ、当たり前だろう!!」

サノはコノハの気迫に驚いて、一歩下がった。

(・・・。洗礼^{イコール}大切なモノつと。)

「……どう大切なんだ？」

「はあー。」

「いや、ため息をつれてもな？」

「わかったよ。さっきの続きを話すから今度は黙って聞いててよ
!-!」

「手短に頼む。」

「注文が多すぎなんだけど……。」

「気のせいだろ？それに、良心として……。」

「あゝもう!! わかったよ。子供に聞かせる方で話すから!!」

「おう!! いい説明方法があるじゃん。」

「……普通はこつちを話したりしないんだけど。仕方ないよね
？サノだもん。」

「おい、コラ。何、自分は俺の全てを知ってます。みたいに言っ
てんだよ。」

「っふ。いずれそうなるよ。」

「……。」

(なつたらやばいんだけどね?)

サノは座りなおして、コノハの方を向いた。

そして、コノハが再び口を開いた。

そう、今度はさっきよりも簡単な説明で……。

13話：赤い髪の男（後書き）

赤髪さんこれからちよくちよくでできます。
迷惑なほどでできます。いえ、出てこさせます。

14話：大きな力

「子供向けの話ねえ。」

ふうーっとコノハはため息をついた。

（・・・何がいいのかな？洗礼まで忘れてるんだから、『光と影』にしようかな？あれは・・・）

「そうそう。子供向けの一番簡単なやつがいい。頭使うの嫌いなんだ。」

サノの言葉によりコノハの思考が一時停止した。

（『光と影』は駄目だ。サノには難しすぎる。）

コノハは一人頷く。それを見たサノは顔をしかめた。

「おい。今、失礼なこと考えなかったか？」

「失礼なこと？」

「ああ。」

「別に、ただサノには易しい物語にしようと思っただけ。」

「お、お前・・・。」

サノは絶句する。自分が悪いことは分かっているが、ここまで言わなくてもいいと思ったりもした。

（コノハはこの短時間の間で性格が変わってきていないか？もしかしてこっちが素？それは・・・嫌だなあー）

「だいたい、サノが難しいの駄目だっというからいけないんだ。子供向けってほとんど忘れてるのに・・・」

「子供時代に戻れ。いや、今も子供だったかー。」

「・・・サノ。」

コノハの声音が低くなった。

(何故だろう？事実を言ったのに怒ってないか？)

サノにはわからない。子供扱いを毎日のように受けているコノハにとつてその言葉は、禁句だということ。

サノは首を傾げるが、コノハの目が怖かったので謝ることにした。

「すまん。」

「ただ謝ってるだけにしか思えないんだけど。」

事実だが嘘をつくことにしたサノ。

「気のせいだ。本当に悪いと思っているその・・・」

「繰り返し言われるのは嫌だから言わなくていい。」

「そうか、そうか。」

コノハの機嫌が少し良くなったのでっほとしたサノは、さあ話を・・・と説明を求めた。

コノハは、まったくくっと言いなながら苦笑した。いろんな意味でサノに敵わないと知ったコノハがいた。

「じゃあ話すよ？今から話すのは本当に子供向けだからね？」

「わかったわかった。」

「昔、昔の話です。」

まだヒトが存在しなかった頃、世界にはヒト以外の生き物が幸せに暮らしていました。

しかし、ある時。神が気まぐれにヒトという生き物を御生みになったのです。

ヒトはだんだんと知識をつけ他の生き物とは違い神の元から離れていきました。

そう、ヒトは自我を持ち始めたのです。

自我を持ち始めたヒトは他の者と自分が違うことに気づくとその者を傷つけました。

しかし、他の者が自分と全く同じということはありえません。

そして一人では生きていけないことに遅からず気づき始めました。

ヒトはいつしか集団で生活を始めました。

集団の中で、強い者あるいは知恵のある者がその集団をまとめます。

そうして村が出来、街が出来、国が出来、多くのヒトが増えました。

神はただ見つめていらっしやいました。

ヒトが何をするのか興味が御ありだったのです。

ヒトは国をつくりその中で幸せに暮らしていくのかと思われませんでした。

けれど、【ヒト】なのです。

幸せに生きることを望みながらも、争いは起こります。

些細な争いごとならずすぐに済みました。

しかし、大きな争いごと。つまり国同士の争いごとになると、簡単には止まりません。

神は嘆き御悲しみになりました。何故、同じ【ヒト】なのに争いを起こそうとするのか。

けれど、その争いは【ヒト】だけには限りませんでした。多くの生き物が争いを起こし始めました。

神のみならず、仏が地獄の神が涙を流しました。その涙が、生き物の影をつくったのです。

影は争いを起こす者を容赦なく消しました。

ヒト以外の生き物は大きな争いを起こさなくなりました。

けれど、この日本という国は影を逆に消さんと立ち上がったのです。

そのため、日本という国は他の国から切り離され、この世界には日本という国しか存在しなくなったのです。

日本のヒトは影を消さんと立ち上がりました。

しかし、そう簡単に消すことなどできるはずがありません。

ヒトは大きな力をどこかしら手に入れました。

そのお陰で、影の多くは消え去ったのです。けれど、またヒトの多くもその力に飲み込まれ消えてしまいました。

そんな時、影と対になるモノが生まれました。

その対になるモノを【陽】と名づけ影を【陰】と名づけました。けれど、その頃になると【陰】は何もしなくなっていたのです。

そしてヒトは【陰】が影であったことを忘れつつありました。

影を消さんとしていた者があの力に飲み込まれ消えてしまったせいでもあったのです。

けれどヒトは【陰】を恐れました。
暗く闇を好み潜むといわれている【陰】に怯え始めたのです。

逆にヒトは【陽】を好みました。

【陽】は太陽の下を好みまた、人々に生きる術を教えていたからです。

ここまでが、僕達が生まれながらにして持っている知識だよ。」

コノハがそう話をとぎるとサノはただポカンと口を開けていた。

サノはまたしても混乱していたのだ。

「待て待て待て。さっきは【陰】がヒトに危害を加えたわけでもないってヒトも【陰】に危害を加えたわけでもないって言ってなかったか？」

サノの言葉に対してコノハはため息をついた。

「みんな最初はそう疑問を抱くんだ。【影】は【陰】だけど【陰】じゃないんだ。」

コノハの言葉にサノはまたしても口をポカンと開けた。

「どういうことだ？」

「だから、今話していたのは子供向けの物語だから。」

「今のが子供向け？」

「もう！それを聞きたいんじゃないでしょ？」

「そうだけど。じゃあ、【陰】は【影】じゃないってどういうことだ？その物語は嘘ついてんのか？」

「嘘って。違うよ。ただ今になって分かるんだ。【影】はあの時、

大きな力と共に消滅した。けれどそれと同時に【陽】が生まれた。また新たに【陰】も生まれたんだ。」

「……。ってことは【影】の名残を受け継いじゃってんのが【陰】だっけ言いたいわけ？」

「そうだよ。だから、生まれたばかりの【陰】がヒトにどうしようと思わないでしょ？」

「よくわかんねえけど、そうなんだろうな。でも、ヒトのほうはそうはいかなかった？」

「……うん。【影】を消滅させたヒトの多くというかほとんどは一緒に消滅しちゃったから。」

「その力がヒトが制御できる力ではなかったってことか？」

「そうだね。制御できなかったから、使ったヒトも力に飲み込まれ消滅したんだ。」

「だが、その消滅しなかったやつがまだ【陰】に怯えていたってわけ？」

「【陰】というか【影】なんだけだね。【陰】があまりにも【影】に似すぎていたんだよ。」

「ふん。」

サノは話を聞きながら驚いていた。

（なんかすごいことになってるし。世界大戦みたいなことが起こりました。普通なら日本みたいに降伏するってのが、神様現れたせいで降伏どころじゃなくなってる……）

日本が他の国と切り離されて、別の世界に移動されましたって……とサノは頭の中を整理しながら漠然とした。

（日本は大人しい国じゃなかったんだな。対抗するって……しかも核かなにか使ったのかよ。大きな力ってどれほどの威力を持って

いたんだ？)

「少しは思い出した？」

「いや、全然。」

コノハはサノの言葉を聞いて脱力した。

(記憶喪失じゃなくて記憶消滅じゃないのかな？消滅ってあるのかな？)

「それにしても、ここまでのことを生まれたときから知識として備え付けるってどういう神経してんの？神様はあゝ」

「どういう神経って。きつと二度と大きな争いをしてほしくないんじゃないのかな？」

「そんなもんか？」

「だって、サノは記憶無くなっているけど僕はある。その知識ももちろんある。だから怖いんだ。あの大きな争いは二度とあっちゃ駄目だって恐怖として植え付けられているんだ。」

「・・・でも、今【陰】と争っているんじゃないの？」

「僕らヒトと【陰】の生死をかけた戦いだからね。」

「生死？」

「サノは早く記憶を取り戻した方が良いと思う。」

コノハは呆れていた。これではサノが世間知らずということになってしまうからだ。それほどまでにサノは何も知らなかった。

(いや、記憶がないんだよね。・・・僕は記憶喪失にはなりたくないなあゝ大変そう。)

「そうするよ。んで、どういう意味なんだ生死をかけてるっての

は？ついでに洗礼つてやつも。」

コノハは何度目かのため息をついてサノを見た。

きよとんとしている顔のサノはまだ何一つとして思い出していないのだろう。

「わかったよ。じゃあ、話すよ？・・・生死をかけた戦いっていののは・・・」

14話：大きな力（後書き）

すごいことになってきました。

書いているこっちが驚いています。

いったい説明はどこまで続くのでしょうか？

説明ばかりじゃ面白くないですよね？

15話：戦いと平和

「あのやるゝゝゝ・・・」

赤い髪の一房ばかり白い髪が交じるまだ幼い顔を残した男、赤朔は毒づいた。

「好き勝手いいやがつて！！くっそう！！だいたいなんで、コノ八がここにいんだよ？宇津木うつきさん何も言わなかったじゃないか！！」

赤朔は村の関門の前におり審査を受けていた。そのためか、先ほどのことを思い返しては、うがぁーっとな雄たけびを上げ木に八つ当たりをしていた。

何せ審査は長い。コノ八が受けたときも数刻ほど待ち、昼寝をしたほどだった。

「だいたい、ここは陰が多すぎなんだよ！！なんだあの数。どっから沸いて出てきたんだよ？しかも、帰り道分らんねえ・・・」

赤朔の怒りは、佐乃助からコノ八へ、コノ八から陰へと移り変わっていった。

そう、赤朔もコノ八がここにくるまでに討伐した陰の数以下ではあるが、赤朔のように壱の者にとっては5人がかりで倒すほどの陰を相手に一人で頑張ったのだ。そのため何度か死に掛けたのだ。しかも、コノ八同様気づいたら村が目の前に現れたのだ。否、赤朔自身がこの場に移転していたため帰り道がわからなくなっていた。

倒した陰の数を再び思い出すと赤朔は身体の疲労を思い出し草原へ身体を投げやった。

赤朔は目を瞑る。

心の怒りを静めると同時に浮かび上がるは後悔の念。

「……さすがに不味かったよなあ。いくら疲れのせいで腹が立っていたとは言え、礼儀がなつてなかったよなあ。」

赤朔は人からは口や性格の面を悪く言われ勝ちだが、本当はまだ精神的に成長し切れていない部分があるせいでいつも後から後悔するのだ。つまり、まだ子供だということである。

「……コノハは気に入らねえけど、『とりばあ』様には失礼だったよな。……しかし、あのやろう本気で殴ることねえんじゃね？宇津木さんが言いそうなことを言うし。」

人前では決して弱音や反省の色を見せない赤朔だが、宇津木には赤朔のそんな性格をわかつている数少ない一人であった。

赤朔は『とりばあ』がああときいなくて良かったと思いつつ、佐乃助のことを思い出した。

佐乃助の言葉が宇津木、つまり赤朔の護師にあたる者に似ていたため怒られているさなか『何故ここに宇津木さんがいるんだ？』と思つたほどだった。

「宇津木さん。俺がコノハのこと嫌いなのは知っていたから詳しいこといわずにこの村にいる護子を連れて帰れとか、『とりばあ』様に【太陽が沈む】という伝言を言つて来いとか言わなかったんですね？ここに居る護子がコノハじゃなかったらなあ。」

赤朔は宇津木のことを師であると同時に親のように慕っていた。なんせ赤朔は親の愛を知らずに育つた子供の一人であるがため親に、家族に愛されているコノハのことを嫌う一つの理由でもあった。

このようにしてその土地の性質を利用しヒトは生活を始めました。

しかしここ数十年の頃からでしょうか？

【陰】の移動が始まったのです。

【陰】の移動は始めヒトには何の危害もないかのように思われませんでした。

けれど、その思いは間違いでした。

【陰】がヒトが暮らしていた土地に自分たちの住処を作り始めヒトを襲うようになったのです。

ヒトは驚きました。

何故移動を始めたのか。どうしてヒトを襲うのか分からなかったからです。

ヒトを無差別に襲い始め終いには、ヒトよりも生存数が越えました。

ヒトは怯え始めました。

ただ、増えたこととヒトを襲うことに怯えたわけではありませんん。

その地を捨てて新たな地に移り住めばいいと思っていたからです。

ですがその考えは浅はかでした。

【陰】はヒトと同様にその生存数が増えれば増えるだけ新たな地を欲しました。

また【陰】は食用を草木から【ヒト】へと変えたのです。

ヒトの生存数がまた一段と少なくなりました。

ヒトは怯えました。

自分たちがこのままでは滅びるのではないかと思いはじめたからです。

ある時のこと。

一人の旅人が江戸へとやってきました。

奇妙な格好をした旅人は言いました。

『戦いましょう。』

ただ一言そういったのです。

ある者は立ち上がりましたがほとんどのものは首を振りまじ
た。

どのように陰と戦うのか分からなかったからです。

旅人は立ち上がった者と役所を立ち上げました。

そしてその者にあるモノを見せました。

その者は尋ねました。『それは何でしょうか？』

旅人は答えます。『これは【陰】が嫌う石と水です。石を身
につけ、水を被れば【陰】からの厄災からは救われるでしょう。』

その者は尋ねます。『どこでそれを？』

旅人は答えます。『ここに来る途中に多くの場所を周りまし
た。その時々で【陰】と遭遇しましたが何故か奴らは襲ってこなか
ったのです。理由を調べた結果がこの石と水でした。』

旅人が見つけたその石で勾玉をつくりました。そしてそれは、
戦う者へと与えられました。

旅人が見つけたその水は効力が長く続くため、生まれたとき
に一度それから成人したときにもう一度被るところを決めました。こ
れは【ヒト】の全てが行う儀式となりました。

その儀式を……」

「洗礼っていうんだな？」

サノはコノハの言葉を遮って言った。

「うん。これが洗礼だよ。だからサノも洗礼はしているはずだよ？」

「ふん。」

「ふんって……」

サノの返答にコノハは肩をがっくりと落とした。

サノにいたっては。

(いや、してないから。ここの住人じゃないからね?)

などと心で突っ込んでいた。

「それにしても、その旅人はすごいなあ。よく死ななかったものだ。」

「……関心するところはそこ?」

「他に何かあるか?」

「旅人のお陰で身を守る勾玉ができたし、洗礼もできた。それに役所を立ち上げて護士を作った。」

「最初は師弟関係がなかったのか?」

「うん。師弟関係になつたのはここ最近というか、最近じゃないけど……。」

「っは?」

「だから、ね?役所を立ち上げた後、護士をつくって武器持つて【陰】を倒しにいったんだ。」

「それで?」

「【陰】だつてバカじゃないんだよ?仲間がどんどん倒されて逝くを見て団体で立ち向かってきたんだ。」

「やるなあ。」

「褒めちゃだめだよ。」

「しかたねえーじゃん。生きるためなんだろう？【陰】だって。」

「そうだけどね・・・。【大蛇の滅亡】はこのときの戦いで大蛇の【陰】を倒したことでついた戦名なんだ。」

「そいつがボスだったのか？」

「ぼす？」

「だから、親玉みたいなの？」

「まあそうだね。」

「それで、【陰】の暴走は収まったのか？」

「一時は収まったけど、また始まったんだ。」

そう言っつてコノハは俯いた。

サノはため息をついた。どこの世界も同じだと思っつたからだ。

(この世界では、【陰】と【ヒト】が争っていて。向こうの世界では、【ヒト】と【ヒト】が争っている。生きるためなんだろうけど・・・)

世界のあり方は難しいと改めてサノは思っつた。

「ヒトや陰は・・・平和を望みながら、戦いをどこかで望んでい
るんだろっつな。」

「え？」

サノの言葉にコノハは顔を上げた。

コノハにとつてその言葉はまっつたくわけがわからないものだった
からだ。

「ん？なんでもねえよ。いつかこの戦いが終わるといいな。」

「いつかじゃないよ。もうすぐしたら終わるんだ。うっん、終わ

らせるんだ!!」

「そつか……」

サノはコノハの意気込みに何も言えなかった。

(ヒトはそうやってなんと戦争を起こしたんだろうな。私のようなヒト一人がどうこうしたってどうにもならない。でもヒトが協力してやれば戦いが終わるかそれとも拡大するか……やっぱり。)

「難しいな。」

サノは小さくポツリと呟いた。

その呟きをコノハが聞き取ることはなかった。

「そういえば……とりばあーのような【変聖物】はいつ生まれただんだ？」

「さあ？よくわからない。気づいたらいたんだ。」

サノの質問にコノハは首をかしげながら答えた。

「……なんかそれ恐ろしいな。」

「そうかな？でも、あまり気にはしたこともなかったよ。」

「は？ああもしかしてまたアレ？思い込み？」

「……まるで思い込みをしたらいけないかのようにいわないでほしいなあ。」

「んで？思い込みはわけ？」

「たぶんね。思い込みなんじゃないのかな？」

サノは思い込みほど恐ろしいものはないと思った。

それが顔にでていたのかコノハが睨んできたため、またしても謝

る。

（なんかコノハに謝ってばっかりだなあ。まあ謝らせることをしてるんだろうけど。）

が、サノは心から謝っていないのは見ても明らかである。そんなサノにコノハはため息をつくしかなかった。

（サノは少し赤朔に似ている部分があるかも・・・。）

そんなコノハの呆れにサノが気づくことはなかった。

15話：戦いと平和（後書き）

赤朔は素直になるのが苦手な少年というか青年というか男の子です。

サノ＝樹 18歳

コノハ 14歳

赤朔 16歳 です。

赤朔がメインに入ったり入らなかったり・・・どうなるのでしょうか？（ライ）。
もしかしたら、ライバル・・・になったら楽しそうですね。誰のかは
いいません。

では、次項で！！

16話：ライバル誕生

「それで？」

サノの問いかけにコノハは首をかしげた。
何を聞きたいのか分からないからだ。

「は？」

「だーからー、師弟関係になったのはいつなんだよ！話が逸れて聞けなかったんだ。」

そういいながら、偉そうにサノは腕を組んだ。内心もかなり偉そうである。

（私はちゃんと話の内容を覚える女！！でも……テスト様は嫌いよ！）

「ああ、うん。あのね、師弟関係が始まったのは【大蛇の滅亡】後なんだ。」

「……ああ！戦いで多くの戦友をというか、戦力を失ったからちよつくら戦力でも増やすか？とか思ったわけだな。」

「その言い方はなんかヤダ。」

そういいながらコノハは頬を膨らませた。

（コノハはこういう顔をしたときは、年齢相当に見えるけど……さっきの赤髪のやつ……えーと赤朔！のときは大人びいていたな。）

対するサノはそんなことを思い、このことを言うとコノハが喜んで幼い表情が見られなくなりそうだったのでやめる。

コノハはサノの考えに気づくこともなく、訂正をした。

「亡くなった人たちのような戦力を持つ人がそこら辺にいたらいいんだけど、そういう有能な人はやっぱりすぐに見つけられないんだ。だから戦力じゃないよ!!一緒に戦ってくれる人を育てることにしたんだ。」

「んで、師弟関係が始まったと?」

「そういうこと。」

「ふん……お!!」

頷きながら立ち上がったサノは窓に寄り外を見た。そして発見。

「何?何か見つけたの?」

「いや、別に……。アイツ入れたんだなって思ったただけだ。」

「アイツ……赤朔のこと??」

「うん?ああ、そうそう。赤朔のこと」

そういつつサノが赤朔のほうを眺めているとコノハの表情がだんだんと険しくなってきた。

そのコノハに気づくことなくサノは天羽に連れられて行く赤朔を観察する。

(サノは……もしかして赤朔のほうが好み?)

などとコノハが思っていることはサノは知らない。

もし分かっていたらいろんな意味で突っ込んでいただろう。

(アイツの腰から下げている刀かっこいい!!)

などと内心はしゃいでいるサノにコノハのほうも気づくことがなかった。

もし気づいていたのなら自分の刀を見せて説明していただろう。いわくつきの自分の刀のことを。

気づくことのない2人はふと顔を見合わせて今気づいたように言った。

「「とりばあー(様)は?」」

「あ……アイツだ。」

改めて村に入ってきた赤朔は早くもサノを見つけていた。

「なんだ?あいつ等もしかしてまだあそこにいたのか??既に夜中だというのに。」

不思議そうな顔をした赤朔を面白そうに見る一人の人物。否、変聖物……天羽である。

「おぬし……サノを好いたな?」

ずばりという天羽に赤朔は慌てた。

当たっていたというわけではない。まさか自分が男を好きになるなどとそんなことはありえないと思ったからだ。

「ば、バカ言うなよ!!なんで俺があんな奴を好くんだ!?!しか

も相手はお・と・こだぞ!!! たく。」

慌てて言い返す赤朔。

それをにまにまと見る天羽。

「そのお・と・こを好きになってしまったというわけですか？ ほかおつほかおつほか」

「コノヤロー!!!」

何故かサノ好きになってしまったという前提で話を開始しようと目を光らせる天羽。

それに赤朔は顔を赤らめ天羽に向かって刀を抜いた。そして斬る。否、斬ったつもりだったが天羽が取りに変わったため虚しく空を斬った。

「な!!! お前!!! 変聖物だったのか!?!」

「そうじゃそうじゃ。敬えよお。」

「お前みたいな奴が変聖物なんてふざけてやがる!!! ちよ、降りて来い!!!」

赤朔が言うように変聖物は人に崇められる生物であり、またその性格は神の使いを思わせるほど礼儀が正しいと有名であった。

その性格に合わない天羽にたいして赤朔は驚きながらも絶対に認めない!と意地をはる。

ついでに天羽はさらりと赤朔の刀を避け空へと鳥に変わり舞った。その姿はなんと見事である……。ところが天羽でなかったら赤朔は見惚れていただろう。

「降りてこいと……。なんと無謀な!!! わっちが降りてしまったらそなたに斬られるであろう!!!」

(コイツも天羽に遊ばれたんだな・・・礼儀はアレだったが、
同士か。仕方がない仲良くなるう。うん、友達が増えるしな!!)

「まあいいけどさ。んで急がねえでいいわけ？」

「急ぐも何も、今この村にとりばあー様はいらっしやらないんだ
と。」

「え？」

赤朔の言葉に驚いたのはサノではなくコノ八だった。

「じゃあなんでここに？」

「・・・コノ八。さすがにその言葉はひどいぞ？」

「え？どこが??」

「(どうしたんだコノ八?なんかさつきと赤朔を見る目が変わっ
てんぞ!あ、あれか!!嫉妬ってやつか!)・・・なわけないか。」

「ふおおおお。佐乃助殿、百面相は人の見られないところだ
るものぞえ?」

「お前、人によって言葉の使い方が違ってんぞ。」

「わざとです。」

コノ八と天羽のせいで話がそれそうになっている横でコノ八と赤朔
がなぜか互いに睨み合っていた。

「おやおやコノちゃんは、嫉妬ですか？」

「し、嫉妬なんかするか!」

「あつそ。だったらえ〜つと・・・」

「うん?あ、俺は佐乃助っていうんだ。よろしくな!」

「あ、はい。つて、えええ!!男なのかやっぱり!!」

「お、お前まで・・・」

「赤朔殿違いますぞ!!」

「違うのか？」

「はい。実は……どちらでもないのです。」

「おおおおおおおい！！天羽？」

「え、どつちでもないって……え？え？」

「つちよ！コノハも混乱すんなって！」

「……コントはいいって。んじゃサノ……さん。明日この村案内してもらえないすか？」

微妙な敬語を使われながら赤朔は朗らかに……少し照れながら尋ねた。

そんな赤朔をサノは見つめる。

(……この世界の住人はイケメンかつ、笑顔が素敵の方が多いわぁ〜ふふふ。惚れるなよ私！！)

などと考えていることはコノハには秘密でにしなければと何故か考えしまったサノがいた。

「案内ってほど、この村のことは知らねえけど。いいぜ！どうせとればあー明日も帰ってこないんだろ？天羽？」

「そうですねえ。きつと帰ってこないでしょう。」

「なら、そういうことで。」

「つて、ええー！サノなんで？」

「え！？なんでと聞かれても……」

「なんだ。やっぱり嫉妬してんじゃん。ま、コノちゃんは来ねえだろ？」

「行くよ！！なんで行かないことになってるんだよ！」

赤朔に遊ばれているコノハを見てサノは驚いた。

(ほつつんとくに、さっきまでのコノハと全然態度が違うよ？なんか2人して子供の喧嘩っぽいことしているし。ってか優しいコノハはどこいった?!)

「コノハの性格が変わった？いや、違うな。」

「ここで引いてしまつては男が廃るというものですよ?。」

サノの独り言に天羽が参加。

「つておい！また人の独り言に参加するな！これじゃあ会話になつちやうだろ!!」

「またではありやせん。あの時は心の中を覗いたんでさあ。それに独り言よりも会話のほうが明るかるうに!。」

「待て待て。聞き逃してはいけないことを聞いたような気がしたんだが。・・・時と場合によるだろ」

「ふおおおお。モテますなあ」

「モテ?重いものはあまり持てないぞ?」

「そんなアホな回答いりませんぞよ」

「お前にアホ言われたくないわ!アホウ!」

「天羽をアホウという佐乃助殿。もう少し頭を捻られてはいいかか?」

「う、うるさい!!」

天羽に遊ばれているサノを見る2人。

しかし2人が考えていることはまったく違うことで・・・。

(サノ・・・また遊ばれている。そんなことよりも、なんで赤朔となんかと・・・。やつぱり好みなのかなあ?)

(あの人も仲間だったんだな。ってことは俺と似てんの?いや、違う!きつと宇津木さんに似てるんだ!)

などと2人の頭の中はお花が咲いていた。

「と、とところでとりばあーは何処いったんだ？」

「ふむ。それは……」

16話：ライバル誕生（後書き）

更新成功。

妄想はさらに膨れ上がります。
パパーン　Lvが1上がった。

楽しんでいただけていると嬉しいです。

17話：待ってる人（前書き）

樹の義弟・・・亜樹のお話です。
〈始業式編〉

17話：待つてる人

始業式かねての対面式。

そんな面倒なことやらなくていいと僕は思った。

しかも、あの人のためにレベルを下げて入ったというのに当人のあの人は見当たらない。

あの人こと本城 樹。

僕の義姉に当たる人。

僕は義姉なんて認めたことはなかったけど、樹は「姉を敬いなさい！」とか言っただ姉であることを強調する。

でも、僕は認めるわけにはいかないんだ。

まあ、自分勝手な理由だけど……。

「はあー。めんどくさい。」

「おいおい。入学試験トップで入ったやつが言う言葉か？それ以前に目立っというるというのにな。」

僕がため息をついてボソッといった言葉に反応したのは隣に座る幼馴染九条くじょう 雅人まこと小学校から高校まで一緒という、いわゆる腐れ縁である。

確かに僕は入学試験でトップをとった。

でもそれは樹に褒めてほしくて……というより樹と会話ができるんじゃないかという希望を抱いたからだ。

「入試は……一応頑張ったから。でもそれ以前に目立つ理由がわからない。あ、もしかして樹の義弟だからとか？」

「理由って……まあ義弟もそうだろうけど、容貌がなあゝ容貌が問題なんだよ。」

「何？醜いってこと？」

「み、醜い？んなこと大声で言ってみろ！！俺が周りに引つ張りたたかれる。」

「それは〜見てみたいかも。」

「このDSがあー！！そんなんだから……おっとと。」

「そんなんだからなんだよ？」

「いやいやいや。ほらちゃんと儀式に参加しようぜ？」

「話を誤魔化すな。だいたいその儀式をサボろうとしたのは誰だっけ？」

「さあ〜なあ〜。」

「つたく。」

樹と話がしたかった。

会話がしたかった。

声が聞きたかった。

中学のあの喧嘩から一度も口を聞かなくなった。

それはとても苦しいことで……。

だから高校を同じところに入ればきつとまた声が聞けるっと思っただ。

まあ甘い考えだったみたいだけど。

「これで始業式を終わります。生徒は速やかに教室にもどりなさい。」

化粧が濃い先生がマイクに向かって言う。

その言葉に従うように生徒たちは各々立ち上がり出口へと向かった。

その際に僕はちらちらといろんなところから視線を受けながら気まずいというかもどかしい思いが募っていく。

別に視線のせいではないことは承知である。理由ははっきりして

いる。

それは……。

「やつほぐ？あきちゃん 樹がいなくて寂しいでしょう？」

そう樹がないからって……。

「……ゆ、由衣先輩！！変なこと言わないで下さいよ。」
「事実だも〜ん。」

多くの生徒が体育館から消える中、僕と由衣先輩と由衣先輩の友達らしき人と何故か雅人が残っていた。

だから良かったものの、他の人が聞いていたらまた樹との「コミュニケーション」が取れなくなる。

というより、完璧に無視されそうで怖かった。

「事実って……。」

「事実だろう？」

「事実よね？」

「この子があの、男女さんの弟。」

うん？なんか聞こえた。

男女？誰のこと？まさか樹のことじゃないよね？

などと思う僕はじつと由衣先輩を見た。

「うわぁ……。鈴乃ちゃん！！それ言っちゃダメ！！」

「あらどうして？」

「由衣先輩、この人怖いもの知らずですね。」

僕の視線を受けて由衣先輩は顔を蒼くしながら鈴乃と呼んだ少女

進ちゃん来ちゃって……。」

僕のどすの利いた声に由衣先輩は怯えながら答えた。

由衣先輩が怯えているのはどうでもいい。いつものことだから、でも『進ちゃん』って誰だ？

「進ちゃん？」

「そう、私たちの担任なの。それで樹、進ちゃん苦手というより嫌いで……そのまま逃げちゃったの。」

「逃げたって……。ケータイは??」

「それがね、始まる前に電話とかメールとかしたんだけど全然でくれなくて。いつもならすぐにでくれるんだよ?でも……最終的には『圏外か電波の届かないところにいる』ってなって。」

どうしよう……っと見つめてくる由衣先輩。

たいていの男ならこの可愛さにノックアウトを食らうんだろう。

でも僕はそんなことよりも樹が行方不明になったかもしれないことに焦りを感じていた。

「家に電話かけてみるよ。」

ポツリと呟いた僕の言葉に由衣先輩は頷いた。

鈴乃さんは眉を顰^{ひそ}め困った顔をしていた。

雅人は……話についていけなかったらしくぽかんと口を開けていた。

それから僕らはそれぞれの教室へと戻った。

つといても、雅人と僕の教室は一緒なのだけだ。

「なあ? 樹ちゃん本当に行方不明なわけ？」

「雅人は樹のことを樹ちゃんと呼ぶ数少ない人。なんせ小さい頃僕と混ざって樹に遊んでもらっていたからである。雅人は樹がいるからこの高校に入ったんじゃないかと僕は疑っていた。」

つまり、嫉妬のようなものである。

「まだ行方不明って決まったわけじゃないよ。母さんに聞いてみらないと……。」

「だ、だよな!!よかったあゝ(何のためにこの高校に入ったか意味なくなるしな!!)」

「なんか言った??」

「いや、別に??」

やっぱり雅人は怪しい。

つとそんなことよりも母さんに電話して樹が家に帰ってないか聞いてみらないと!!

僕はそう思いポケットに入れていたケータイを取り出す。

「おいおいおい。せめてHR終わってからにしろよ。センコウ来るぜ?」

「……そうだね。」

雅人の言っていることはもつともだったのでケータイを再びポケットに直す。

というのも、この高校はケータイ所持禁止と禁止事項に書いてあるくらい規則が厳しく見つければ没収だ。

それは流石に嫌なのでしぶしぶ直した。

それにしてもなんで樹はこの高校を選んだのだろうか?

記憶にあるのは数あるパンフを積み重ね真中から取り『よし、ここにしよう!』って言って決めたことは覚えていた。

あまりの適当さに驚きせめて見学には行くのかと思っただら行きもせずに『入試に向けて頑張るぞ』』といひ勉強を始め、何処に行くのかとパンフをみれば一ランク下の高校だった。

それに関して流石の僕も怒った。

怒った僕を驚いて見ていた樹、でも最終的には『ありがとうね？』
といひ僕の頭を撫でた。

きつと『優しい弟を持った』とかんか思っただらう。

僕は優しくなれない。決して。

「では、これでHRを終わりにする。明日から創立記念日と学校会議とまあその他もろもろで1週間は休みになるがな。休みボケは許さんぞ！？ありがたく思え休み明けには大量のテストをするからなー！」

「いや、意味わかんねーよ。普通テストじゃなくて宿題じゃね？」

「はい、そこー！文句があるなら学校長に言いなあ！？」

「教師がこれで良いのかよ。」

「では、帰れ！残るなよ、チビどもー！」

熱烈教師（身長180cm体重??kg）のマッチョが生徒を解散させた。

教師が教室から出たのと同時に僕はケータイを開き、家の番号を履歴から探し掛ける。

「行動が早いな。おい。」

「お前こそ、教師に楯突くな。」

「楯突いてねーだろ？あれはみんなの心の内を代弁してやったんだ。しかも学校長が休み明けにテストをすることを決めたなんてありえなくね？」

「……………」

「既に聞いてねーし。はあくまさちゃん、寂しい。」

雅人が何かブツブツと言っているのを無視し母さんが電話に出るのを僕は待つ。

待っている間に数人の女子生徒たちが『休み暇?』とか聞いてきたようだけど、すべて雅人に相手をさせた。

こういうときの雅人は役に立つ。

【は〜い。もしもし?】

「あ、母さん?」

【あら??珍しい亜樹ちゃんじゃないの??どうしたの?】

「……………樹家に帰ってきてる??」

【いつきちゃん?帰ってきてないわよ?あらあらもしかして……………】

「も、もしかして何??」

【心配しなくて大丈夫よ!数カ月したら戻ってくるから!ね?】

「つちよ、何で数カ月??しかもなんで知ってるの??」

【ヒ・ミ・ツ】

「母さん!!」

【まあ、亜樹ちゃんは気をつけて帰ってきてねえ〜?それじゃあお昼ご飯の準備をしますか。】

「あ、待つてば!!【ツーツーツー】」

母さんは自分で何かを納得し、勝手に切ってきた。

僕には何が何だか分からず、雅人を見る。

対する雅人は今はハーレム状態で顔がにやけていたのだが『別に九条の暇を聞きたいんじゃない!』と一喝され落ち込んだ。

そんな雅人に慰めの声なんか掛けるわけがなく眺めて頭の中を整

理する。

「あ、良かったあゝまだいて！お母さん何て？？樹帰ってたって
??？」

「ううん。帰ってはないけど、数カ月後に帰ってくるって。」

「どういうこと??？」

「さあ・・・僕が知りたい。」

由衣先輩が教室に顔を出し、樹の安否を聞いてきた。

でも、僕には安否すら答えることができずただ母さんが言っていた言葉を由衣先輩にそのまま教えた。

すると、由衣先輩は困った顔から何かを思い出したような顔になった。

「もしかして・・・いやいやいや。あれはないでしょう。だって小父さんは・・・。」

「何？何か知ってるの??？」

「あ、ううん。はつきりとしたことじゃないから・・・今度教えるね！そのときは明確にわかるはずだから。」

「よくわかんないけど、樹は無事なの？」

「・・・たぶんね？」

「たぶんって!？」

「でも樹なら大丈夫よ！」

「・・・後でちゃんと教えてよ!？」

「うん！任せて!!そのためにも、小母さんに会わなくちゃだけ
ど。」

由衣先輩は『帰ろう帰ろう!』と言って、僕の家へと何故か雅人まで一緒に帰った。

家に帰った僕は母さんにとんでもない話を聞くことになるのは僕は予測していなかった。

ただ、樹が無事であることを祈り、横にいる雅人に『お前は自分の家に帰れ!』と言っただけだった。

もちろん、雅人は帰らなかったけど……。

17話：待ってる人（後書き）

ちよつと、異世界からもとの世界へと戻りました。
懐かしい人々に会えます。（たぶん）

18話・想いはそれぞれに(前書き)

メインはコノハです。

18話：想いはそれぞれに

「疲れた……。」

サノはそう言って座敷の上に寝転がった。

その際に結いだ髪が解けバラバラに広がった。

「だいたいコノハと赤朔の仲の悪さが一段と酷くなっているのは何故なんだ？」

サノは気づかない。

自分がその中心にいることに。

「なんか赤朔は……アイツ、雅人に似ているなって思っちゃった。あの照れ方というかなんというか。最初の礼儀知らずなどこなんかそっくりだ！」

義弟の亜樹といつも一緒にいる雅人。

初めて会ったのは確か、亜樹があの家に来てから3日経った後で……。

あまりの速さに驚いたのだ。

「まさか家に来て3日目で友達連れてくるとは思わなかったよ。いや、実際は勝手に上がり込んできたが正しいかな？」

家に『おじやまします』と勝手に上がりこんだ雅人に亜樹は慌てていたっけ。

なんて思い出しながらサノは額に手を置いた。

ここではない日本。

そのことを思い出すと止まらない。
まだ1週間も経っていないというのに……。

「あ。そういえば来週は収穫祭があるっていつだったっけ？もしかしてとりばあーはその準備をしに出かけたのかな？」

今日の昼頃、赤朔に村を案内していたときのことである。

といってもサノ自身も村の中をよく知るわけでもないため、いやいや天羽に案内を頼んだのだ。

天羽は皆の先頭を飛んでおり、時折サノの肩にとまって村のいたるところを説明していた。

もちろんサノの横にはコノ八がいて、赤朔はコノ八とは逆の方に並んで案内を受けていた。

コノ八の方は受けているというより、見張っているという状態だったが。

とりばあーの社について村を一周し終わったとき天羽が言っていたのだ。

『そういえば、小葉殿は来週の収穫祭の際に何やらしてくださるようで……。』

『え、あ、うん。』

『え？何？？コノ八が何かするのか？？つか来週収穫祭だったのか……。』

『佐乃助殿、常識ですぞ！！』

『この村での！だろ。んで何をするんだ？』

『当日のお楽しみってことで。』

『お楽しみって。』

『ああ、なるほど。コノちゃんはご自慢のアレをするのか。』

『あ、アレ？アレってなんだよ！？』

『だからお楽しみだって！』

『そうですね！なんでもかんでも知りたがってはなりません！』

『……天羽、お前！！』

『暴力は反対ですじゃあ〜〜』

『とか言つて、飛んで逃げんな！！』

なんて他愛のないやり取りだったけど、その収穫祭にきつとりばあーは何かをするのだろうとサノは感じていた。

サノは思う。

何故なのだろうと。

こちらに来てから、いろんな感覚が研ぎ澄まされているような気がするのだ。

第6感というものののだろうかと思つたが、まさかと思ひその考えを頭の隅に追いやつた。

「それにしても、なんで亜樹や雅人のことを思い出したんだけ？あ。赤朔が雅人に似ているからかあ。じゃあコノハは亜樹に似ているのかな？」

サノはそう言い亜樹とコノハを思い浮かべてみたが、何一つ似ているところが見当たらなかった。

「……似てないか。あゝあ、だいたい比べる方が可笑しいかな？」

そう言つて笑おうとするが上手く笑えない。

この場に人がいなくて本当に良かったとサノは思った。

ホームシックになり家族のこと友達のことを思い出すと涙がでてきても可笑しくないのかもしれない。

でもつとサノは思う。

「私は・・・俺は、泣いたことがない。涙がでないんだよね・・・
なんでだろう?」

子供のことから泣いたことがないサノ・・・樹は家族以外の人々から恐れられた。

精神的に不安定なのではっと言われたり、心の何かが欠落しているのよっと言われたりした。

でも父や母は『大丈夫。樹は何も悪いところはないし、普通の人以上に優しい子よ。』っと言ってくれた。

そうそれはまだ実の父親が生きていた頃の話。

母が再婚して新しい父が来ると同時に亜樹がきたときには、そんな噂は立たなくなっていた。

「というより、忘れられたって言った方がいいのかな?っつて、
なんでこんな辛気臭いこと思い出してんだろ。こんなところ誰にも
見せらんないなあ」

そういつてサノはおもむろに立ち上がった。
立ち上がったと同時に背伸びをする。

「よし!! 気合入れるぞー!!」

「何に?」

「・・・!!!!!!」

サノは驚いた。

自分の独り言に人がまた介入してきたからだ。

声のした方を振り向くと、コノハが不思議そうにサノを眺めていた。

「コノハ・・・どうかしたのか?」

「別に、どうもしてないけど。それよりもサノは何に気合を入れるの??」

「えつと・・・記憶を取り戻すことに。」

「ふうくん。サノは嘘が下手だね。」

「んな!!」

「でも、うん。詮索はしないよ!だから、傍にいてね?」

ニコリと笑顔で言うコノハにサノは何ともいえないような感情を抱いた。

(コノハのこの言葉の意味はどういう意味だろう?傍にいるって・・・無理でしょう。だってコノハは護子だもん。)

「ずっと傍にいることは出来ないと思うけど?」

「大丈夫!」

「いや、だから何に對しての大丈夫なわけ?つか根拠は何?」

「さあ?でもそんな気がするんだ。なんでだろう?」

「いや、聞かれても・・・。」

そんな他愛もない会話がずっと続くとは限らないとサノは思った。そもそも本当の意味で生きる世界が違うと思ったからだ。

(例えコノハが傍にいて欲しいと願っても、私には向こうに家族がいる、友達がいる。それをいつか教えなくちゃいけないのか?それをいう暇があるのかな?あるといいなあ)

(絶対離れる気はないから!!)

それぞれの思いが夕焼けの色に空と共に染まっていく。

明日、明後日、明々後日で収穫祭の日へと変わっていく何気ない時を過ぎるかのように。

コノハは気づいた。

サノが何かを隠していることに。

どうやって気づいたのかは自分自身でもわからない。

でも、何かを隠していると自分の内の何かがそう感じていた。

今日の昼頃、サノは天羽を連れて僕と赤朔のところに来てきた。

記憶喪失であるサノは『天羽に村の案内を頼むことにしたんだ。

そっちのほうに正確だろ?』と言って。

サノが記憶喪失なことに赤朔は驚いていたけれど、でもすぐに何かを理解したかのようにすぐに受け入れた。

僕はそれを見て複雑な思いがした。

天羽が先頭になって飛び、時折サノの肩にとまってはそこの場所の説明をする。

僕とサノが出会った場所も紹介された。

その場所は【時の狭間】と言うらしい。

【時の狭間】にはあの有名な旅人が育った場所と言われている。

でも実際にはそれが真実であるかどうかなどということは誰も知らなかった。

ただ、旅人が突然その場所に現れ、この村を訪れたということしか真実として伝えられていた。

そんな場所で僕はサノと出会った。

初めて会った時は男であるか、女であるか分かったなかつたけど、この短時間サノといることでサノの秘密が1つ分かった気がした。

そうサノは女性であるようだった。

何故、男の格好をしているか分からなかったけど、今はどう見ても女性にしか見えなかった。

赤朔もこの案内してもらった時間でサノが女性であることに気づいたようだ。

きつと僕と同じときに違和感を感じ気づいたのだろう。

僕らがサノが女性であることに気づいたのは、【時の狭間】からの帰り道のことだった。

「それにしても、あの風景はすごく綺麗だな。」

「そうであるうそうであるう。」

サノの感想に天羽はすかさず答えた。

僕はもちろんのこと赤朔でさえも頷いていた。

「あそこに有名な旅人が訪れたと言われているだな。」

「有名な旅人ってあの？」

赤朔がどこか嬉しそうに言うのにサノが尋ねた。

「ああ、そうですね。ってサノさんは旅人に関しては知っているんですか？」

「え？あゝ記憶は戻っていないんだけどさ、とりばあーにそこら辺は聞いたんだ。」

「そうですね。あの旅人のようになりたいと多くの護子や護師までもが言っています。」

「それほどすごい人だったんだな。」

「それはそうですね。って話聞いたんでしょう？？」

「いや、コノハからもいろいろと聞いたんだけど、『いまいち』陰とかわかんなくて。」

「え？サノあの時存在仮定は分かったって言ってなかったっけ？」
「それじゃなくて、『陰』を俺は見たことがないんだよ。」
「……………は？」

サノの言葉に僕も赤朔も言葉を失った。

あの『陰』を見たことがないなんて信じられなかったからだ。

「一度もないの？」

「き、記憶があつたら一度は見たことがあつたんだろうけど。記憶無くなつてからはずっとこの村にいたから見たことなくてさ。な？天羽」

「そうですねあゝ。佐乃助殿は引きこもりでしたからな。」

「おい！！引きこもりって何だ！？」

「引きこもりも知らないとは……………お可愛そうに。」

「いや、待て待て。引きこもりの意味なら分かる！！」

「では何を知りたく??」

「知りたいんじゃないかって……………って！ツヒ！！」

サノが天羽に何かを言い返そうとしたときのことだった。

サノが固まったのだ。

僕と赤朔は驚いてサノに駆け寄った。

「大丈夫？どうかしたの??」

僕は慌てて声を掛けるけど、サノは反応しなかった。

ただ一転を見て固まったままだった。

赤朔はその一転を見ようとしていたけど、天羽がその一転に何かをしたらしくて見られなかったらしい。

サノはその一転の何かがなくなつたのを見ると安心したようにツホっとため息をついた。

「あ、ごめん。大丈夫だから・・・ちょっと苦手なモノがあつて。」

「そう・・・。」

そこで僕と赤朔は気づいたんだ。

サノは安心しきっていたからだと思う。

自分が普段使っている声音と今の声音が番うことに気づいていなかった。

明らかに今の声音の方が優しい響きを持ち女性ならではの笑顔を見せていた。

それを見て流石に、男であるっといつても誰も信じようとは思わないだろう。

でも僕も赤朔も何も言わないことにした。つまり気づいていないことにしたのだ。

「(まさか女だったとは。いや、違うな。やっぱり女だったとはだ！！っていうことは・・・。) 安心した。」

赤朔が何かをぶつぶつと呟いていたことに対してはすごく不安が過ぎ^よったけど、あえて何も言わないことにした。

もし僕が考えているようなことだったのなら僕の方が先に取れば良いっと思っただからだ。

もちろん僕と赤朔の想いにはサノが気づくわけもなかった。

村を一周し終わり案内も終わると天羽は『来週の準備をしなくては！！』といいどこかへ飛び去っていった。

僕も何か手伝った方がいいのかなっと思っただけど、何も分からないう奴が手伝うと余計時間が掛かると思い諦めた。

赤朔はサノに『俺、ちょっと休憩してきます。』と言わなくてい

いのにわざわざ言い、宿屋のほうへと戻った。

そう、この村にはなんと宿屋がちゃんと存在していたのだ。

これには僕も驚いた。ってことは天羽やとりばあー様には内緒にしておくことにする。

サノのほうは『俺もちょっと休むよ。歩き疲れた。』と言って家の方へと戻っていった。

僕も休もうかと思いつ宿へと戻ったのは良いけど、結局刀の手入れをして目が覚めてしまった。

「……暇だよ。こんなに暇なの初めてかも。ちょっとサノのところに行こうかな？起きてると良いんだけど。」

本当は暇だからサノのところに行くのではない。

聞きたいことがあったのだ。

『サノは本当は女の人？』と。

でもサノはきつと『お前の目は節穴か？』と言ってはぐらかすのだろう。

それでも……と僕はサノのいる家へと向かった。

サノの家に着くと窓が開いていた。

そこからサノを見ることが出来、サノが起きていることが分かった。

結んでいた髪を解いたらしい。解いた髪がバラバラと畳みの上に散らばっていた。

それはどこか幻想的で僕は少しの間見惚れていた。

それを見ただけで分かった。

サノはやっぱり女の人なのだ。

安心をってしまった。

「僕は男の人じゃなくて女の人を・・・サノを好いたんだ」

と声に出して言ってしまっていた。

周りに誰もいなくて良かったのだが、改めて認めて僕はきつと赤くなつたであろう顔を冷ますように首を振った。

頭の中にある想いを消すかのように。

「よし！気合入れるぞー！」

僕が自分の想いの強さに自身で驚愕キョウガクしているとサノの掛け声らしき声が聞こえてきた。

何に気合を入れるのだろうか？

自分の知っていること？それともサノしか分からないこと？サノが秘密にしていること？

それは嫌だつと僕は自分勝手ながらに思った。

サノの全てを知りたいと強く思ったのはこのときからかもしれない。

だから僕はサノの独り言に無理やり介入した。

それは僕が【ここにいる】という証であるかのように。

「何に？」

「・・・・・・・・！！！！」

サノはすごく驚いた顔を僕に見せた。

その顔を見ながら僕は戸を開け中に入る。

「コノハ・・・・・・・・どうかしたのか？」

サノは僕がここにいることに驚いているらしい。

だから僕はサノに会いに来たという言葉をわざと使わずに素っ気無く言った。

「別に、どうもしてないけど。それよりもサノは何に気合を入れるの??」

「えっと・・・記憶を取り戻すことに。」

僕の問いに少し戸惑いながらサノは答えた。

僕にはすぐに分かる。それが嘘であることを。

だから僕は意地悪するように言う。

「ふうくん。サノは嘘が下手だね。」

「んなー!!」

「でも、うん。詮索はしないよ!だから、傍にいてね?」

ニコリと笑顔で僕は言った。僕の今ある有りのままの感情を。

サノはそれを聞いて無表情になった。

どっという意味か考えているのだろうか僕にはわからない。

「ずっと傍にいることは出来ないと思うけど?」

「大丈夫!」

サノの答えに僕はすかさず言う。それも自信満々に。

「いや、だから何に対しての大丈夫なわけ?ってか根拠は何??」

「さあ?でもそんな気がするんだ。なんでだろう?」

「いや、聞かれても・・・。」

僕の言葉にサノは戸惑っていた。

何かを根拠に言うわけでもない僕の答え。

きっとサノは『護子だからずっと一緒にいるわけじゃないし』なんて考えているのだろうか？

確かに僕は護子だ。

だからといって僕はサノと離れ離れになるつもりは一切なかった。

(例えコノハが傍にいて欲しいと願っても、私には向こうに家族がいる、友達がいる。それをいつか教えなくちゃいけないのか？それをいう暇があるのかな？あるといいなあ)

サノが今何を考え思っているかなんて僕にはわからない。
でも……。

(絶対離れる気はないから！！)

そう強く思う僕がいることをいつかサノに伝えたい。
外を見ると空は夕焼け色で、それはまるで僕らをもその色に染めるかのような美しさだった。

もうすぐしたら収穫祭が始まる。

そのときに笛で僕の想いを伝えられたら良いのにと僕は思わずにはいられなかった。

18話：想いはそれぞれに（後書き）

あれ〜???恋愛がメインに。

コノハ主体です。もう、サノにバンバン想いを募らせております。

本編になかなか進みません。

脱線するなよ、私!!

19話：狂った戦慄

広大な草原が広がる場所に一人の少女が佇んでいました。

その少女の髪は見事なほどの金髪で、腰まであるその髪は風にサラサラとなびかせています。

まっすぐ前を見つめるその瞳は澄んだ空の色をしていました。

少女は両手を前へと出し、そして何かを包み込むように両手を胸のほうへと閉じていきます。

『わたしの愛しい人。』

どうかわたしを見つけてください。

その場所にわたしはいません。

その者はわたしではありません。

その者は卑しき人の子です。

わたしの愛しい人。

わたしだけを愛してください。

その者を愛することを禁じます。

その者と共にいることを禁じます。

わたしの愛する人よ。

コノハ。』

少女は愛おしそうに、その名を呼びました。
その声はまるで歌を歌うかのようでした。

少女の瞳はただまっすぐ前を見つめています。
何を見ているのか、何が見えているのか、誰にも分かりません。
しかし【その者】と言葉を発するとき、少女の瞳には憎悪の色が
漂います。

少年はまだ知りません。
少女の存在を。

その者はまだ知りません。
少女が何をしてくるのか。

ただ知るモノは鳥でした。

一羽の輝く鳥でした。

その鳥を人は鳳凰と呼びます。

ふと少女は空を見上げました。

雲ひとつない快晴を。

少女は決心します。

『その者にあなたを渡しません。わたしはこの場所から動きます。

あなたと共にいるために。』

少女はそういうと黒い生き物のようなモノを引き連れて草原を歩き始めました。

それはとても異様な光景でした。

一羽の鳥はそれを見つめます。

まるで何一つ少女がすることを見逃すまいというように。

強い強い風がふきました。

少女はその風と共に消えてしまいました。

少女と共にいた黒い生き物も……。

一羽の輝く鳥はまるでため息を付くかのように肩をおろし、青空へと飛び立ちました。

自分のあるべき場所へと飛び立っていったのです。

広大な草原には誰一人としていなくなっていました。
少女も黒い生き物もあの輝く鳥すらいません。

その場所から遙か彼方の場所で、一人の女性……いえ男性
が目を見ました。
黒く長い髪を持つ黒い瞳のヒトでした。

19話：狂った戦慄（後書き）

新たな人物の登場です。

危ないヒトのような気がしますね。

コノハがピンチですね。

『見つけてください』といいながら自分からその場所を動きまわったね（笑）

サノ（樹）はいつたいどうするのでしょうか……。

今回は【収穫祭】です。

20話…二つの花と二つの葉

ドーンドーンドーン

村の中央で太鼓を鳴らす音が聞こえてきた。
今日は収穫祭である。

ドーンドーンドーン

一定の音を保ちながら太鼓の音はサノの頭を活性化させるには持つて来いの音量であった。

「目が覚めたよ……まったく。収穫祭ってこんなに派手なものなわけ？つてか運動会か何かかと思ったよ……はは。」

服を着替え外に出ると昨日までなかった屋台や太鼓や舞台が存在していた。

「いやいやいや。なんでやねん!!」

（昨日までなにもなかったよね？実はドラエモの道具のおかげなのです！とか？んでもってスモールライでものを小さくし……）

サノは頭の中で近未来ってすごいよねえ〜などと考えながら混乱していた。

そう混乱していたのだ。

「おはようサノ!!……サノ??」

声が聞こえた。

まだ幼く声変わりをしていないソプラノの声。

しかしサノはその声を右耳から左耳へと流れていた。

つまり聞こえていないということ。

人はすごい・・・混乱していると何も聞こえなくなるという理論が説明された。

「サノ!!!」

そうサノの名を呼ぶ声の主はサノの服の袖を引っ張った。

「うえ?!・・・っは!コノハ、おはよう。」

袖を引っ張った力が強かったらしくサノは横に倒れそうになった。そして倒れそうになりながらも踏みとどまり、自分のワンダーな世界から異世界に戻ってきた。

「おはよう。じゃないよ!!人がせつかく一番最初に会いに来たのに!無視するんだもん!!」

「ええっと、ありがとう?」

「別に御礼を言っただけじゃないんだけど・・・。」

「じゃあ・・・。」

「じゃあって何さ!!他に言うことあるでしょっ?」

「ええっと。」

(何があるだろうか?)

サノは首を傾げながら考える。

が、首をかしげたところで答えが出てくるわけでもない。

（あるといえ、コノハが妙にハイテンションであるということとか？いやいやいや、それを聞けばまた怒られるだろうなあ〜）

サノはコノハ自身に答えがあるだろうと思うことにし、コノハをしばしば観察。

コノハはあまりにもサノが長いこと考えるため待つことを諦めて口を開こうとした。

「…………コノハの今日の服？衣装？？すごく似合ってるね。」

「…………ありがとう。」

（違ったらしい。）

コノハを観察して分かった事といえば、普段は着なさそうな服を着ているということ。

しかもその衣装がすごくコノハに似合っているということ。

それしかサノの観察眼では見つけることができなかった。

沈黙。

（今、私とコノハの間には微妙な間が開いている……。理由はわかってる！！分かっているのよ！？でも、これどうしたらいいんだろう？）

ああ、どうしたものか。とサノが目線をコノハから明後日の方に向けるとその方向から掛けて来る人の姿が見えた。

「あ。赤朔だ……。」
「！！！！」

サノの何気なく呟いた言葉にコノハはピクンと身体を震えさせた。そんなコノハに気づくことなくサノは赤朔が来ている衣服に目をこしらえた。

「おはようございます！サノさん！！！」
「あ、うん。おはよ……。何その格好。」
「変すか？？」

サノの言葉に赤朔は自分の着ている衣装を見ながら眉をひそめた。
「ううん。全然。すごく似合ってる……。コノハもかわ……。じやなくて衣装着ていたからなんでだろうって思っただけだ。」

(危ない。今、可愛らしい衣装っていうことろだった！！)

そう思いコノハをチラ見するが気づいていないようでサノはツホ
つとため息をつく。
もし気づいていたら全力で睨まれるだろう。

「ああ、それは『お楽しみ』のために着ているんです。」
「『お楽しみ』……。ああ！！アレか！！って赤朔もするの？」

「はい。何故があの鳥……。もとい天羽さんがいろいろと持ってきたんですよ。(あのヤロー！！つかなんで知ってたんだよ！あのこと！！！！)」

「？そうなのか。じゃあ楽しみが増えたな。」
「はい！出来れば見て欲しくないんですけど楽しみにしといてくだ

さい。」

「そうじゃそうじゃ。祭りは楽しまんとなあ。」

(? 今後ろの方で何かが聞こえた。気のせいだろうか? うん!! きつと気のせいよ!!)

「あ、天羽さん。おはようございます!」

気のせいだと思いたかった奴の声、存在はコノハの可愛らしい声によつて無視できないものとなった。

「おお! 小葉殿よくお似合いですぞお!! 赤朔殿も!! わつちの目に狂いはありゃせんぞ!!」

「え、何? お前が見繕つたのか?」

「そうですねそうですじゃ!! 見なされこの刺繍・・・なんと美しいことやら。」

「自分で言うなよ。っていつ作つたんだ? それにこの舞台とか、昨日までなかったよな?」

「ふおふおふお。それはのお。」

「それは何だよ?」

「それは・・・かみわさ神業じゃ。」

「・・・・・・ほう。んなことを信じれと?」

「ふおふおふおふお。佐乃助殿は神を信じんとな?」

「ちげーよ。お前を信じていないだけだ。」

「なんとー!! 照れ隠しはよしんしゃい。」

「どこをどうとれば、照れてることになんだよ!!」

「相変わらずじゃのお。このツ・ン・デ・レ。」

「~~~~~つ!! 天羽!!!!!!」

(ああ~~~~~くっそお!! むかつく。てか、ツンデレの意味

知ってんの？捕まえて聞いてやる！！つて。）

「飛んで逃げんなって言ってるんだろーが！！」

天羽は鳥となり、空へと飛んでいってしまった。

「あのさ、サノ。」

「あん？」

「つんでれって何？」

「あ、俺もそれ気になったんすけど。」

「・・・知らないほうがいいときもあんだよ。」

「誤魔化さないでよ。」

「はぐらかすんすか？」

「・・・なんとでも言え！俺は言いたくない。」

（ここで負けたらツンデレの意味を言わなくちゃいけないし、でもって私がツンデレだって思われちゃうジャン！絶対に言うもんか！！）

「と、とりあえず・・・周ってみないか？まだどこがどう変わったか見てないんだよ。」

「もう！いつか教えてもらおうから！！」

「はいはい。」

「んじゃ、あっちから行きませんか？」

「始めは入り口からってか？コノハも大丈夫か？？」

「うん。僕もこれに着替えてて全然見回ってないからどこからでもいいよ。」

「そつか。じゃあ行くか！」

そういって入り口の方へと歩いて行こうとすると右腕にコノハが

抱きついてきて、左手を赤朔が握ってきた。

(???????なに？私さすがに村の中じゃ迷子になんないけど？
？気にしちゃ駄目なのかな???)

ツパと見れば、両手に花を持つ若者に見えなくもないこの状況。
どうしたものかと悩むがコノハも赤朔も何も言っていないので気にしないことにした。

世の中気にしたら負けだと、昔母が言っていたなあっと懐かしむ
自分に心の中で応援エールを送る。

ふと、右腕を見るとコノハと目が合った。

コノハはサノと目が合い笑いかける。

コノハの笑顔に悶えそうになる自分を制御し、制御する。

(あ、危ない。コノハの笑顔は人殺しの技だった！制御しなくちゃ、女つてバレル!!)

サノは心の中でうごめく何かを抑えつつ、村の出入り口へと向かった。

そして、収穫祭が始まりを告げる。

何が起るのか。

何が始まりを告げ、終わるを告げるのか。

サノは……樹は知りもしない。

ただ心の隅で『帰りたい』とい気持ちと『まだいたい』という気が
持ちが信号のように点滅していた。

20話・二つの花と二つの葉（後書き）

こ、更新。

頭のなかはパラレルワールド、いったいいつ現実に戻そうか？
悩みどころの作者です。

見捨てないで下さりありがとうございます！！

次回は登場人物紹介？を入れてみようかなって思ってます。

もう少しで本章に入れそうです！！

さてさて、これからどうなることやら。

人物紹介：ソロモンド編（前書き）

いろいろと編集をしました。（最初のほう）><。

まだまだ編集をしますので、次話が遅くなるかもです。
申し訳ありません。

さて、ソロモンドがやつと紹介を始めようとしているようで。少し長いかもしれませんが付き合ってやってください。なんせ、私語がちよくちよく入るもので……。

「おや？それはわたくしが、真面目に仕事をしていないかのようではありませんか。

ふふふふ。あの戯言はお気になさらずに、全ては正論であり事実です。

あなたはわたくしの言っていることが真実だと思いますよね？

なに？早く紹介しろつですって？？

仕方がありません。世界に指名されたわたくしの素晴らしき観察を聞き逃さないようにしてくださいね？では……」

「まずは主人公である本城 樹ほんじょう いつきという本名を持ちながら何故か（偽）日本では佐乃助さのすけと名乗っている変わり者。

そう、異世界に渡っちゃった系ですねえ。よくある話ですよ……ほほほ。

性別は女でございます。あの性格で女なんですよ？世の末でございますねえ。女性の方々申し訳ありませんね。

何？性格を詳しく教える？ですって？？しかたがありませんねえ……。

- ・ 恋愛駄目。
- ・ 涙腺硬い。むしろ泣かない。
- ・ 特技？んなもんありません。
- ・ 趣味……昼寝
- ・ 勉強はぼちぼち。
- ・ 容姿だけはまだいい。

・無駄に惚れられる・・・でも本人気づいていない。
・単純。時に鋭い。
・好きなもの？可愛いものだそうです。笑っちゃいますよね！は
は。

・嫌いなもの？虫類全般。見ただけで叫びます。固まります。

とまあこれだけでいいでしょう！挙げていたらきりがない。」

「って、おいコラ待てや！！」

「おやおやおや。本人が出てくるなんていけませんねえー。」

「貴様が変な紹介をするからだろ！！だいたい、始めの方から悪い要素言っていくなよな！！てか、テメエー誰だよ！？知りもしないやつにんで紹介なんぞされないけねえんだよ！！」

「つぶ。相変わらず言葉遣いの悪い野郎ですね。」

「つ！！（野郎じゃないって言いたいけど言えない！！あ~~~~
ム力つく！！天羽の次にム力つく！！）」

「ふふふふ。自分で選んだ選択肢に・・・ふふふふ。ウケますねえ〜。」

「・・・もういい。次のやつを紹介をしてやれ。」

いきなりのサノの乱入にご了承ください。

「ふむ。そうですねえ〜・・・次はこの方で。」

名前は、奏石 小葉という名でして、愛称は『コノハ』と呼ばれているそうですよ？

だいたい、カタカナにする意味があつるのでしょうか？そもそもカタカナにしても名を呼ぶときは意味をなさないのでしょ〜。何？気にしては駄目？

つぶ。突っ込みがあるからそ〜。わたくしが存在するのです。

・性別は男

・年齢は14歳

・一座出の上忍護師を目指す、護子の少年。（実際は目指してな
んぞおりませんでした。）

・男（女）・・・を好きになってしまった可哀想な少年。

・特技、剣の舞を舞うことまたは、笛を吹く。

・趣味・・・刀の手入れ（サノはしているところを見たことがあ
りません。）

・頭はいい方。

・容姿は・・・女性がたが悶えるほどに・・・つぶ。

・ライバルになりつつある、赤朔をどうやって追い出そうか考え
中。

・愛刀は呪いが掛かっているという噂が役所内で広まっている。

・謎の女性に狙われている危ない少年。

とまあこれくらいにしますか？

なんせ、主人公以上に良い部分がありますからあゝ（可哀想
に・・・ふふふ）。

次をいきましょう。」

コノハがソロモンドをじっと睨みつけていることにソロモンド自
身気づいていません。

コノハの右手は刀へと伸びていることに注意しましょう。

「『』とりばあー』様で、どうでしょう？

謎多き方ですよ！！

・年齢 不明（随分と前から生きている様子）

・性別 メス

・変聖物である。姿は『鳳凰』

- ・趣味 不明
- ・特技 不明
- ・容姿はバラバラと変わる。
- ・只今どこかにお出かけ中。
- ・唐津で村長やっております。

こんな感じでしょう。

お次は、あの鳥で。」

キラキラと輝く翼を持った変聖物がソロモンドに和やかな視線を送っていた。

ソロモンドはそれに気づきはせず、次の紹介へと入った。

「『天羽』でございます。

奴は特にふざけた奴でございます。ご注意ください。

- ・年齢 不明（誰も知らない）
- ・性別 オス
- ・変聖物の仲間。姿は『小さな白い鳥』
- ・趣味 人をおちよくる
- ・特技 神業で衣服を仕立てる。
- ・容姿は外見可愛い。中身最悪。（サノ・赤朔談）
- ・只今 収穫祭の司会者お勤め中。
- ・唐津では案内役。

天羽の謎を知りたくば、天羽にお聞きくださいませ。」

白い鳥がソロモンドの頭上をぐるぐると飛びんでいた。それはまるで鷹が獲物を狙うかのように……。

「ではでは、次にいきましようかね??」

そういうソロモンドに多くのタライが降ってきた。

ゴン ガン ゴン ゴゴン

「……………地味に痛いですね。

何ですか?はあ??更新ができない??人物紹介に時間が掛かりすぎていますって!?

仕方がありませんねえ……………今日のところはこの辺にしようと差し上げましょう。」

ソロモンドはそういつて、あなたがみている画面に映った。

そしてお辞儀をしながら、微笑んだ。

「申し訳ございません。

作者が颯爽と更新をしたいらしくこのへんで終わらせていただきます。

あ、大丈夫ですよ。

すぐに、わたくしに会えますから……………ね」

そういい、ソロモンドはあなたに、投げキッスを残しその場を立ち去っていった。

「さて、今この場にはあなたしかいません。

もしよければ続きを読んでくださるとうれしい限りです。

扉は 入り口 出口 の2つだけ。

いったい彼らはどうなるのでしょうか。

『世界のありかた』を誰かが記し、示し、正してくださることを
待ち望みましょう。」

そう誰かがいました。

人物紹介：ソロモンド編（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

見捨てないでくださった方に感謝です。

実は授業ちゅうの更新だったりしますが、気にしません。

次話、なるべく早く更新させていただきます！

21話・何故ここにいる？その理由が必要なのだろうか。(前書き)

短めに書こうとして失敗したヒト。

そして何故だか、シリアスモードに突入しそうです。

21話・何故ここにいる？その理由が必要なのだろうか。

トーン トーン トーン

村全体に響き渡るようにか、太鼓を叩く力がさつきよりも強くなっている気がする。とサノは一人でそんなことを考えていた。

サノがいるのは広場の中央・・・そう、舞台がある場所。

つい先ほどまで、赤朔とコノハと一緒にいたのだが、時間になったのことで、2人はどこかへと行ってしまったのだ。

正確に言えば、舞台で行われる『お楽しみ』の時間が迫ってきたので、しぶしぶながら迎えに来た天羽に連れていかれたのだ。

サノに言わせれば、コノハが天羽に攫さらわれたとのこと。

「んで、ここで待ってればいいのか？」

何が始まるのか、サノにはわからない。

ただ、2人は護子であるから出し物をしなければいけないということを知っているときに聞いた。

「護子だから？護師もそうなのか？何かしら一つの特技でも持つ

ていないと、護師・子になれないのか？意地悪なことだ。」

「何故そう思うのじゃ??」

「だってそうだろう？もし、俺みたいにさ、何の取り柄もない奴が護師になりたくて志願しても特技がなければなれないだろう？」

いや、違うな。特技があってもそれが優れていないと……。」

「なれないと？佐乃助はそう考えるのじゃな？」

「……たぶん。確信はないけどさ。なあ、天羽……この際お前がいつから俺の肩にいたのかなんて問わないからさ、俺の疑問に答えてほしい。」

そうサノはいつからか肩にいたのかわからない天羽に言った。

対する天羽はどこか残念そうな声で答える。

しかし、帰ってくる答えはいつもながらに予測を反するものだった。

「ほほう、初めてのするーじゃな。」

「いや、何度かスルーしたことなかったか？だいたい、なんでも前は『スルー』という言葉を知っているんだよ!? 『ツンデレ』もそうだったけど!」

「……ないのう。それに、わしゃあ、なんでも知っておるからのおくなんら不思議はなかるう。」

「……あるはずだから。お前の頭は、お前の都合の言うように解釈されるんだろうな。そして、とりばあーが知っていたのなら不思議はないが、お前が知っているというのは何処の誰が聞いても不思議に思うはずだ!」

「ほっほっほう!それは良き事じゃ!」

「よくねえーよ!!!って話が逸れていく!!!そして最後のほう聞き流しやがった!!!」

サノは鳥になっている天羽を鷲掴みし、地面へと投げ付けた。

地面に落ちる前に、天羽は人型へと変わり持っていた扇でパタパタと仰いだ。

そして、あせった顔もせず、逆にしてゆったりという表情でサノを見た。

（あの顔はさっき、天羽が私にしたスルーか！？そのスルーに対しての顔か！？）

勘違いなのか、当たっているのか分からないが、どちらにしてもその表情はサノの浅い沸点に辿り着くものだった。

つまり、只今サノは怒り中なのである。

しかし、その沸点も天羽の巧みな言葉遣いで、一気に冷える。

「まったく、危ないのう。わっちじゃなかったらどないしたんや。」

「……言葉づかいをいろいろと変えないでくれないか？頭が混乱する！そもそもお前だからこそ（投げれるんだよ）できるんだよ。」

「いいじゃなかとかあ。多種の方言を操るわっち……尊敬に値するじゃろう？だからこそ、佐乃助も信頼してわっちを投げれるんじやな。ふおっふおっふお！」

「ちげえーから。しかも、誰も尊敬してねえーよ。」

「ふおふおふお。佐乃助もわっち同様、言葉づかいがいろいろと変わることに気づいておるか？」

「……まあ、お前のおきだけだけどな！！こんな言葉使ってたらコノハに嫌われるしな。」

「果たしてそれはどうじゃろうか？どのような、お前さんでも小僧は気にしないと思うがな。」

久々に聞いた気がした。天羽の「お前さん」という呼び名。初め

て会ったときに呼ばれた呼び名。

そしてその時の天羽はたしか、おっさんだったはず……。でも、今の人型は老人だった。

コロコロと変わる天羽の姿。

どれが本当なのが分からなくていつの間にか、考えるのを止めていた。

本当の天羽は、「白い鳥」ということだけを知っていればいいとサノは思ったからだ。

いや、考えるのを止めていたのは、「天羽」のことだけではない。「コノハ」のことだってそうだ。

あの時言われた言葉の意味を考えるのを止めた。

そして今、自然と口からでてきた「コノハに嫌われる」という言葉が何故でてきてしまったのかを考えもしない。

それは、「無関心」だからなのだろうか？

(いや、違う。)

サノはそう心の中でいいはるだろう。

本当は、「全てを受け入れれば楽。」だと考えているからだ。それが、無関心ではないと言えるのであれば。

「小僧っていうなよ。確かに子供だろうけど……。それに歳、聞いてなかったな。今度聞いてみよう。」

「して、問いとは何かや？」

「ああ、そうそう問いつてのは……。って待て。お前から話逸らしといて、戻すなよ！なんか俺がバカみたいじゃないか！」

「そう思うのは、自身が認めているからなのだろう。うゝ可哀そうにのう。」

「何故そうなる！？そしてまた、話を逸らそうとするな！！」

「逸らしてなかとよ？それにのう。その問いをする前に、この祭

りを楽しんではどうじゃ？」

「いや、十分楽しんでるよ？何処をどう見たら楽しんでないようにみえるんだよ。」

「見えるともう。その『問い』をしようとするのだから。」
「……。」

(もしかして、もしかなくても……天羽は気づいている？
私が問いたいことを？そんなこと……)

「あるはずがなかるうて？そんなことなか。わしゃあ、知っておる。とりばあー様の次に優秀と言われとるからもう。」

「……何気に自慢しないでくれる？だったら、何を問いたいか言ってみてよ。私が、『問い』たいことを！」

言葉遣いが、戻ってしまっていることは気にしないことにした。
何故って？

ここには、コノハも赤朔もない。つまり、バレても困らないってこと。

サノはそう考えながら、「ほら言っつて御覧なさいよ！」っというように、天羽を見た。

「では、言おうかの？」

『自分はもしかして死んでいるのではないか？』

『死んだからここに来たのか？』

『そんな自分には役目があるのか？ないのなら、何故ここにいる？』

じゃろつ？そして終いには……。。。

『旅人は……本城 時宗は、自分の父親なので
はないか？』

21話・何故ここにいる？その理由が必要なのだろうか。（後書き）

気づけば、8月1日。

見捨てないで下さったかたに感謝&感激。

せっかくのお祭りをサノ自身がシリアスにしてしまうという問題が発生。

どうなるのでしょうか？

次回こそは、短めに書いてすぐに更新ができるようにしたいという作者。

しかし、下手だからそこ長くなってしまっていると何故気づかないのでしょうか？

悩みどころですね。

22話・その響き渡る旋律と舞いと（前書き）

短めです。

22話：その響き渡る旋律と舞いと

サノは、樹は、無言になった。

聞きたかったことは、そうではなかった。
でも、本当に聞きたかったことを、今言われてしまった。

「……………何故そう思った？」

その問いに天羽は答えずにただじつと樹を見ていた。

（なんで答えないの？しかも、疑問がわかっているのなら、それに答えてくれたっていいじゃん。）

樹は、天羽を睨みつけた。

その瞳には、黒く濁った感情を含ませながら……………。

「回答を求めるよりも、自身で探すほうが良いじゃろつて。現に、お前さんは答えを知るのを恐れている。それでも、知ろつとする。」
「……………。」

樹は答えない。

確かに、答えを知るのは怖い。

（もし死んでしまっていたら、母さんや由衣……………100歩譲って、紫原にも会えなくて、ううん。何よりも亜樹に会えない。ま

だ、謝っていないのに。」

「ヒトは探究心が強いというらしいのじゃ。」

「……………」

天羽は行き成り話題を変えた。

いや、話は続いている。そう樹は感じた。

「探すことを止めるということはお、生きるということをやめるということでもあるのじゃよ。」

「…………それは、考えることを止めるということじゃないのか？ 『人は疑問を持ち考えることを止めると生きられない』と私はそう聞いたことがある。」

「ふおつふおつふお。お前さん、自分を柵に上げて言っておらんか？」

「は？」

樹には天羽が何を言いたいのかが分からなかった。

けれど、天羽の瞳が光ったことだけは分かった。

その瞳には強い何かが宿っていて、自分のどす黒い感情さえも掻き消すようなものだった。

「わっちの口トを深く追求せず、ありのままに受け止めようとしたこととう。小僧のこと…………。考えるのを止めたんじゃないかとかや？」

「……………」

なんで知っているのかわからない。

天羽は人の心を読むことが本当はできるのではないかと、いつも疑問に思う。

けれど天羽は、「違う」と言った。
顔に全てが出ているのだと言ったのだ。
でも……っと樹は思う。

(どうしてそのことまでわかるんだ!? やっぱりコイツ読めてん
じゃないのかよ!)

「だからもう。考えることを止めたお前さんは、生きていないこ
とになってしまっじやろう? しかし、お前さんは生きている。何か
しらの疑問を抱え、探しているのじゃよ。」

「なんだよ……。つまり、考えることと探すことは一緒ってコ
トなのかよ!?!?」

「そうとも言うし、そうとも言わん。答えは全てお前さんが知っ
ているし、答えは自^{おの}ずと見えてくることもある。」

「矛盾してるじゃん。」
「そう通り。この世は全て矛盾しておる。だからこそ、探すのじ
ゃよ。」

天羽はさつきまでの表情とは打って変わって、とても穏やかな表
情をしていた。

それはとりばあーがよく、樹を見ている表情と同じで……。

「探すって言ったって……どうやって探せば_____。」

探せと言われて「はい、そうですね。」などと言って簡単に探せ
るものではない。

そもそも、樹はこの村から一步も出たことがないのだ。

(外にどうにも、コノハと赤朔が言うには【陰】がいるんだろ

「今年は、護子2人が出し物をするらしい!!」

「ホントかあ?」

「本当じゃけん!!」

「よきかな〜よきかなあ〜」

「!!!!!????」

いつの間にか、自分の周りに人が満ちていることに驚き。

また、その人々の喝采に驚いている樹は、初めてこの収穫祭が唐津のヒトたちが待ち望んでいたことを知った。

その喝采はいつまで経っても静まることはなく、逆にますますヒートアップしているようだった。

いい加減に、沈まれよ。と樹が思い始めたころである。

「イツツア ショーーーーターーーイム!!」

「!!!?」

突然のマイクを使ったかのような大音量に樹は驚いた。

いや、驚くのはそこじゃなかった。

「つちよ、あ、天羽?!みんな何言ってるのかわかってねえよ!」

天羽が司会者らしく、いつ着替えたのかわからない柄の派手な袴を着て舞台に立っていた。

そして今の掛け声。

もちろん分かったのは樹以外誰もおらず、騒がしさが一気に引いた。

「今何て言っただんだ?」

との言葉がとどころで聞こえており、何人かが。

「きつと聖なるお言葉だべ。」

と、間違った解釈をしていたので樹は天羽を睨んだ。

その瞳はつい先ほどまでとは違い、冷ややかではあるが温もりも交じっていた。

ついにはその囁きも聞こえてこなくなり、広場はヒトがいるにも関わらず物音一つしなくなった。

そして――。

笛の音と袴のする音が舞台のほうから聴こえてきた。

その音はどこかで聴いたことのあるような音で……………。

樹は……………サノは、その笛を吹く主ともう一人、扇を携えた主を見て口をあんぐりと開けることとなった。

22話・その響き渡る旋律と舞いと（後書き）

樹は葛藤しています。

どうすればいいのかとか、悩んで悩みまくっています。

でも、本当にどうすればいいのかわ知っているのは樹自身です。
早く気づいてくれるといいのですが。

23話：終わりと始まり（前書き）

ひ、ひひひひひひ久しぶりです。

更新できました。きせーきせーき！末長くお待ちくださった読者の皆様アリガトウございます！！感謝永遠に……（キャッチフレーズ？）

では、どぞ。

23話・終わりと始まり

笛の音が耳に入ってきたとき、何故かとても懐かしい気持ちになった。

幼いころにこれと似たような笛の音を聴いたような気がするのだ。けれど、サノには何故そう思うのか分からなかった。否、思い出せなかったのだ。

(いったい、いつどこでどんな時に聴いたのだろうか？こんな優しい音色を忘れるはずはないのになあ)

笛の音は誰かに何かを伝えたいという強くそして優しい音色を響かせていた。

ふと、いつの間にか瞳を閉じていたらしいと気づいたサノは目を開く。

そして、驚いたのだ。

シャラン シャラン――

扇に付いている鈴の音が笛の音に合わさるかのように、音を奏でていた。それはまるで自分もここにいてという存在感を示しているかのようで。

その二つの音を聴くととても落ち着くのだが、奏でている2人の人物を見ると複雑な気持ちを抱いてしまうのだ。

（……………出し物ってコレだったんだな。それにしても、なんであの2人はあんなにも綺麗なんだ？可笑しいだろうそれは……………男が綺麗って……………いや、可笑しくはないけどさあ〜私は複雑だよ。）

そういうようかのようにサノは眉をひそめ口を無一文にしたが、音と舞には罪がなくそもそもただの嫉妬なので素直に感想を口にす

る。
それは、誰かに伝えるわけでもなく呟いた。

「すごいな。コノハも赤朔も……………幼い頃から習っていないとできないだろうに。」

「まったくもってその通りですじゃあ〜。小葉殿は出が一座ですからのう。ああ、一座というもんは歌や踊り、音楽を奏でたりする人々に極楽を与えるものたちじゃ。」

「おい。」

「ついでに小葉殿は剣舞もできるそうじゃぞ!!」

「だから、おいつて。」

「赤朔殿は……………これがまた名家の生まれでしてのう。今も待つておる『桜』は幼少の頃より身体に叩き込まれた舞や武芸の一つじゃな。」

「……………。」

「その神聖なる舞は、陰をも退けると言われておりますぞお!!」

「プライベート公開ちゆうだな。」

「頭にインプットしましたかや?? 厳密なプロフィールですぞお
おおお!!」

「俺はもう何も驚きはしないぞ。そう、何も……………。例え、な

んでそんなことを知っているのかとかはあえて聞かない。いや、気にしないからな!」

さっきまで、舞台のほうにいたはずの天羽がいつの間にかまた、サノの肩に止まっていた。

この際だから、いつから自分の肩に止まっていたとか、英語の意味分かって使っているのかとか気にしないと決めたサノがいた。気にしたら、負けるような気がするのだ。

(思い込みかもしれないが……天羽のことだありえる確立が高い。いやいやいや、勝負はしてないんだがな。)

誰かに言い訳をするかのように頭でぶつぶつと独り言を呟く。頭の中になら天羽もなにも言わないと思ったのだ。

「まだまだ知っておりますぞ!!例えば……そう、樹殿のこととかのう。」

(今、何か聴こえたんだが。幻聴だろうか??)

天羽がさもわっちは独り言を言っているのですじゃ。というように明後日のほうを見て言っていたので危うく聞き逃すところだった。いや、もしかしたら聞き逃したほうが良かったのかもしれないとサノは後悔をし始めていた。

「樹殿はのう……。」

「待てい。」

ガシッと天羽を握る否、掴むサノは握りつぶさんばかりの握力を加える。

「のうのうのうのう……わしゃ、まだ死にとくない。」

いやいやと鳥の姿のまま首を振り、嫌がった。

「変な嫌がり方すんな。のうのうってなんだよ。そもそも死にた
くないんなら」

「金を出せと？そりゃあ〜ヤンキーゆうもんじゃあ。」

「違う！！なんだよ！ヤンキーって！いんのかよ、この時代に！
？」

「違うのかや？では、肝きもをかや？！」

「なんでそうなるんだよ！俺もう、人間じゃねーじゃん！！しかも、最後に言ったやつスルー？！」

サノがげっそりとして天羽を放すと天羽は翼をパタパタと羽ばたかせ首を傾げた。

なんとも可愛い仕草だろうか。

（これが、天羽じゃなかったら。）

何度そう思ったか。

その思いを知ってか知らずか、いや知らないだろう天羽が言う。

「佐乃助殿は、せつかくの舞台をみりやせんのかや？」

「……誰のせいだよ。」

「ふむ。わっちじゃなとかやあ〜」

のほほんど答える天羽にサノは睨む。

しかし、その睨む攻撃も天羽には効かなかった。

「お前じゃなかったら誰なんだ」

よ。と言う前に村人たちに口を塞がれた。

「武者どの。」

「侍殿。」

「樹殿。」

「佐乃助殿。」

「「お静かに!!最後ですぞ!!」」

「むぐぐぐ。」

口を塞がれているせいで何も言えず、仕方なく舞台のほうへと目と向けた。

そして、舞台は終わりを告げる。

誰に伝えるのでもなく、ただ誰かがそう感じるからだ。

そして、始まる物語。

かの少女がこの地へと降り立った終わりの物語。

23話・終わりと始まり（後書き）

やば。

早く、旅にでなければ何もせずに終わっちゃー！！（コラコラ。）

更新、頑張ります。

「カッププラーメン」のほろをさっさと終わらせようと言っ魂胆があります。

24話：騒動の前触れ（前書き）

ふふふふふふ。更新しました。
遅くなり申し訳ないです。

今回は少し大変なことが起こるようです。
どうなるのでしょうか？

24話：騒動の前触れ

唐津という村の門の前。

そこに居てならぬモノがいて、居てはならない存在がある。

「小葉……会いに来ました。わたしの愛おしい小葉……」

黄金の髪を持ち、空の色の瞳を持つ少女は愛おしげに村の閉ざされている門を見つめていた。

正確に言うと、その門の内……村の中が見えるかのように愛おしげに見つめている。

そんな少女の傍らには、少女を守る盾のように否、従者のように形の定まっていない陰がいた。

「小葉……小葉……小ノハ……コノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハコノハ」

狂ったような少女の言葉が村の外に響き渡る。

しかし、村の中には聞こえない。

村では収穫祭を祝う音楽、喝采でその『異常』とは遠くかけ離れ
ていた。

「ああ……。今すぐに貴方の元へ」。

少女はそういつと、門の前に片手を差し出した。

ギギギギギ

ギギ

パリ

—————

何かが無理やり破られそして割れる音が遙か遠くで聞こえた。
その音を聴き、少女は小さく微笑んだ。

「なんて脆い結界。こんなもので陣を守っているなんて甘いです。
ねえ、緋石？」

少女は村へと足を踏み出した

誰かに想いを告げるような笛の音と誰かに自分しか瞳を奪わせな
いように自らの美しさを見せつける舞い。

そんな『出し物』を見ても、サノは何も言えない。
そもそもその想いを自分に伝えようとしているなんて思ってもい
なかつたのだ。

「まったく鈍感なヤツじゃのお。」

そんなサノを見て、天羽はため息交じりに呟いた。
しかし、その呟きはサノに聞こえることはなかつた。

「こういうとき、芸術に関心があったら何を伝えたいのかわかる
んだけどなあ。どういう曲で舞いなのかぜんぜんわかんねえ。」

「な、なんとそこからなののお？そもそも、芸術だけに心があつたとしても佐乃助殿にはわかりますまい。」

「あ？なんでだよ？？」

やれやれと首を振る天羽にサノは眉を顰めた。

だが、天羽は答えようとはしない。

そんな天羽に文句を言おうとすると、

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・パリーーーーーー

ーーーー

遠くで遙か遠くで何かが割れる音がしたような気がした。

（な、何？今の？？？）

「天羽・・・・何か聴こえなかったか？」

「・・・・・・・・。」

不安になつて天羽に問うが天羽はこれにも答えない。

「つちよお前いい加減に無視すんなつて！」

そう言いサノは天羽を見た。

そして驚いた。

いつの間にかヒト型に変化している天羽が今までに見たことのない表情をしていたのだ。

「あもつ？」

「佐乃助殿。いんや樹殿、赤朔殿となによりも小葉殿を連れて」

社』へと急ぎなされ。」

サノは心配になり天羽を突くと、天羽は厳しい顔をしてサノに樹に告げた。

行き成りそんなことを言われた樹は驚く。

「つちよ、ちよつと待てよ！どういうことだよ?!」

「わかりましたかや?んでは。」

有無を言う暇もなく、天羽はその場から立ち去ってしまった。

(え?え?なにがあつたんだよ?)

不安になるサノに周囲は気づくこともなく舞台でいつの間にか終わっていた『出し物』に喝采をあげていた。

(とにかく、赤朔とコノ八を連れて社・・・とりばあー宅に行かなくちやな。)

サノは考えるよりまず先に天羽に言われたとおりに行動することにした。

天羽のあの表情を見て、何か大変なことが起こったのであろうと思つたからだ。

サノは走つた。舞台の方へと。舞台の裏へと。

ヒトを掻き分けながら、走つた。

「つ・・・コノ八!!赤朔!!!」

走ることが得意なはずなのに息が切れ切れになつてしまつほど慌てている自分に驚きながらも、2人を見つけられたことに安心をし

ながら呼びかけた。

呼ばれた本人たちはサノが突然現れたことと、サノの瞳が不安げに揺れているのを見て息を呑んだ。

「サノ!!! どうしたの?!」

「どうかしたんすか?!」

赤朔とコノハは慌ててサノに駆け寄った。

そんな2人の手をサノは掴み何も言わずにとりばあー宅へと走り出した。

「「?????!?!?!」」

2人とも急に手を掴まれ走り出したサノに驚きながらも、何か事情があるのだろうとサノに合わせて走り出した。

ドドーーーーーン ドドーーーーーン ドンドンツカツカカカカ
ツカ ドドーーーーーン

走る3人の背では、楽しげな太鼓の音が鳴り響いてる。

とりばあー宅に着くとサノは無表情のまま戸を開き2人を押し入れ、そして自分も入った。

中はすでにロウソクが灯っており、まるで火は消していなかったかのように赤々と燃えあがっていた。

「はあはあはあはあっつっ。」

息切れを起こしているサノにコノハと赤朔は心配気に顔を覗き込

んだ。

「大丈夫？サノ？？」

「一体何があつたんすか？」

心配するコノハと不安げに質問する赤朔に微笑みかけながら、サノは息を整えた。

「な、なんだか、良くないことが……っおこっているらしいんだ。」

「良くないこと？」

「誰がそんなことを？」

途切れ途切れになりながらサノは答えた。

そのサノの答えに、コノハと赤朔は疑問を投げかける。

「俺にもよくわからない。ただ、何か割れる音がしてその後天羽が血相を変えてどこかに行ったんだ。2人をここに連れて行けと言つてな。」

「音？」

「……………」

赤朔は良く分からないという顔をしながら首を傾げた。

しかし、コノハは何かを考えるように腕を組み、そしてサノを見た。

「聴こえたのは『音』だけ？」

「……………音だけだったが、コノハは何か聴こえたのか？赤朔は？」

「いんや、俺は何も聴こえてないっす。」

「僕は……ううん。聞き間違えかもしれないからいいや。」

自信満々に答える赤朔に対しコノハは何かを隠すように微笑みながら答えた。

「コノハ？」

心配になりコノハに呼びかけるが、コノハはただ首を振るだけ。何でもないよというように。

「つま、大丈夫ですよ！何かあったら俺がサノさんを守りますから！……」

ニツと笑い宣言する赤朔に、コノハがツムとした顔を向けた。

「赤朔よりも僕の方が強いんだけど？僕の方がサノを守るのに適任じゃないの？ううん、僕が守るから安心してね？」

赤朔の宣言を全否定するようにコノハはサノの手を握る。そんな2人を見ながらサノは情けなくなった。

（なんで私はこんなにも弱くなってるんだろう？心配を掛けさせ、慰められ、守られようとしている。なんて……なんて貧弱な……！）

このままではいけないと思い2人を見るサノの瞳はもうすでに強く、もう大丈夫だという気持ちさえ読み取れる意思があった。

「おいおい。俺を守る前に自分も守んなきゃ意味ねえよ。だい

たい俺が守られるような奴かあ？逆だろ？俺が2人を何からでも守ってやるよ。」

なっ？というサノに赤朔は無理無理と首を振り、コノハはどこか悲しそうに笑った。

そして

キヤア――――

――――！！！！！！

ワアアアア！！！！

悲鳴、驚き、そして混沌とした音が3人のもとまで聴こえてきた。何が起こったのかそれを見ようと窓や戸を開けようにも無理だった。

(開かない！？)

窓や戸は固く閉ざされさも、外へ出ること外を見ることを禁じているように思えた。

「おおい、なんで開かないんだよ！」
「……………」

慌てる赤朔に表情を硬くするコノハ。

対象である2人を見て、何故か緊張がほぐれるサノがいた。
そんな3人に声を掛けるヒトもまたどこか穏やかである。

「落ち着きなされ護子よ。」

後ろから掛けられた声にサノたちは驚いた。

声の主はよく知るヒトだったからである。

C
o
n
t
i
n
u
e

t
o
b
e

24話：騒動の前触れ（後書き）

さてさてさて、一体何が起きているのやら？

一体どうなってしまうのやら、次回をお待ちください。

できるだけ、早めに更新ができたらと思っておりますが……。

汗 申し訳ありません（先に謝るときます。）

ではまた！

25話・自分にできること(前書き)

更新ができたのです。

短めにしていくことにしました。

すぐ終わっちゃいますよ？ほんとですからねー！

そんなサノに気付いたのかコノハがサノの手を握った。
握られた手のひらからは、子供のような暖かな体温が伝わってきて
その暖かさにサノの握りしめられた右手がゆっくりと力を抜いた。

(ああ・・・なんて情けないんだろう。私はこんなにも弱かった
かな？ううん。違う、きつと混乱しているんだ。・・・ありがとう
とう。コノハ！！)

もう、大丈夫。頑張るから！その思いを込めてサノはコノハの手を
握り返した。

そして、いつの間にか下に下がっていた顔を上げ、社の中央に佇む
鳳凰を見つめた。

「とりばぁー・・・お帰り。」

サノの口からでた言葉はまずそれだった。

とりばぁーは、もうサノにとっての家族である。

家族には「お帰り」を言うのが当たり前で、言えなくなった時が一
番悲しいことをサノは・・・樹は知っていた。

「ふむ。ただいまじゃのお。」

サノの言葉にとりばぁーは柔らかく微笑んだ。

しかし、サノがすっかりとした瞳をとりばぁーに向けると同様にとりばぁーもサノに凜とした瞳を向けた。

とりばぁーが人型であるなら、まだ暖かみが見られたのだろうが目の前にいるのは鳳凰である。

凜とした瞳には、何の感情すら映ってはいなかった。

(いや、鳳凰だから感情が読み取りにくいんだな。まったくなんでまた鳳凰の姿なんかしてるんだろう?.....いやいやいや、今私がすべきことは。)

コノハの手を握ったままサノは、とりばぁーに言った。

「とりばぁー.....村で何が起こっているんだ?村の様子を見ようとも戸も窓も開かないんだ。」

「知ってどうする?見てどうする?そなたに何ができるのかや?」

サノの言葉にとりばあーは答えた。

その声がどことなく、冷たかったのは気のせいではないのだろう。

サノはコノ八の手を気付かぬうちに強く握っていた。

しかし、コノ八は解こうとはせず、逆にサノの手を握り返した。

それはまるで、僕がついているから大丈夫だよ？というように。

強くコノ八の手を握っていることに気付いたサノは慌てて力を弛めたが、話そうとはしなかった。

(ごめん。コノ八・・・もうちょい握らせて、私に勇気を頂戴！
！今から、自分の道を進むから！)

その思いに気付いているのかは、謎だがコノ八の手はサノの手から離れることはなかった。

「今、この村の現状を知っても俺はどうすることもできないだろう。
コノ八や赤朔のように護子であるわけでもない。」

「そうさな。護子でなくとも、陰を見たことがない陽を見たことがない。ましてや刃を持ったことのない子供がこの社から出て何ができようか？否。できることはない。」

(陰や陽のことは、コノ八から教えてもらってわかってる。いや、

わかつたつもりでいるのかも知れない。だけど……確かに刃、刀なんてもったことはないよ。当たり前じゃん、平和な時代の日本にいたのだから。」

「だからといって、何もしないわけにはいかない。刀を持って振り回すだけでも、助かる人がいるかもしれない。俺は、何もせずただ黙って守られるのは嫌だ。それに、俺は死なない。いや死ねない。」

「それは何故じゃ？」

コノハと赤朔は、サノの言葉に啞然としていた。

刀を振り回すなんて護子であるならば、言語道断。しかし、護子でなくまた、記憶喪失であるサノは刀が正しく使えなくとも助けられるのならば助けるといつているのだ。

とりばあーは、サノを見据えるようにして問うた。

その返答次第ですべてが決まるかというように。

「俺にはすべきことがあるんだ。まあ、ひとつは家に帰らなくちゃいけないことだけど……あ、記憶を取り戻してからな！もちろん。」

「そうかや。」

「そうだよ！それにさ、できることが何も無いなんてことは絶対ないんだ。探せばいくらだってある。それが、この社でのんびり騒ぎが収まるを待ってわけじゃないけどさ。」

きらきらと光るサノの瞳。

それは、己の進む道を知っている者の瞳であると誰かが言っていたような気がすると、とりばあーは遙か昔を見るかのように目を細めた。

その表情はどこが、優しげでさっきまでの冷たさを見つけることができないほどだった。

「そなたの目で見るがよい。【陰】の姿を……そしてソレを連れるモノを。」

「連れるもの?? 陰を従わせる奴がいるんすか! !」

さっきまで黙っていた、赤朔が驚いたように口を開いた。

コノハも驚いているが、どうしたのだろうか? 気分が悪そうに見える。とサノは思った。

「現に外で、人を探しておる。多くの犠牲者を出してお。」

「人を? 犠牲者を出してまで探す奴がいるのか! この村に! ! そもそも従わせる奴なんかがいるほうが信じらんねえーけど。」

戸の外が見えるかのように赤朔は戸を睨んだ。

赤朔は今にも外に出て陰を滅しようかと思っているのだろうか、動

きはしなかった。

コノハのほうは、戸を睨みながらブツブツと何かを呟いていた。

(コノハ? どうしたんだろっ??)

呟きが聞こえなくなるとコノハの身体がよろけた。

それを慌ててサノは支えてコノハに声を掛けようとするが、コノハは小さな寝息をたてて眠ってしまった。

「え。え? ちょっと、おい! コノハ?？」

いきなり気絶したように眠ってしまったコノハに驚いたサノは心配し、とりばぁーを見た。

とりばぁーは安心しなさいというように頷く。

「うん? って、そいつどーしたんすか? さっきまで起きてたのに。」

赤朔も急に眠ってしまったコノハに驚いたのだろっ。

赤朔もとりばあーを見て、聞いた。

「結界を張ったのじゃな。それによって、力が尽きて眠ってしまったじゃ。」

「は？結界？？こいつにそんなことができんのかよ。」

「どこで知ったのか、否教わったのかはわからないがお。とても強い結界じゃ。あ奴らには気付かれん。」

「でも、その『奴ら』がいる限りコノハは眠りっぱなしなんだろう？」

「そうなるのお。」

「じゃあ、追っ払わないとな。よっしゃ、赤朔行くぞ！！」

「え！あ、はい！！全力で守らせていただきます！！」

「俺を守ってどーすんだよ。」

「いえいえ、守りますって！！」

コノハに負けないほどの満面の笑みで赤朔はサノを見た。

サノはその笑顔に何も言えなくなったが、一言だけ述べた。

「怪我すんなよ。」

「善処します！！」

サノは支えていたコノハをゆっくりと床とこに降ろすと、とりばあーの

ほづを振り返った。

そしつ

「いってきます。」

そうとりばあーに言つと赤朔とともに外へと足を踏み出した。

【これが、私のできること】

【陰】だって【陽】だって、
【刀】だって使ったことはないけれど。

！！
今私にできることは、眠りの姫君・・・王子？を救い出すこと

待っててね！絶対に助けるから！！

キミを助けること。

それが私にできること。

25話・自分にできること（後書き）

っふ。

リアルタイムで書き上げました。

後々（改）していきます。（意味不だったらすみません；）

次回の次回は現代です？もしかしたら次回が現代かも。
頑張ります。その前に短編書きます（タブン）

では、また次回！！

26話・目の前に広がる光景に（前書き）

はい。

申し訳ございません。

いろいろとやることが重なり、更新が遅れてしまいました。
短めにしております。

ついでに、エグイのがこれからまじってくるかもです。

でも、最終的には……。

26話・目の前に広がる光景に

75043uotjorejt03740t?2rppjekf
kf@gks@dfkgs@sdriagajljaiyfodha -
- - -

サノと赤朔が社の外に出ると雑音ノイズと共に赤い光景が視界と聴覚を奪った。

それに、サノは耳と瞼をふさぎたい衝動にかられ、それを押しとどめるように一歩後さずった。

赤朔の方は、眉をよせただけで、周りを見渡し状況の把握をし始めていた。

(ダメだ、ダメだ、ダメだ!! しっかりしなくちゃ!!)

自分を奮い立たせるように、サノは自らの手のひらを強く握りしめた。

強く―強く―強く― 爪が食い込むほど強く……
ただ、自分の意思を強く持つように、心に刻み込んだ。

「サノさん? あっちの方に行ってみませんか? まだ、だれか生きてるかもしれませんし。」

ぼーっと突っ立っていたサノに、赤朔は広場にある舞台を指さした。

生きている……赤朔は確かにそういった。

でも・・・とサノは思う。

(生きている人を探すなら舞台とは反対側の・・・そうあのノイズが聞こえている方に行けばいいのに。それなのに、どうして・・・?)

サノは気づかなかった。

戦いになれていない——否、素人であるサノをいきなり敵と合わせるのは危険行為であることにほかならず、また、ほんの少しの赤朔からの優しさでもあることに。

そう、ほんの少しの優しさである。

ザッザッザッ・・・

赤朔の言葉通りに、広場へと足を向けるサノだが、その足取りはおぼつかない。

(しっかりとしなくちゃ。生きている人を探すんだ・・・いや、助けるんだ!! コノハを、村を、みんなを!! 私にできることを!!)

足元ばかり見ていた、サノは気力を振り絞るように勢いよく顔を上げた。

そして、次の瞬間・・・目の前の光景に顔を上げたことを早くも後悔した。

舞台の上には、一積み上げられたヒトだったモノ《・・・・・・・・・・・・・・・・》があった。

それを見て、サノは目の前が霞んだような気がした。
否、実際に霞がかかったように、風景がぼやけはじめていた。
それに次いで、体まで震え始めていた。
サノの心身が、この光景を拒否しているのだ。

「ひでえな。こりゃあ・・・。」

そんなサノに気付くことなく、赤朔は舞台の上へと登り何かを調べ始めていた。

（さっきまでの思いはどうした！？助けるんだろ！！みんなを・・・
コノハを！！赤朔が、平然としているのに・・・なんだ！どうしたんだ！！私はこんなに弱かったか！？）

いつか自分自身に問いを投げかけた問いをもう一度投げかけた。
それは、いつ自身に問うたのだっただろうか。
しかし、どれも答えは出てこない。

「サノさん？顔色悪いっすよ??社に戻りますか??」

いつの間にか、赤朔が目の前に立っていた。
それに、驚いたサノは一步後ずさった。
そして、その行動に対して苦笑した。

（私は、後ろに進んでばかりだな。赤朔には心配かけるし、さっきまでの勢いは削がれるし、戻るのか社に・・・?）

『戻る』と選んだら、きつと後悔することをサノはわかっていた。

（戻ったところでとりばあーになんて言う?コノハはどうなる?）

護子じゃないから、許されるなんてことはない。この道を選んだのは私じゃないか！)

しかし、そんなサノの葛藤をよそに赤朔は、小さく首を振りサノを社に戻そうとした。

そのときの、赤朔の表情をサノは知らない。

唇を噛み、やはりこのときも足元を見ていたのだから。

赤朔はただ、苦しげに眉をよせてサノを見ていたのだった。

それは、まるで『この場を、見てほしくなかった』という後悔をしているかのようであった。

26話・目の前に広がる光景に（後書き）

サノの葛藤ですね。

よく、葛藤してますね。頑張っ！！サノ！！

そして、赤朔もファイトだ！！

27話・立ち上がる時（前書き）

人生って苦難が付き物ですよ。私なんかほぼ毎日です。

のらりくらりとゆっくり超えています。サノのようにガバッと立ち上がれないので羨ましかったです。

また、後ほど（改）していきます。

27話：立ち上がる時

赤朔の表情にも気づかないまま、サノは考える。

どうしからいいのかを――。

カツチャ……。

服と呼んでいいのかわからない袴の裾にすがる思いで握ろうとしたとき、飾りばかりだと思っていた刀に手が当たった。

（これは……。天羽が用意した男装の道具の一つ――。あ、なんか腹が立ってきた。）

あの時の光景が浮かび上がった。

ある家に、鎮座していた男装道具。

さも、当たり前のように天羽が用意していたことを思い出す。

（男装道具……。そうだ。私は女で、天羽が勝手に用意していて……。いやいやでも、私自身も男装するって宣言していたし……。あれ？でも、確かこれって天羽が私を勘違いして用意していたやつで……。ん？てことは、天羽は私が最初女装していたと思っただってこと？あははは、そんなはずないよね？冗談に決まってるはず！！！！）

さっきまでの恐怖はどこへやら、サノの心は今、天羽に対する怒りでいっぱいだった。

もし、そのことを天羽が知ったら、喜ぶのだろう。

『そんなに、わっちのことを思ってくれてたんかえ？ほおほおう

！寂しがり屋さんやのお！！』

（クソう！！天羽のお蔭とか思いたくないけどさ・・・なんか、落ち着いてきたな。）

天羽に対する怒りの思いを打ち消すように、深呼吸を一つ。

そしてサノは、いまだに心配そうにしている赤朔にもう大丈夫だと伝える意味で微笑んだ。

それに対して、赤朔は驚いたような顔をした。

まさか、微笑むとは思っていなかったのだろう。

（赤朔・・・悪かったな。でも、大丈夫だ。もう、自分を見失ったりしない。）

サノの思いが届いたのか、赤朔はほっとしたような表情をして頷いた。

サノは、舞台に目を向け、瞼を瞑る。

外界からの音を全て聞き取れるように、神経を研ぎ澄ませた。

そして、昔、実の父親が生きていたときに御まじないだと上げていた言葉を口にする。

（ただの気休め・・・お父さんはそう言っていたっけ？）

「我汝を戒める刃とならん。主よ我望み叶うることを望むべし。我彼の者を救う者なり。」

なんのために言っていたのか、これまでは分からなかった。

ついでに、今だって分からない。

だいたい、どうして父親の御まじないを思い出したのかもわから

ないというのに、勝手に記憶が呼び覚め、そして口にしていた。

気付いたら歌を口ずさんでいた、というそんな感じだろうとサノはあまり深く考えないことにした。

そして、きつといつか分かる時がくるといいなあと気持ちを楽にした。

「サノさん、その言葉……。どうして、知っているんすか？」

赤朔は、啞然とした表情でサノを見やった。

その表情をみてサノは不思議そうな顔をした。

「どうしてって。お前こそこの言葉を知っているのか？」

「だって、それは……。護子が陰と戦うときにいう宣誓の言葉ッスよ。」

「へえ〜。何か大事な言葉みたいだけど、俺にとつては、ちょっと意味が違うかな。なんせ、これは御まじないだからな。」

「お、御まじない！？ 始めの一文で『戒める刃とならん』と言っているのにすか？」

「うん？ そういえば、そうだな。まあ、気にするな。」

「いや、気にするなって……。」

「そんなことより……。だ。今すべきことは、コノハを！ 村を！ みんなを助けることだろう！！」

こぶしを作り、元気よく答えるサノに赤朔は肩をすくめた。

「さっきまで、元気がなかったのに、いったい何があったんツスカ。」

「気にするところではない。」

寧ろ気にするなというようにサノは、赤朔に背を向けた。

赤朔は、そんなサノをみてため息をひとつ。

「まあ、元気になったんならいいんですけど。」

その言葉を聞きながら、サノはもう一度瞼を閉じた。

S o h v h g g e 7 0 u a o f g j h a d k g j n f o a 9 r t 0
r 9 u t p a r j p f j g f p a o a - 0 - 3 i p j t p a j j p
|

耳障りな雑音ノイズがサノの耳にこびりついた。

しかし今度は、その音を受け入れた。
瞼を開ける。

視界に入るのは、真っ赤な水たまりの数々。

そして、ヒトだったモノの一部がバラバラと散らばっていることに気付く。

（目を逸らしていたから、見えなかった。見ようとしなかった。でも、今度は受け入れよう——受け入れるんだ。例え再び、逃げたとしても何度でも立ち向かってやる！）

「改めて——赤朔・・・行くぞ。」

サノはそう言い、腰から刀を抜いた。

未だに、穢れを知らぬその刀は、見事に刃を輝かせていた。

そして、サノは歩みを進めた。
それに、続くように赤朔もサノの後ろから続く。

O a h d o f j o a i e t : : a : s o d p f j i p e i u r o 4
7 0 5 3 4 u p a j - i @ a k f p a j f j

ヒトの悲鳴すら聞こえなくなった空間に、ノイズと2人のヒトの
足音が響き渡った。

27話：立ち上がる時（後書き）

天羽だけで、コメディになります。

今回は、天羽の助け？により立ち直ったサノ。

次回、敵とご対面・・・と行きたいです。

あ。あっち側（地球）はその次らへんに投稿します。

久々に、亜樹たちが書けます。コメディ全開・・・で行きたいです
ねえ！

28話・まわれえ右!! (前書き)

敵将と会いまみえる・・・たかったのですが、無理でした。

28話：まわれえ右！！

今まさにサノは、回れ右をして帰りたかった。

どこに？と問われると困るのだが、とりあえず回れ右をして今見ている光景を見なかったことにしたかった。

（どーした私！さっき、もう逃げないとかほざいていなかったか！なのに何逃げようとしている！！踏ん張るんだ！！）

サノと赤朔がいるのはとある小屋の裏で、そこに身を隠していた。小屋の前には、背を向けた陰の集団が蠢いている。

大小様々な大きさをしており、形もてんでバラバラ・・・ちなみに、サノが苦手とするある形の陰もいた。

（うわわあああ！くねくね動いているよぉ～！）

内心涙目なサノに気付いたのか、それとも腰が引き気味なのを見ただためか赤朔はサノの方にポンと手を置いた。

「サノさん。腹決めてください。いくら、虫がきら・・・ぐほお！」

赤朔に最後まで言わせまいとサノは腹にいつぱつ肘鉄をくらわせていた。

とても自然に・・・流れる動作で。

「あ、わりい赤朔。なんかさ、聞こえちゃいけない死語が聞こえちゃってさぁ～」

頬を掻いてテへ と笑ってごまかすサノに赤朔は引きつった顔した。

「そこまで嫌いですか。 . . . それに死語って、意味変わってますよね。」

痛む腹を押さえながらボソツと呟く赤朔を軽く無視することにしたサノは、なるべくソレを視界にいれないようにして現状把握を始めた。

陰は今、自分たちに背を向けている。何か始まるのを待っているようにも見えたりする。

「どうする？俺的には背後から不意打ちっていう手が得策だと思うんだが。」

得策といっても、サノにはその戦略方法しか思い浮かばない。それに対して赤朔は首と振りつつ言った。

「それが一番いいんすけど。大将見つけてからじゃないと . . .」

(大将 . . . あ、あれか！戦国時代でいう將軍で、それを倒せば一件落着というわけか！まさしく戦国無 だな！)

「將軍のことか！よし、それらしい奴を探すぞ！」

サノの言葉に目を丸くした赤朔は、待ってくださいと止めた。

「將軍は敵ではありません！逆です！仲間ですよ！！」

サノは必死に訂正する赤朔に若干引き気味になりながらも、そうかと訂正を認めた。

きつと赤朔にとつては將軍は神のような人なのだろう。目がまさ
にそれを語っている。

ちなみに、サノにとつては歴史上の人物は名前を覚えるのが精い
っぱいで戦国無も、名前を覚えるために買ってやっているような
もの。

日本史は苦手オーラがでていたのか、それに対して赤朔は、長々
と説教をしようかとしていたため慌てて話題を変えることにした。

「赤朔見る！あの白い奴が敵将じゃないのか！」

焦りながらいつの間にかノイズが止まり陰の前に現れた白いヒト
を指して言う。

白いヒト．．それは陰のように黒くなく陰と対照的な白さを肌
髪、着物さえも一色に染まっていた。

（髪の長さからして女かな？瞳の色はさすがにここからじゃ見え
ないか。）

「！！！！アイツは！」

サノの指さした人物をみて赤朔の表情が強張った。

「知り合いか？」

知り合いかと問うサノに赤朔はブンブンと首を振った。

「そんないいものじゃないツスよ。アイツはヒトじゃない。アイ
ツは神に近い存在なんです。」

「神……。神！？居たのか！」
「え……。そこ突っ込むんすか。ああそうか。サノさん記憶喪失
でしたもんね。」

サノの恐ろしい発言に驚愕しながら、ふと思い出し方のように頷
きながら赤朔は自己解釈した。

「にしても、重度の記憶障害ですねっとお！」
「記憶喪失だっつてんだろお！」

サノは今ほどヒールを履いていればよかったと後悔したことはな
い。

ヒールだったら、肘鉄と同じ程度の痛みを与えられたのに……
とサノが思ったとき赤朔は身震いをした。
自分の身が危険だと察知したのだろう。

そんなこんなで静かに騒いでいると、凜とした声が響いた。

『ここに集いたる我僕たちよ。』

両腕を広げるようにして白いヒト……。神は陰に呼びかけた。

『今日こそ我愛しき者を救いだし我のもとへと連れてまいれ。』

白き神の言葉にサノと赤朔は顔を見合わせた。

神にとっての愛しき者がこの村にいるというのだろうか。
この血塗られてしまった村に。

『我最愛の人……。邪魔するものがあるならば消すことを許そう。
さあ！！再び世に混乱を生み出そうではないか！！』

白き神の言葉に陰たちはノイズで喝采した。

「赤朔・・・一つ聞いていいか。」

白き神を見つつサノは赤朔に問うた。

「アレは神か？アレが神か？」

サノの声は震えており、それは怒りからであることが見て分かる。

「アレでも神なんです。唯一下界に降り立った神。見たものを残虐に消し去るとも言われ恐れられているツス。」

「その恐ろしい神が今回の敵将かあゝ。初戦がそんな相手とはあゝなんて喜ばしいことやら。」

ふふふふと笑うサノに赤朔は目を見開いた。

「恐ろしくないんスか？神なんスよ！」

「恐ろしい？アホらしい。勘がな・・・生かしておくなど言っておる。」

（女の勘だけどね。なんんか、ム力つくんだよ！！！！）

不敵に笑うサノをみて赤朔は一步後ずさった。

「言葉遣い変わってるツスよ？・・・あ、無視スか。てか、もう

眼中にはアイツしか見えてませんね。」

肩を落とす赤朔に今度はサノが肩に手を置いてニヤリと笑う。

「さて行くつか。戦とやらを防ぎにな。」

(ああ——あの歪な形の陰よりも、今は白き女を滅することを
思うと楽しみで仕方ない。)

そんなことを考えているサノに気配で分かったのか、赤朔は何故か陰に憐れみを持ってしまった。

(サノさん．．こええ。一体何があったっていうんだ！アイツ
よりもサノさんの方がこええよ！！)

などと、赤朔が思ったのは言うまでもないだろう。

28話：まわれえ右！！（後書き）

白き女⇨ライバルと確定してもいいのやら。

そもそも、今回は敵将と合戦するはずだったのに・・・。

次回は亜樹たちのほうへと戻ります。（そろそろコメディほしくな
いですか？）

その次に合戦します。

女（男装）と女（神）の戦いです。

29話：頭にお花畑がある人たち（前書き）

初めのほうは、わけがわからないと思いますが……まあ〜うん。

そういうことなんです。

……1か月近く更新が途絶え始めた今日この頃。いえ、前からですね。

待ってくださっていた方、本当に申し訳ないです。

少しでも楽しんでいただけたら光栄です！！

29話：頭にお花畑がある人たち

さて、いったいどういうことなんだろうか。

それが、僕が最初に思ったこと。

僕は今まで、家のリビングにいたはずなのに、今はよくわからない風景が目の前に広がっていた。

夢を見ているのだろうか？

もしかしたら、雅人と会話しながら寝ちゃったとか……。そんな間抜けじゃないことを信じたい。

今、僕の目の前に広がる景色はどこかの民族の家であるらしく、教科書でしか見たことない置物や巫女の姿をした女の人がいた。

祭壇らしき置物に向かって必死に祈っているように見えるこの光景は、何故だかすごく焦る気持ちにさせた。

いったいこの人は誰だろう？何故僕はこんなところにいるんだろう？

それらの疑問が僕の思考を支配する。

『おや、目覚めたんかえ？』

『はい。いろいろとご迷惑をおかけします。』

巫女姿の女の人から声が掛けられた。

それに僕が答えるまでもなく、僕の口から勝手に言葉が発せられる。

啞然としながらも、とりばぁーと呼ばれた巫女はゆっくりと後ろ

を振り返った。

つまり、僕の方に身体を向けたのだ。

『いんえ、わしの方こそ迷惑をかけたのう。力が足らんばかりに結界が破られてしもうて。今は、そなたのお蔭でこの社だけは守られておる。』

とりばあーの言葉に僕は、いや・・・僕じゃない僕が首を振った。

それにしても、若い巫女の姿をしているのにもかかわらず発せられる言葉や身にまとう優しげな雰囲気は老人特有のもののように感じた。

長年生きている証のような感じがするんだけどなあー。
見た目に騙されるなっということかな？

『僕の方ではこの社に結界を張ることしかできませんでした。』

『よいよい。わしも今はここにいない佐乃助も赤朔も助かったんじゃ。』

佐乃助・・・聞いたこともない名にもかかわらず、何故か心臓が脈打った。

『そうだ！！サノはどこに！？赤朔までいないなんて・・・』

『サノと赤朔は、そなたを助けるべく陰を滅しに行きおった。』

『！！！！赤朔はまだしも、サノにそんなことができるわけないじゃないですか！！！そもそも僕は今起きているのに・・・。あれ？なんで起きれたんだらう？』

どうやら、赤朔というやつはそこそこの実力があるようだが、サノと呼ばれる人物は勢いだけで陰といわれるやつらを倒しに行った

らしい。

樹みたいな性格をしてる・・・樹は、猪突猛進だからなあ。

『それはのう・・・片割れが帰ってきておるからなんじゃ。』

『片割れ・・・帰ってきている・・・。』

『ふむ。二分した世界が引き合い始めているということじゃの。』

『では・・・』

『いんや・・・』

僕にはさっぱりわからない話を始めてしまった2人の会話が途切れ途切れにしか聞こえなくなり、次第に景色もぼやけてきた。

この感じは・・・授業中だんだん意識が薄れていく感じに似ている。

いったいなんだったんだよ!!

今度はその疑問が頭を支配した。

* * *

「でよーー。」

間抜けな声が耳元で聞こえた気がした。

気のせいだろうと思いつつそのまま目を閉じる。

「いや、あの～亜樹ちゃん？人の会話中に寝んでもよくね？」

うん。この声は雅人の声だ。

それを理解すると一気に意気消沈した。

「お前が長々とくだらない話をするからだろ！お蔭でこっちは、変な夢まで見てしまった。」

「へえ〜どんな？」

「言わないし、教えない。」

「もう！アキちゃんのイ・ケ・ズ（ハート）」

「雅人・・・地へ帰れ！」

人差し指で僕の額を突くまで付けてくれた雅人に最大級の笑顔で答えてやった。

「あ、いや、えーと・・・はい！亜樹先生、この笑顔は子供に悪いです！悪い影響を及ぼします！！」

「大丈夫だ。安心してよ、この笑顔はお前専用だ。」

「うれしくねーーーー！天使の笑顔の裏には般若の顔がある表情ほしくねーーーー！」

「受け取つてよ。友情の証だろ。」

「無表情もやめて。」

「ちなみに、無視もお母さんいやだなあ〜」

雅人の会話に乱入してきた母さんは、僕に抱き着きながら言う。僕は抱き着かれた腕をやりわり解きながら母さんの方をむいた。

「あれ？演劇は終わったの？」

「もう！！終わっちゃったわよ！！せつかく由衣ちゃんがノツてくれてたのに、亜樹ちゃんたち素通りしちゃうんだもん。ひどいわ！！」

「そうだよ亜樹くん。せつかくの名演技に参加しないなんておつくれてるう〜。」

ねー？と仲良く顔を見合わせる2人にいろいろと突っ込みたいこ

とがある。

「だいたい毎日やってるじゃん。それに、由衣先輩。自分中心の世界はいい加減やめてください。先輩の頭はいつもお花畑なんですから!!」

「ひどい！私これでもかわいい性格してるね？つてみんなに言われているのに!!」

「すっげえー遠回しに、バカにされてないか??」

由衣の言葉に雅人が突っ込む。

これで樹がいたらいつもの光景になるのに……。
今は樹がない。

・
・
・
・
・

由衣先輩を引き連れて、ついでに雅人までついてきたけど……
とにかく家に帰った。

玄関の扉を開けるとびっくり……まではしなかったけど母さんが倒れていた。

「叔母様!!」

倒れている母さんにすかさず由衣先輩が近づく。

この時、母さんの指がピクリと動いたのを僕は見逃さなかった。

「叔母様!!叔母様!!!!いやあああああ!!」

きつとこの場面は、母さんが何かの事故により息を引き取ってし

まったというところだろうと解釈をした。名演技をする由衣先輩を余所に勝手に人様の家のリビングでくつろぎ始めた雅人に一発見舞った。

「何、人ん家で勝手にくつろいでんの？」

「いや、いずれ俺もここに住むからさあ〜」

キランとでも音がしそうな輝く歯を見せながら雅人が言う。

雅人いわく歯は命らしい。虫歯は生まれてこの方ないというくだらないことまで思い出してしまった。

「冗談は寝て言って、むしろ今すぐ出てけ。」

僕は、ニコリと笑顔で玄関を指さす。

「そんな、ひどい！！親にも言われたことないわ！！」

「あるだろ！！何度もその現場を見たよ。」

「あ〜あれは、親じゃない。幻覚だ。いつも言うんだぜ？うちの子が亜樹ちゃんのように可愛ければ、亜樹ちゃんのように優しくければ、亜樹ちゃんのように頭が良ければ、亜樹ちゃんのように・・・てな？まあ、一部は猫かぶってるのになあ〜なんでばれないんだ？」

「それは人徳の差じゃない？」

「ひでえー。」

・
・
・
・

とここから、雅人の今までの恥ずかしい人生経験論を聞かされていたわけなただけだ。

気付いたら寝ていて、夢を見て、目が覚めたという話を夢の内容も交えて話した。

そう、結局母さんや由衣先輩ついでに雅人にまで話していた。母さんの巧みな話術によって無理やり言わされたというほうが正しいだろう。

「へえ〜〜〜。」

「雅人は、へえしか言えないんだね。可哀そう。」

「んなわけないだろ！マジで可哀そうな人を見る目で見んな！

あれだろ！！ようするに亜樹は夢の中でそいつと合体したわけだ！

！」

「へー！ー！ーんしー！ー！ーん！！みたいに？」

「そうそう、よくわかってますね由衣先輩！」

「あら？じゃあ美少年が美少年と合体したら美美少年になっちゃうわね！」

彼らの頭にはきつと宇宙人がいるに違いない。

だいたいなんだよ。合体って。気にするところそこじゃないだろ。そもそも、そいつの姿すら見てないのに声しかしていないのに何故美美少年になる？

……美美少年ってなんだろう。

「そんなことはどうでもいいから、樹がどうなったかを教えてくれるんでしょ！！」

美美少年の意味なんかどうでもいいんだっただ。

夢のことさえこの際置いといて、一番知りたい樹の居場所を聞くんだ！

「えつとねえ〜……………いつきちゃんは……………この

世界にはいませーん!!」

どつだ参ったろうといわんだかりにドドンと胸を張る母さんに僕は思考が停止した。

29話：頭にお花畑がある人たち（後書き）

合体・・・スーパーロボ！という変な単語が頭に浮かびました。
すみません、関係ないですよね。

今回の話は、何やらお母さんが知っているようですね。なんで知っているのかはまあ、そのうちお話としてでます。
絶対に！じゃないとお話がつながりません！！

更新は8月までにもう一話できるように頑張ります！

30話：腹の探り合い（前書き）

お、お久しぶりでございます。

お気に入り登録が、増えていることに驚き。

お待たせしてしまった読者様が、今回のご対面シーンを楽しんで頂ければ光栄です！

と言いつつ、修羅場ですのであまり楽しくないと思います。

戦闘シーンは次回から入ります！

30話：腹の探り合い

はぁーい！

私、イツキ。18歳の純粹なる乙女です！

え？何？キャラが違う？？もう！気にしちゃダメよう！

うふふふ…今私ってば、敵の大将とご対面してまーす！赤朔が雑魚をやってくれてるんだけど、時々「修羅場」とか聞こえてくるんだあゝ…えへ。

どういう意味なんだろうな。

ただ、見つめあっているだけなのに…例え、背後にバタフライが飛んでいても。

そう、樹こと佐乃助は神とも呼ばれる白い神とにらめっこをしていた。にらめっこという優しい言葉の皮を剥ぐと殺気を飛ばし相手の腹の探り合いという言葉が出てくる。

どうやって、相手の懐に飛び込み一発かましてやろうかなんてことは考えてはいない。

ただ、何故この村に来たのか。この村に白き神にとっての大切な人が本当にいるのか。

そもそも、こんなにも残虐に村を壊滅状態までにする必要があったのか。サノはそれが知りたかった。

相手はサノに殺気を飛ばす。

しかし、動こうとはしない。

サノは相手を見据える。

しかし、うごけない。

相手は動こうとすれば動けるのに動かない。サノは動こうとしても動けない。

このことで、相手と自分の力の差が明らかに分かる。でもサノは諦めない。

大切な人を守りたいから。

一度、赤朔が近づいて来て「修羅場」と言っただけで離れて行ったときだって、それほど緊迫した状態なのだと思います。

また、赤朔の方は離れて行くといっても、ただ陰をバツバツサと切り倒しているのだが、切り倒しても次から次へと出てくるから休む暇などない。

それなのに、こちらを心配する余裕があるということは、まだ元気のたろうと思うことにした。

(私は弱い。赤朔よりも弱い。)

そんなことは、当たり前のように承知している。それでも、女としての根性はある。なにより、女の第六感が告げているのだ。コイツの夢を叶えるなど！)

「お前はいつも邪魔をする。」

「何を言っている?」

白き神は、儂くポツリと呟いた。

何もない状況なら見惚れるほどの美しさを感じさせるものだったが、相手は神であり、否、死神だ。儂さが美しいなんて、言っただけでいい。

「あちらでも、こちらでも…。こちらのお前は生まれてすぐに、消したはずなのに。何故こちらに来た?何故あちらで生きるだけしない?欠落品が!」

サノは、白子さんの 言っている意味が分からなかった。分かる人間がいたらお会いしてみたいと思ったほどだ。

（あちら？こちら？ もしかして、白子さんは私が異界の人だっ
てことを知っている？そもそも、こちらの私は生まれた時に消され
ている。 全くもって意味がわからない。 意味が分からないば
っかりだが、そんなことより…だ。）

「欠落品てのは、どういう意味さ。 あんたの方がよっぽど欠落品
なんじゃねえの？」

欠落品という言葉は、頂けない。 サノ自身に思い当たる節がある
せいか、凶星でもあるからか、言葉に棘を含んでしまっていた。

サノがそう言つと、白子さんはギロリと視線を向ける。そこには、
儂さんなんてモノではない。美しさすら、影になる。

「この人形が！感情の一部を無くしたお前に！言われとうないわ
！！コノハはわたくしのもの！お前はサツサと傍の世界に戻り己の
死を待つが良い！」

サノは白き神の言葉に思考が止まった。

（人形？この女は私を人形と宣つたのか？此奴が…此奴が、我が
同胞を殺し、世界を分離するまで追い込み我を…私を彼の方から引
き離れた！許さない。許すわけにはいかない！）

「サノさん？つつツ！だ、大丈夫ですか？」

赤朔が、サノと白き神の雰囲気が変わったことに気づき心配した
のだろう。

しかし、サノからの返事はなかった。

サノはというと、ただ白き神を見据えたまま腰に下げている鞘から刀を抜いて構えようとしていた。

「サノさん？」

赤朔は目を丸くした。

サノから返事が返ってこなかったからではない。

サノが刀を構えたからではない。

赤朔が驚いたのは：サノの容貌が変わったことに、気づいたからだった。

「許すわけにはいかない。」

サノは刃を白き神に向け、一歩踏み出した。

30話：腹の探り合い（後書き）

サノの様子が変？…理由があるんです！

今回は戦闘シーンを入れられるように頑張ります。
全ては妄想により構成されています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0937j/>

世界のありかた

2011年9月16日00時18分発行